

京都府埋蔵文化財情報

第 68 号

粘土槲内への鉄製農工漁具の副葬 —庵寺山古墳の調査成果から—	荒川 史 魚津 知克 内田 真雄	-----1
中世菌部城と荒木山城守の居城について	高屋 茂男	-----12
浅後谷南遺跡出土の導水施設について	黒坪 一樹	-----17
南山城における渡来人集落の様相 —精華町森垣外遺跡の概観と問題点の指摘—	小池 寛	-----21
長岡京の大規模宅地—名神桂川パーキング・エリアの調査から—	野島 永	-----27
桂川右岸における石剣の出土例—東土川遺跡を中心に—	中川 和哉	-----33
平成9年度京都府埋蔵文化財の調査 —平成9年度発掘調査略報—	平良 泰久	-----39
18. 別荘古墳群・別荘遺跡	23. 余部遺跡第2次	
19. 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓	24. 長岡京跡右京第584次(7ANGND-1地区)	
20. 吉沢城跡	25. 長岡京跡右京第585次(7ANTGT-6)・ 第589次(7ANSKT-3)	
21. 菩提城跡(菩提東古墳)	26. 城山遺跡	
22. 太田遺跡第5次		
誌上遺物展示 5. 京都市内出土の近世陶器		-----61
長岡京跡調査だより・65		-----65
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧		-----68
センターの動向		-----69
受贈図書一覧		-----71

1998年6月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)埋葬施設全景



(2)南端の鉄製農工漁具出土状況

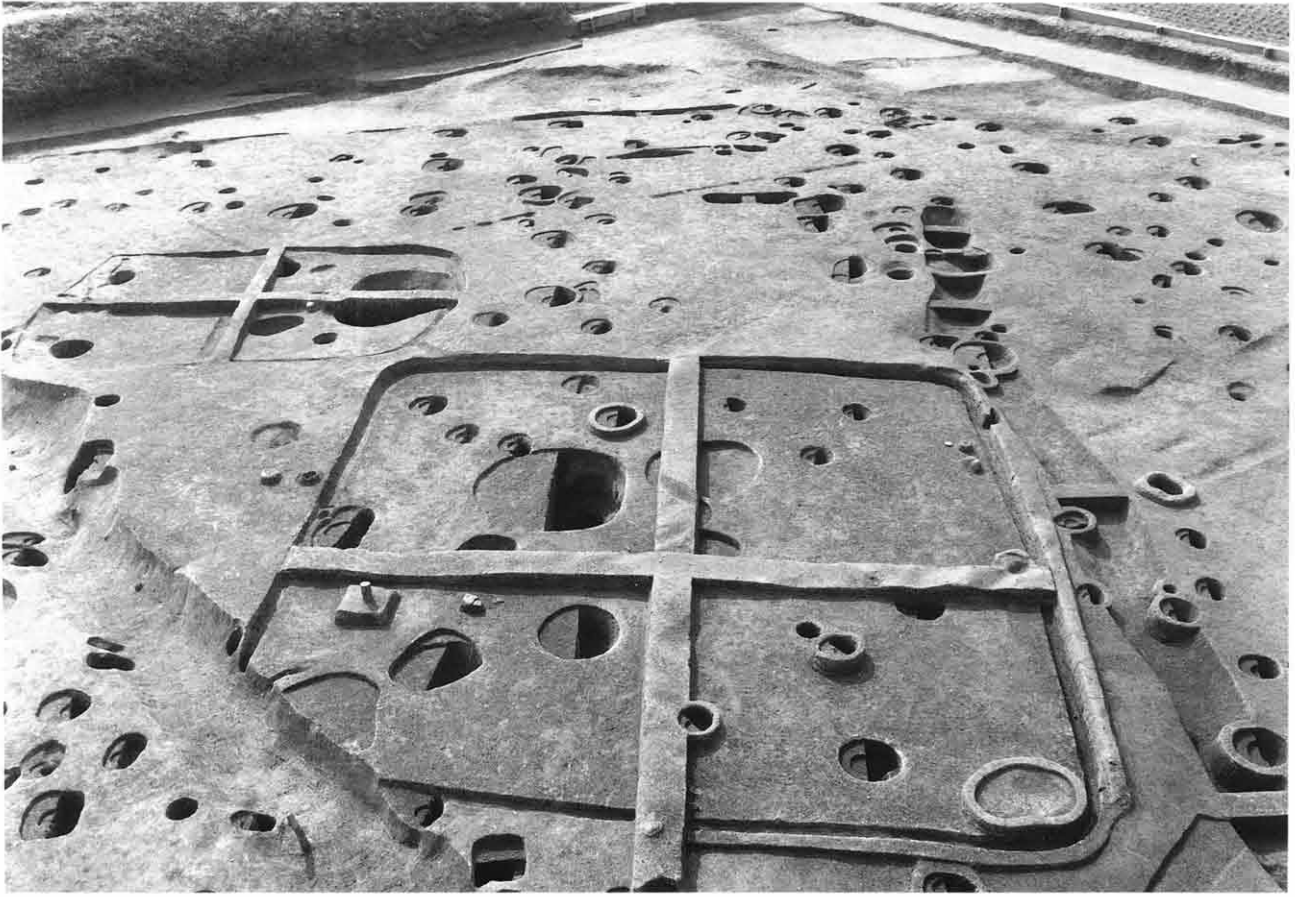
巻頭図版 2 南山城における渡来人集落の様相



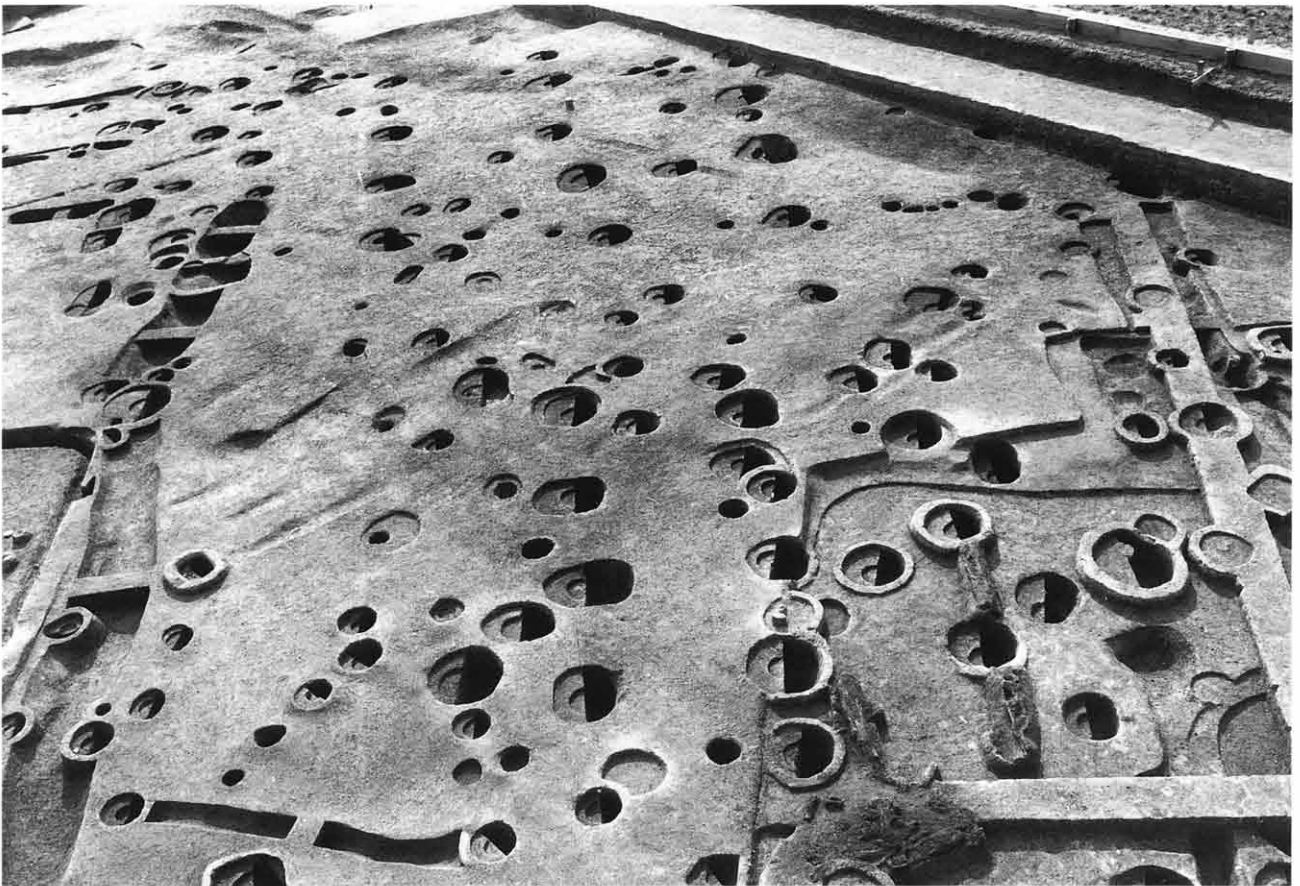
(1)A 1 地区全景（空中写真）



(2)A 1 地区南半部主要遺構全景（北東から）



(1)A 1 地区竪穴式住居跡17・18検出状況（北東から）



(2)掘立柱建物跡1・2・3検出状況（北東から）

粘土槲内への鉄製農工漁具の副葬

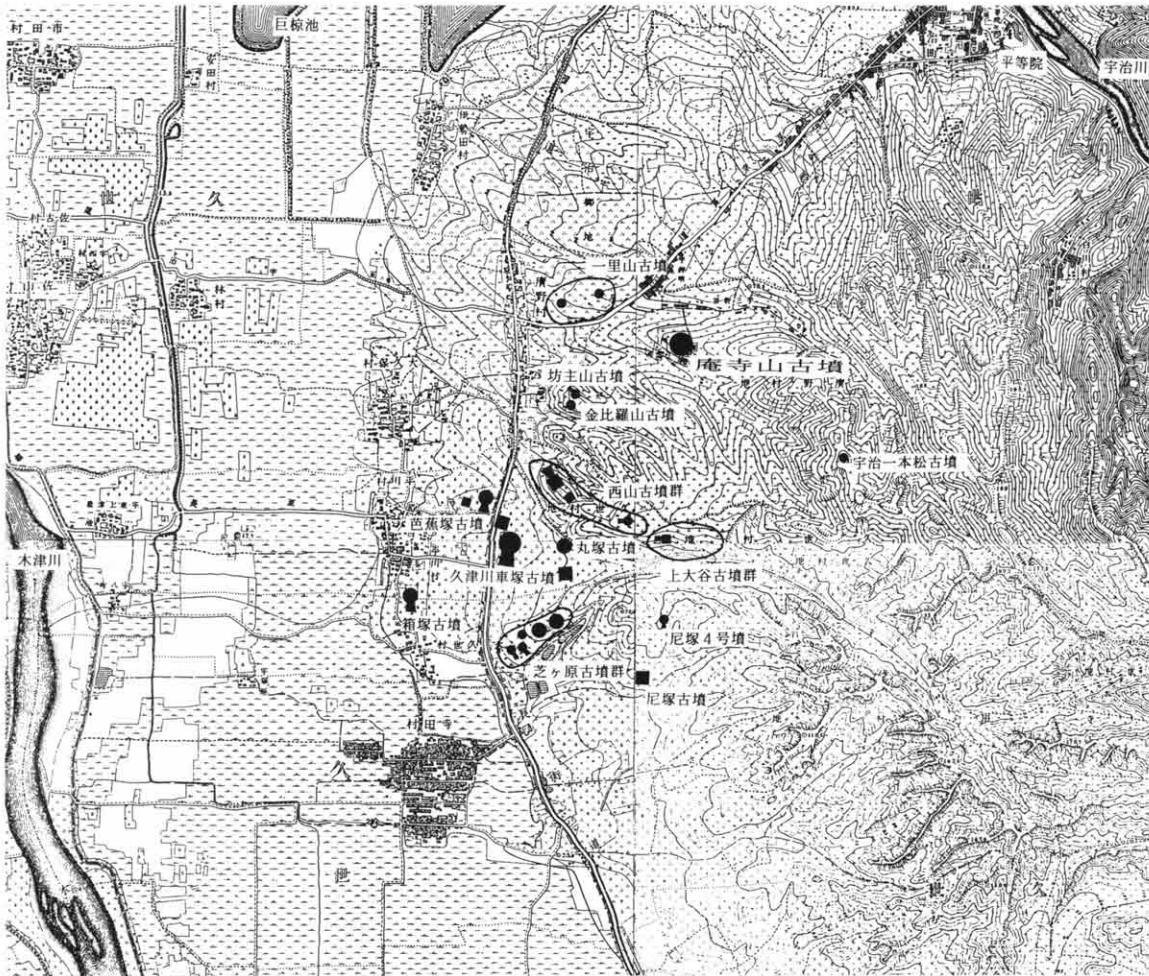
— 庵寺山古墳の調査成果から —

荒川 史・魚津知克・内田真雄

1. はじめに

年頭の新聞各紙をにぎわした奈良県天理市黒塚古墳の調査のように、近年、整備事業などを契機にして各地の主要な古墳時代前半の古墳が調査され、多くの新事実が明らかになりつつある。同時に、古墳時代前半の古墳の評価に対する多くの課題も生まれつつあるように思われる。

このような状況の中で、宇治市庵寺山古墳の発掘調査が一昨年に行われた。この調査の成果の概要報告については別稿にて^(注1)行う予定である。本稿では、別稿において詳しく触れることができなかった鉄製農工漁具の副葬状況や特徴ある鉄製農工漁具について述べ、さらに簡単な考察を加えることで、冒頭にあげた前半期の古墳に対する課題の一端を理解する糸口を見いだしていきたい。^(注2)



第1図 庵寺山古墳の位置(仮製地図1/20,000を50%縮小した)

2. 調査の概要

(1) 既往の調査

庵寺山古墳は宇治市広野丸山に所在する(第1図)。過去に3回の調査が行われている。最初の調査は1944(昭和19)年に小林行雄らによって行われ、現在京都大学総合博物館に所蔵されている蓋・靱・家・甲冑などの形象埴輪や鱗付円筒埴輪などが出土した。^(注3)

その後1975(昭和50)年に古墳周辺の宅地開発が計画された。かろうじて古墳本体は保存されることとなったが、墳丘裾が削られる事となったため、同年、山田良三によって古墳周囲の調査が行われた。この調査で、庵寺山古墳が直径56m、高さ9mの円墳である事が判明した。^(注4)

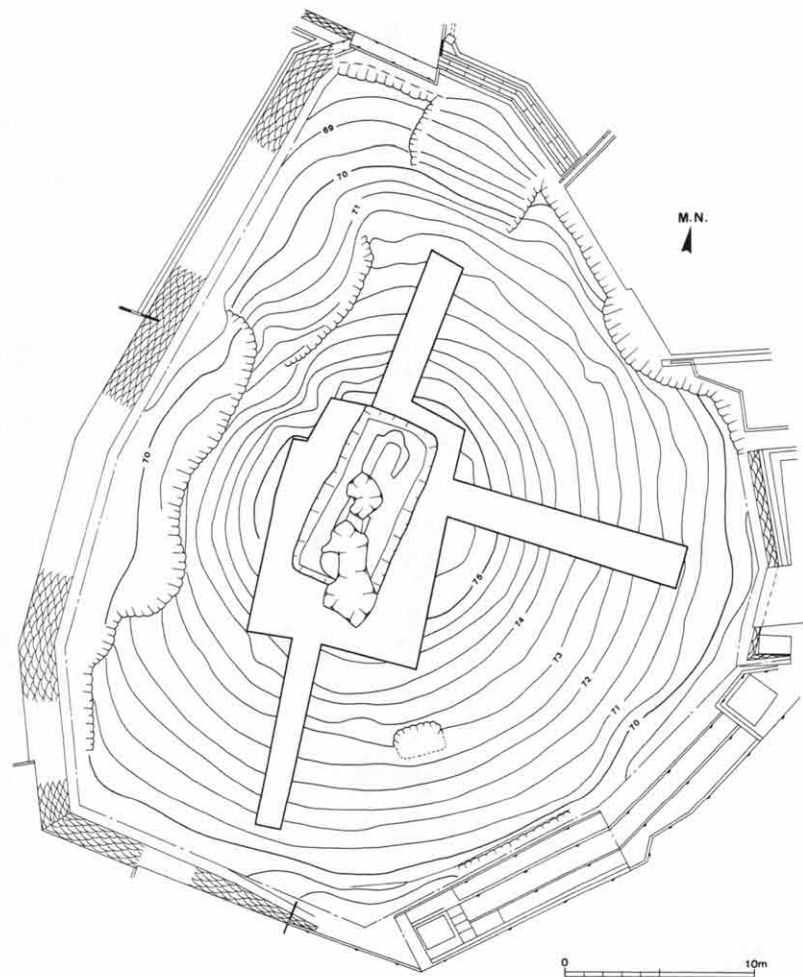
1989(平成元)年に宇治市教育委員会がおこなったのが、3回目の発掘調査である。この調査によって、墳頂の方形埴輪列が検出され、中央の盗掘坑からは家・甲冑・蓋など多くの形象埴輪の出土を見た。さらに埋葬施設が粘土槨である事も確認している。^(注5)

以上の調査によって、徐々に庵寺山古墳の実態が明らかになってきたが、埋葬施設の詳細な状況などはなお解明すべき問題点として残っていた。

(2) 1996年の調査

今回の発掘調査は、住宅地に囲まれた古墳現地の防災・整備事業に伴うものであり、1996年7月から12月にかけて行った。先述したように、調査の概要は別稿にて示しているが、全体像の理解の一助となるように以下簡単に述べておきたい。

墳丘及び外部施設
墳丘調査のトレンチを、削平された西側を除く東・南・北の3方向に設定した(第2図)。調査の結果、墳丘の構築については、標高72m付近を境にして上部が灰白色の砂礫・下部が赤茶褐色の



第2図 墳丘と調査区

粘質土を多用している事が判明した。墳丘築造工程の境界である可能性がある。

外部施設としては、葺石と墳頂の埴輪列が確認された。葺石は東側調査区においてその存在が確かめられ、拳大程度の河原石を用いている。墳頂の方形埴輪列については、1989年の調査においても一部を検出していたが、今回でも埴輪列内の円筒埴輪の樹立を確認している。方形埴輪列はほぼ東西南北を向き、東西4.8m、南北4m以上の規模である。1944年の蓋形埴輪出土地点も方形埴輪列上である可能性がきわめて高い。

埋葬施設 確認された埋葬施設は1基である。埋葬施設の主軸は墓壙と粘土槨との間に微妙なずれがあるもののほぼ北北東-南南西の方向であり、方形埴輪列とは約8度東に振れる点が注意される。ただし、繁雑さを避けるため、以下の記述では埋葬施設の主軸も南北方向であるとみなして記述を進める。

墓壙は南北9.6m、東西5.0mのほぼ長方形のものである。現墳頂から約1m下で、一旦、東西両側に幅60cm程の平坦面をもち、さらに約50cm下がって墓壙底となる。粘土槨小口側には平坦面をもたない点や、被覆粘土の翼状の広がりによって下段墓壙の大半が隠れる点に問題が残るものの、二段墓壙の一種であると捉えておきたい^(注6)。排水溝等は確認されていない。

粘土槨は、南北長8.4m、東西の最大幅2.0mの規模を持つ。中央部が大きく盗掘されていたものの南北両側、特に北側は良好に残存していた。下段墓壙底面に棺床粘土が平坦に敷設されているのだが、特筆されるのは、棺床粘土敷設以前の段階で下段墓壙底面に、主軸に直交する幅約20cmの溝が約3m間隔で3本掘られていることである。断ち割り調査の所見に基づくと、この溝の底に薄く粘土を貼った後厚さ3cm程度の角材が置かれ、角材上面を露出させたまま棺床が構築されたものとみられる。

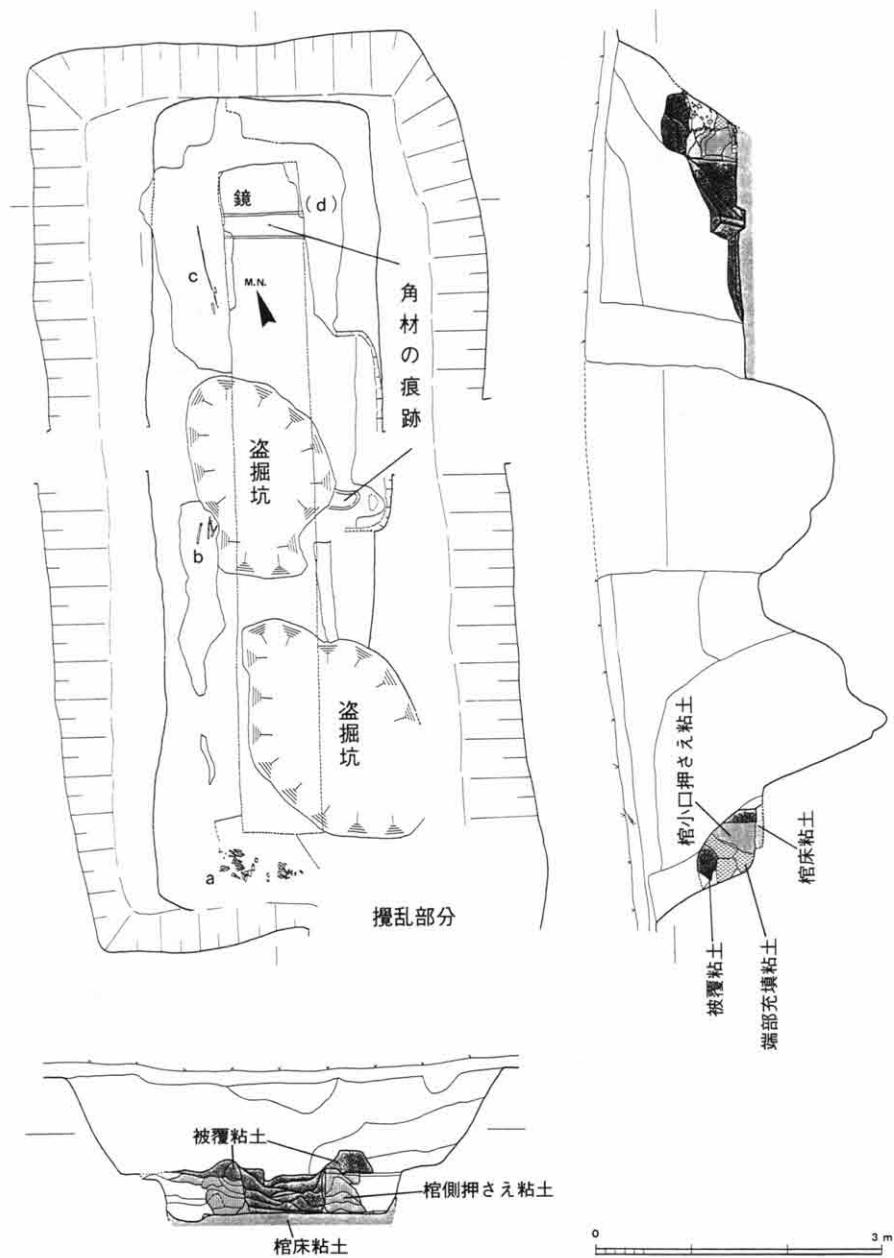
棺床の構築に続いて木棺が設置され、棺側の粘土が積まれる。棺床が全く平坦である事、棺側が垂直に立ち上がる事、さらに棺を被覆する粘土の一部が側壁からほぼ直角に内側に数cmせり出して残存していた事から、粘土槨の中に納められていたのは箱形木棺に違いない。箱形木棺の規模は長さ7.0m・幅0.8mで、底板が外側にせり出していた痕跡が僅かに認められることから組み合わせ式であると思われる。棺側粘土は棺両脇を押さえるものと棺小口を押さえるものがあるが、両者の前後関係を直接知ることはできなかった。棺側粘土のうち、棺両脇を押さえる粘土の構築は数単位に分けられ、最終段階では墓壙壁に向かってやや上り気味に翼状に薄く広がる。棺小口を押さえる粘土の構築過程については、次節で南端部分について述べる。なお、先に触れた棺床に埋め込まれた角材と棺や棺側粘土との関係であるが、角材の両側は棺側粘土の下に隠れるものの、中央では箱形木棺下面と直に接するようになっている。

被覆粘土の厚さは棺中央部では5cm程度であるが、北端においては一抱えほどの粘土塊が厚いところでは50cm近く積み上げられる。被覆粘土の両端は、棺側粘土上部と同様に翼状に薄く広がり、一部は墓壙平坦面を覆う。

副葬品 粘土槨は少なくとも3回の大規模な盗掘を受け、中央部を中心に広い範囲が失われていたにもかかわらず、残存部分からは比較的多種の副葬品が出土した。以下、次節で触れる鉄製

農工漁具以外の副葬品を概観して行きたい。

棺内から出土した遺物は仿製の対置式神獸鏡のみである。鏡は棺の北端から0.2m南の西側板に、鏡面を外側に、ほぼ垂直に立てたままの状態出土した。遺存状態が良好で、白銅色の光沢を保っている。面径16.7cm。内区紋様は、神像と両側の獸像とが基本図像となり、基本図像2単位で構成される。そして、内区の外側には半円方形帯が巡る。半円形と方形とは各々12個あり、半円形部はその中に凸線によって3つの渦を表現するものと花文を表現するものとが交互に配置される。一方、方形部の中は基本的に方形を重ねた紋様で充填される。方形紋様の表現が微妙に異なるのは、手本となった中国鏡の銘文を意識したためと思われる。半円方形帯の外側の外区は、



第3図 埋葬施設および副葬品の出土位置(被覆粘土除去後)

飛鳥文帯、複波文帯、鋸歯文帯で構成され、斜縁に続く。

棺外遺物のうち、棺の南側小口を押さえる粘土の中(第3図a)から出土した鉄製農工漁具については次節で触れる。この他に、棺側を押さえる粘土及び棺の被覆粘土の中(第3図b～d)から鉄製の刀剣および刀子が出土している。

中央西側(b)および北西側(c)においては、棺側粘土のうち端部が翼状に広がる最上部の粘土の構築がほぼ終了した段階に副葬が行われている。中央西側では、刀4点が粘土の傾斜に合わせて棺方向に落ち込むような状態で出土している。全長18cmから25cmの短刀である。北西側では刀2点・剣1点・刀子1点が出土した。刀のうち完形品の1点は、鞘等の木質を伴わずに刃を立てて副葬され、もう1点は先端部分だけが副葬されていた。また、北東側(d)では数層に分けられる被覆粘土のやや上よりの層の合わせ目に、刀3点・剣1点が出土した。刀のうちの1点(第5図1)は全長約63cmのもの、他は全長15cm・22cmの短刀である。

これまでに述べてきた副葬品と、次節で触れる鉄製農工漁具とを併せた、今回の調査で確認された副葬品の総数は以下の通りである。

鏡1 刀9 剣もしくはヤリ2 鋏・鋤先3 鎌7 穂摘具18 斧5 鑿3 錐2 鉈3
刀子11 不明工具1 釣針3 ヤス1組

3. 鉄製農工漁具の出土状況および特徴

(1) 出土状況

先述したように、鉄製農工漁具は、棺外に当たる粘土槨南端から出土したのであるが、被覆粘土を検出した段階ではこの地点には分厚い被覆粘土が墓壇壁まで伸びており、内部に副葬品が存在しているとは全く予想しえなかった。木棺南端の位置を確定するための断ち割り調査を行って初めて粘土の中から鉄製農工漁具が次々と検出されたのである。

巻頭図版に示したように、鉄製農工漁具は平面的には木棺の南小口を押さえる粘土の外側に配置されていた。第4図に鉄製農工漁具の検出状況を示した。東から穂摘具、鎌、鋏・鋤先、斧、刀子、ヤス、錐、鉈、鑿、釣針が各々向きをそろえて整然と配列されている。鎌と鋏・鋤先との間には20cmほどの空間があるが、恐らく本来鎌の柄が存在していたと思われる。周囲にはかすかながらもほぼ一面に赤色顔料の塗布が見られたものの、鉄製農工漁具を収める箱などの痕跡はなかった。木棺との位置関係を見ると、復元される棺の中軸線よりもやや西に寄っており、盗掘坑によって削られている東側部分にも副葬品が存在していたことが十分に考えられる。しかし、出土した鉄製農工漁具は古墳時代前期に存在するほぼ全器種を網羅しており、あったとしても他の種類の品であろう。

各種の鉄製農工漁具の出土状態を詳しく見ていきたい。穂摘具の出土レベルにはやや幅があり、鎌の直下もしくは同じ高さに水平におかれた一群と一部が立った形で出土した上方の一群とに大別される。鎌は残った木質や折り返しの向きから、柄が平行に並べられていたものと考えられる。鋏・鋤先に付着した木質の延長上には、身や柄のものと思われる圧痕が見られた。斧はいずれも

刃先を下に向け墓壁に立て掛けてあった。3点に木質が良好に残存し、うち2点は次節で述べるように組み合わせ式の柄であることが確認された。刀子は柄を揃えて実に整然と並べられていた。刃渡りの長いものが南側、短いものは北側に区別して配列されている事が注意される。ヤスは鉄製の頭を水平におく。柄は鉄製部分に接した箇所以外明確には確認できなかったが、痕跡は部分的に存在した。釣針は一部が粘土下の小礫の間にはまり込んで出土している。

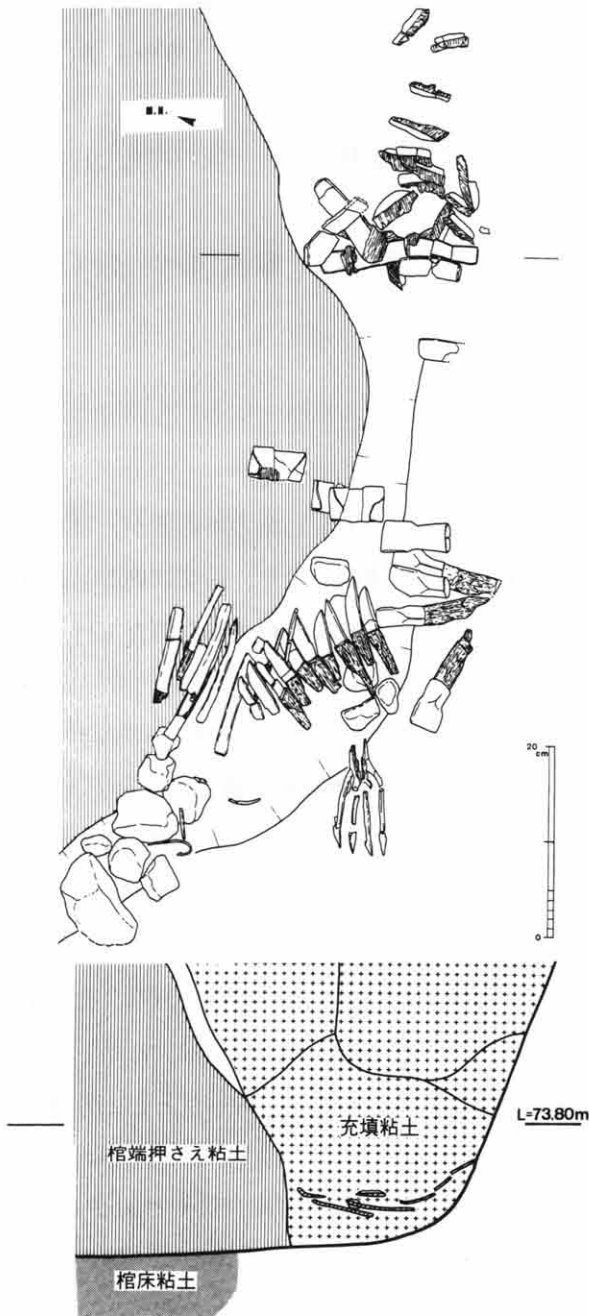
さて、これらの鉄製農工漁具は、いったい粘土槨南端部分の構築のどの段階において配置されたのだろうか。第3図右の南北方向断面図によると、粘土槨南端部分では、①墓壁を掘り込み、②棺床粘土を敷き周囲に小礫を置き、③木棺を設置する。そして、④木棺南小口を直接押さえる粘土を設置し、⑤木棺押さえの粘土と墓壁との間を粘土で充填して、⑥棺を粘土で被覆し、最後に⑦墓壁を埋め戻すといった順序で構築が行われている。

鉄製農工漁具は数層に分けられる⑤段階の粘土のうち最も下層の粘土の中から出土しているのである。残念ながら、土圧などによって極めて密着した一塊の粘土の断面観察による分層は非常に困難であったため、断面図においては大まかな分層しか呈示できていない。このため、第4図下の断面図を一見すると鉄製農工漁具は粘土の中に塗り込められたようにも感じられる。しかし、先に述べたように鉄製農工漁具は非常に整然と配置されており、周囲の赤色顔料もほぼ水平かつ均一に塗布されている。こういった状況を踏まえると、鉄製農工漁具の配置は1単位の粘土が積み上げられる途中に行われたと考えられ、ほぼ全種類の鉄製農工漁具を平面的に並べることが強く意識されていたものと思われる。^(注7)

(2) 出土した鉄製農工漁具の特徴

すでに前節の末尾において、今回の調査で出土した庵寺山古墳副葬品の全容を示した。粘土槨南端から出土した鉄製農工漁具を再度確認すると、以下ようになる。

鋏・鋤先3 鎌7 穂摘具18 斧5 鑿5
錐2 鈿2 刀子10 用途不明工具1 釣



第4図 鉄製農工漁具出土状態

針3 ヤス1組

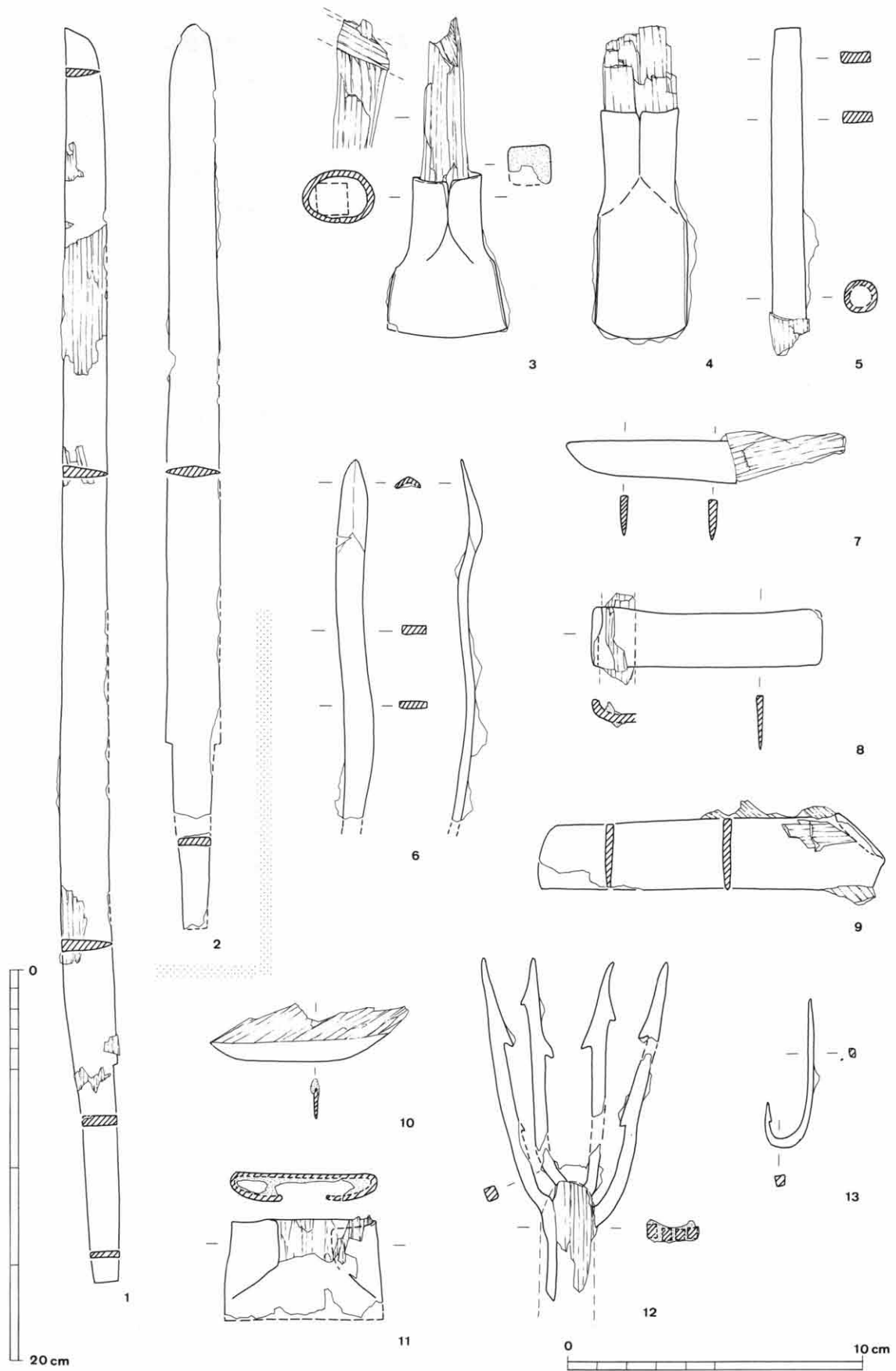
各品目の概要は別稿にて示している^(注1)。総体的に三重県上野市石山古墳副葬品^(注8)や大阪府豊中市豊中大塚古墳第2主体副葬品^(注9)などとはほぼ型式組成が一致しており、古墳時代前期末から中期初頭の年代が与えられよう。ここでは、とくに注目される鉄製農工漁具を中心に述べてゆきたい。

農具 農具には鋏・鋤先、鎌、穂摘具がある。鋏・鋤先は方形折り返し鋏・鋤先、鎌は直刃鎌である。鋏・鋤先と鎌は、着柄部分が非常に華奢にできており、副葬用に製作された模造品である可能性が高い。

農具の中で、形態的にとくに注目されるのは穂摘具である。庵寺山古墳に副葬されていた穂摘具は、板状の台に彫った溝に鉄刃を埋め込んで使用する、鉄刃に折り返しの無い型式のものであり、このような形態の穂摘具鉄刃自体は、近くは京都府宇治市宇治二子山古墳北墳出土品^(注10)など、すくなからぬ類例が知られている。だが、従来の類例では付着する柄の木質はいずれも刃先と平行に木目が走るものであるのに対し、本例のように斜めに木目が走るような木質が付着する鉄刃は管見に触れていない。古墳時代前期における鉄製穂摘具の台は基本的に木製穂摘具とはほぼ同一形状だが、木製穂摘具を単体で穂摘に使用する場合は斜めに木目が走る方が都合が良い。一方、鉄刃を装着する場合は台の部分が稲穂などに直接当たらないから木目を斜めにする必要はない。むしろ、鉄刃装着用の溝を鑿や鋸などで作るときの手間を考えると、台の部分の木目は刃と平行に走るほうが好都合である。つまり、本例のごとく木製穂摘具の特徴を濃厚に有したまま鉄刃が装着されているものは、型式学的には木製穂摘具に鉄刃が装着されはじめた段階に位置付けられるべきものである。穂摘具の鉄器化は九州北・中部から瀬戸内海沿岸にかけては弥生時代後期後半から終末にかけ急速に進展したとされる^(注13)。近畿地方においても、奈良県田原本町保津・宮古遺跡出土の古墳時代初頭の鉄刃装着例^(注14)があり、奈良県桜井市メスリ山古墳からは折り曲げを有する型式の鉄製穂摘具が多く出土している^(注15)ため、古墳時代前期にはほぼ鉄器化が完了していたとされてきた。しかし、庵寺山古墳例は、近畿地方における穂摘具の鉄器化が古墳時代前期末でも貫徹されていなかった事を示唆しているのである。

工具 斧、鑿、鉋、錐、刀子、不明工具が出土している。斧はすべて有袋で有肩・無肩の両者がある。鑿は1点だけが有袋でほかは有茎のもの、不明工具は石山古墳副葬品^(注8)のなかにほぼ同一形態のものがある。

特筆されるのは、全形がある程度推測できる状態で、斧に伴う木質が良好に残存していた事である。5点のうち4点に木質が確認され、うち3点の木質が良好に遺存している。なかでも、第5図3の有肩斧はきわめて木質の残りが良く、斧台に孔をあけて柄の頭部先端を挿入する横斧であることが明瞭に観察できる。また、もう1点の無肩斧(第5図4)についても、同様の組み合わせ式縦斧であったことが出土時に観察された。これらは、上原真人^(注16)分類では「頭部差し込み膝柄」(B I 式)に該当する。木器資料では、近畿地方におけるB I 式の有袋鉄斧柄は京都府福知山市石本遺跡の古墳時代後期の例がほとんど唯一であり^(注17)、庵寺山古墳例はB I 式の存続時期を考える上で重要である。



第5図 粘土槨内副葬の鉄器(1・2.北東側、 3~13.南端)

漁具 釣針とヤスが確認された。釣針(第5図13)は鐵を有する大型品で、ちもとは軸部に比べ若干先細りで終わる。軸部断面は方形である。ヤス(第5図12)は鉄製の頭が4本1組となる。4本すべてに中心線から対称的に逆刺が配置されるのだが、外側2本と内側2本とでは位置を異にする。外側では内向きに2つの逆刺を直列させるのに対して、内側2本は互い違いに逆刺が付けられる。外側2本が内側2本にかぶさるように平面的に並べて4本を組み合わせる。外側2本の方が内側2本よりも長いので先端はほぼ一直線である。着柄法は、恐らく柄の先端に切れ込みを入れて頭を挿入したと思われる。現状では着柄用の糸巻は観察されない。以上のような特徴を持つヤスは和田晴吾^(注18)分類の複式ヤスA2類に当たる。

4. 粘土槨内へ副葬された鉄製農工漁具の性格

以上、庵寺山古墳における鉄製農工漁具の副葬状況およびいくつかの形態的特徴についての概略を述べてきた。庵寺山古墳の鉄製農工漁具については、前節で示したように個々の形態的にも指摘すべき特徴を少なからず含んでいる。が、最も問題となるのが、庵寺山古墳にみられたような粘土槨内への鉄製農工漁具の副葬をどのように評価するかという点である。この点について若干の考察を試み、結びにかえたい。

先に述べたように、庵寺山古墳における鉄製農工漁具の副葬は、粘土槨の構築過程の中で木棺を直接押さえる粘土と墓壙との間に粘土を充填する途中に行われている。問題となるのは、同様に粘土槨内から出土した刀剣などの鉄器と鉄製農工漁具とはどのような時間的關係で副葬されたのか、また遺体の安置に代表される葬送儀礼のなかでどの段階で副葬されたのかという点である。残念ながら、中央部を中心に大幅な盗掘を受けているために、これらの問題を解明する直接的根拠は今回の調査では得られなかった。しかし、木棺周囲を直接押さえる粘土が構築された後に副葬品の配置が行われるという点では、中央西側および北西側の刀剣や刀子と共通性が高い。おそらくこれらの鉄器の副葬はほぼ同時に行われたものと考えられる^(注19)。一方で北東側の刀剣は被覆粘土の中から出土しており、先にあげた鉄器の副葬よりも明らかに後に副葬が行われたのは明白である。つぎに葬送儀礼のなかの時間的位置付けについてであるが、木棺を直接押さえる粘土が一旦構築されている点を重視するならば、遺体の安置は木棺押さえの粘土構築の直後であり、鉄製農工漁具の副葬は遺体安置の後に行われたと見なされる。しかし、粘土槨の断面観察からは異なるケースも想定できる。というのは、小口部分の端部充填粘土の上の作業面が、墓壙内の平坦面とほぼ対応するためである。庵寺山古墳には蓋が平坦な箱形木棺が収められていた事を考え合わせると、この土層の形成は遺体安置に伴うものであることが大いに考えられるのである。この場合、鉄製農工漁具の副葬は遺体安置に先立つこととなる。現段階では両方の可能性を併記するにとどめ、今尾文昭氏の副葬品配列の研究も参考にしつつ、今後さらに検討していきたい^(注20)。

視点を広げてみよう。すでに、棺外粘土槨内に鉄製農工漁具が副葬された事例はいくつか報告されている。このなかで庵寺山古墳の副葬状況はどの様に位置付けられるのだろうか。なお、現状では鉄製農工漁具を網羅的に副葬する古墳は限られているため、漁具を含まない鉄製農工具副

葬の事例も一括して扱うこととする。

棺外粘土槨内に鉄製品が副葬された事例として著名なのが大阪府和泉市和泉黄金塚古墳^(注21)である。和泉黄金塚古墳では棺側の棚状部分に鉄製農工具や鉄製武器が銅鏡などとともに配置されていた。庵寺山古墳においても、鉄刀剣などは粘土槨内棺側副葬であるのだが、鉄製農工漁具が粘土槨内でも南端に分別されて副葬されている点で異なる。

粘土槨内棺外小口に鉄製農工具が副葬されている類例としては、大阪府高槻市弁天山C1号墳^(注22)や京都府八幡市ヒル塚古墳^(注23)があげられる。弁天山C1号墳では排水溝と棺床との間に鉄製農工具が配置されている。一方、ヒル塚古墳では鉄製農工具を収めた木製合子が粘土槨内に副葬されていた。何れも葬送儀礼における副葬時期や副葬品の配置の仕方の点で庵寺山古墳例とは違いが認められるのだが、鉄製農工具の大まかな副葬位置では共通性が見いだせる。棺小口押さえ粘土が省略されているものの、大阪府富田林市真名井古墳の鉄製農工具副葬状況も類似するものである^(注24)。

粘土槨内において棺側に鉄製品を一括して副葬するものと、粘土槨内の棺側と小口とに器種を分別して副葬するものとはどのような違いがあるのだろうか。前段階における竪穴式石室内への鉄製品の配列の仕方も含めて検討すべき問題であるが、前者よりも後者のほうが個々の鉄製品の道具としての意味の強調が認められるように思われる。庵寺山古墳における鉄製農工漁具がほぼ網羅的かつ器種ごとに整理されて副葬された状況は、この意識が直截に働いた事が窺われるのである。おそらく、被葬者である地域支配者が死後も様々な生産活動を制御し続けることを、葬送儀礼において明示することが強く要請されていたのだろう。

このような前期古墳における鉄製品の副葬意識は、古墳時代中期に入ると変化が生じる。古墳時代中期前葉の宇治二子山古墳北墳においては、鉄製農工具の副葬位置が小口部分ながらも被覆粘土上面に変化し、ほぼ同時期の豊中大塚古墳や兵庫県加古川市行者塚古墳^(注25)のように粘土槨外の墓壇内に鉄製農工具が副葬される事例が現れる。ここに、葬送儀礼の主体と客体との狭間で副葬鉄製品の位置が微妙ながらも確実に動き始めた事が読み取られるのではないだろうか。

(あらかわ・ふみと＝宇治市歴史資料館)

(うおづ・ともかつ＝京都大学大学院)

(うちだ・まさお＝仏教大学卒業生)

注1 荒川 史・魚津知克・内田真雄「庵寺山古墳の発掘調査」『古代』105号 1998年

注2 本稿は、2を荒川・魚津、1・3(1)・4を魚津、3(2)を魚津・内田が執筆し、魚津が編集をおこなった。なお、魚津の執筆内容については、京都大学大学院文学研究科上原真人教授および同博士課程山本圭二氏にご教示をうけた。深く感謝申し上げる。

注3 当時のメモが現存していることが高橋克壽氏のご教示により判明した。埴輪の出土位置がある程度推測できる。

注4 山田良三『庵寺山古墳周障調査の記録』庵寺山古墳周障調査会 1976年

注5 杉本 宏「庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第15集 宇治市教育委員会 1990年

- 注6 竪穴式石室に伴うものであるが、京都府向日市寺戸大塚古墳後円部の墓壙が類例としてあげられよう(京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』54巻5号 1971年)。
- 注7 但し、穂摘具の一部については他の農工漁具を粘土で覆ってからやや乱雑に放り込まれたごとき出土状態を呈している。
- 注8 京都大学文学部考古学研究室(編)『紫金山古墳と石山古墳』 京都大学文学部博物館 1987年
- 注9 豊中市教育委員会『摂津豊中大塚古墳』 1987年
- 注10 杉本 宏他「宇治二子山古墳発掘調査報告」 『宇治市文化財調査報告』第2冊 1991年
- 注11 角度20度~40度と65度~85度との2群がある。両者は出土位置についても異なる点が注意される。
- 注12 すでに工楽善通氏の指摘がある(工楽善通「木製穂摘具」『弥生文化の研究』5 雄山閣出版 1985年)。
- 注13 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』 雄山閣出版 1993年
- 注14 寺沢 薫「収穫と貯蔵」(『古墳時代の研究』4 雄山閣出版 1991年)に記述がある。
- 注15 伊達宗泰・小島俊次『メスリ山古墳』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊 奈良県教育委員会 1978年
- 注16 上原真人(編)『木器集成図録近畿原始篇』 奈良国立文化財研究所史料第36冊 奈良国立文化財研究所 1994年
- 注17 辻本和美他「石本遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年
- 注18 和田晴吾「ヤス・モリ」『弥生文化の研究』5 雄山閣出版 1985年
- 注19 ただ、出土レベルとしては農工漁具が20cmほど低い。先述したように棺を押さえる粘土のうち棺側粘土と棺小口粘土との前後関係が明確でない以上、棺端の農工漁具が棺脇の武器類に先だって副葬された可能性も残る。
- 注20 今尾文昭「古墳祭祀の画一性と非画一性」『橿原考古学研究所論集』第六 吉川弘文館 1984年
- 注21 末永雅雄・島田 暁・森 浩一『和泉黄金塚古墳』日本考古学協会報告第五冊 綜藝舎 1954年
- 注22 「弁天山C1号墳」『弁天山古墳群の調査』 大阪府文化財報告第17輯 大阪府教育委員会 1967年
- 注23 榊井豊成(編)『ヒル塚古墳発掘調査概報』 八幡市教育委員会 1990年
- 注24 北野耕平「富田林真名井古墳」『河内における古墳の調査』 大阪大学文学部国史研究室報告第1冊 大阪大学 1964年
- 注25 加古川市教育委員会『行者塚古墳発掘調査概報』 加古川市文化財調査報告書15 1997年

中世園部城と荒木山城守の居城について

高屋 茂 男

1. はじめに

園部町には現在40箇所前後の中世城郭の存在が確認されている。^(注1) そのなかでもこの地域の中心的な城として従来言われてきたのは中世園部城である。

中世園部城に関する研究としては竹岡林氏のものがある。^(注2) 氏によると中世園部城は小麦山山麓に築かれた近世園部城の筆頭家老小出氏の屋敷跡一帯で、居館的色彩の強い平山城として築かれたものとされている。また『信長公記』に荒木山城守の居城が明智光秀等により水の手を切られ落城したとあり、これを中世園部城であるとされている。その他荒木山城守の居城について記すものの多くが、その所在地を船井郡園部と^(注3)している。

しかし荒木山城守の居城を園部としているのは『初井家日記』等の小説の類いの記録に見られる記述である。『信長公記』では荒木山城守の居城を園部城とは記していない。また中世園部城の存在自体も不審に思われる節がある。

荒木氏が波多野方として室町幕府の御料所である桐野河内村(園部町船岡周辺)へ押領を働いていることは、既に明らかにされている通りである。^(注4) それに際し、「荒木山城守の中世園部城」の存在の有無が重要な意味を帯びていると考える。そこでその存在の有無を確かめると共に、『信長公記』等の記す荒木山城守の居城の所在地について考察を加えたい。

2. 中世園部城の疑惑について

まず明智光秀等によって落城した荒木山城守の居城について見てみると、『信長公記』に「滝川、惟任、惟住両三人、丹波へ差し遣はされ、御敵城、荒木山城守居城取り巻き、水の手を止め、攻められ、迷惑致、降参申し退散。さて、惟任日向守人数、入れ置く」とある。^(注5) また「丹羽長秀書状」にも「丹州江相働、荒木山城守五間十間二取詰、水之手相止候条、落居可為五、三日中候」と同様の記述がある。^(注6) しかし、これが中世園部城であるとは記されていない。荒木山城守の居城が中世園部城とされる理由は、『初井家日記』に波多野氏の家臣組織が記され、七頭家の六番目に「園部城主荒木山城守氏綱」とある事や、^(注7) これを受けた『氷上郡史』や『高城軍記』『波多野盛衰記』等の記述に端を発するものと考えられる。

しかし従来から言われているように、『初井家日記』は小説の類いのもので信憑性はなく、これを受けた『氷上郡史』等も同様である。^(注8) これらを根拠に『信長公記』『丹羽長秀書状』に見られる荒木山城守の居城を中世園部城とするには根拠が薄い。

荒木氏の系図でも荒木氏綱が「園部城主」であったと記している^(注9)。しかし水上郡の荻野直正を波多野氏の家臣であるかのように記しており、信憑性の有無を論じるまでもない。その所在地と推定されている園部町の小麦山一帯は地形の変貌が著しく、当時の様相はつかみがたい^(注10)。また中世城郭としてもあまり適した地形とは考えがたい。また荒木山城守の居城は水の手を切られ落城したとあることから数日間の籠城戦に及んでいるのがうかがえるが、小麦山周辺で籠城戦にまつわる伝承もない。「中世園部城」という名称も近世園部城と区別するために便宜的につけられた名称で、近世園部城築城前に中世園部城が存在したことを示す一次史料も皆無である。以上の事から荒木山城守の居城を中世園部城としてきた従来の説に疑問を抱かざるを得ない。

3. 中世の園部村について

中世園部城が存在したとされてきた時期の園部村の状況を示す史料として『園部村天満宮文書』がある。

今度於黒田山、竹内弥五郎忠節出無比類、当本役分出申候間向後可在知行候 謹言
 天文十九年八月晦日 秀信(花押)竹内孫五郎殿^(注11)

為園部村下司跡目、貴所息虎満管領ニ給候、祝着至候、然者如下司時、作識諸路等事、無別儀申付候条、為後日一筆令申候、恐々謹言

永禄十三年 三月十四日 田中下野守 盛(花押) 竹内満介殿進之候^(注12)

園部村天満宮は、現在生身天満宮と称し、近世園部城の築造にともない天神山山麓に移建された。

上記史料より、竹内氏は園部村の下司職にあり軍役にも服す立場にあった事がうかがえる。『丹波志』によると竹内氏は園部村に住し天満宮に奉仕したとあり、園部城の郭内に竹内氏の古屋敷と天神の社地があったと記している^(注13)。

また江戸期に竹内善左衛門が園部落士に宛てた「差上ケ口上覚」^(注14)によると小出氏の入封に際し「私屋敷只今之所江被□仰付候」とあり、元いた場所は大田金左衛門殿の屋敷となったとしている。さかのぼって文明5年3月3日付の「小山村連署渡状」^(注15)においても竹内氏の存在が確認できる。現在、園部高校の東側の高まりに、同窓会館があるが、ここが近世の大田金左衛門の屋敷跡で、中世においては竹内氏の屋敷跡である。

園部村の領域は現在の小桜町、宮町、栄町、美園町と推定される。西部に小麦山が位置し、その東側山麓は台地状になっており、栄町や美園町を見下ろす地形となっている。竹内氏の屋敷はこの方面を意識した位置にある。これは小麦山の西方に園部川、半田川が流れており、江戸期に河川改修が行われる以前は河川のため居住には適さぬ地であったためと見られる。また竹内氏屋敷跡推定地の東側傾斜地に集落が密集しているが、城南町側のように企画性のともなった構造ではない^(注16)。これはもともとあった村落を近世に入り、外堀によってそのまま取り込んだ結果ではなからうか。

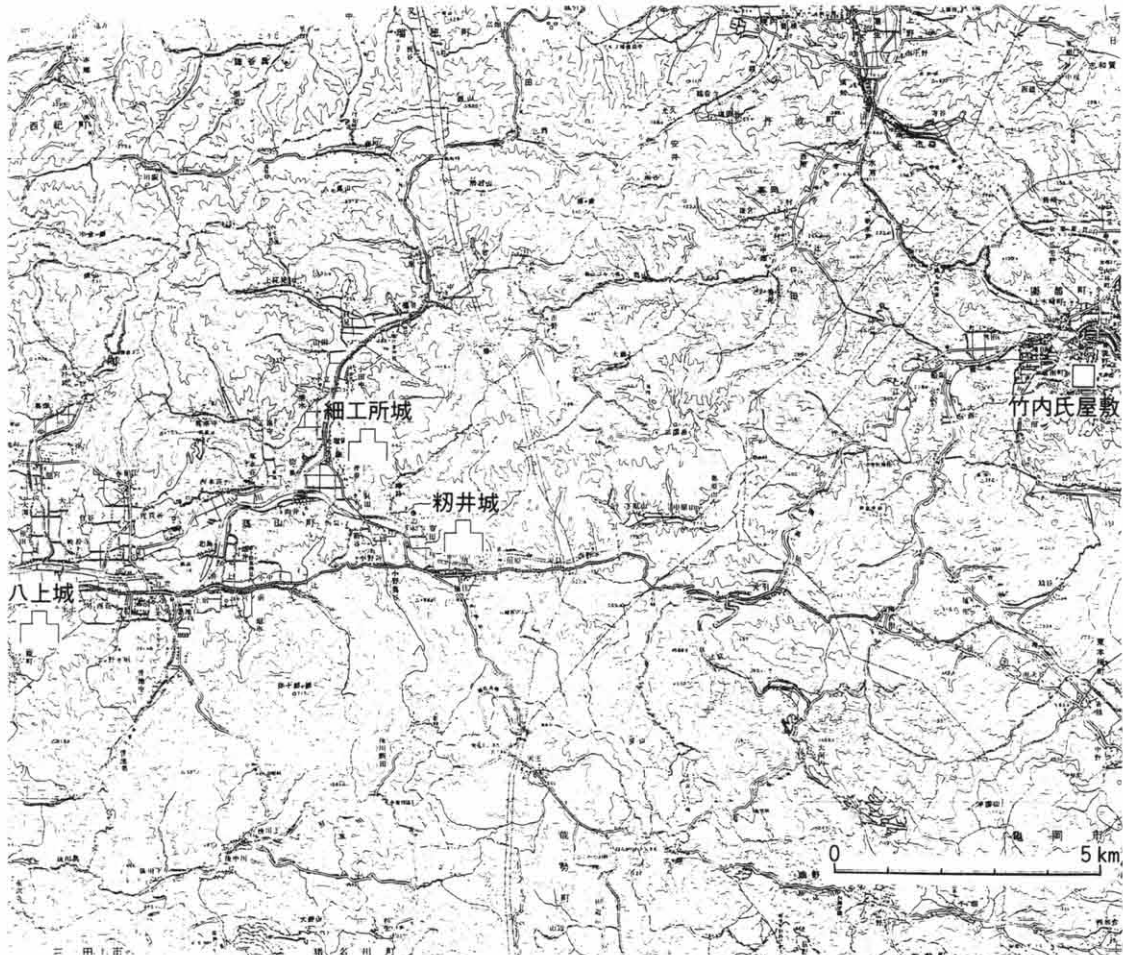
4. 荒木山城守の居城の所在地について

前項で中世の藪部村の状況を確認し、竹内氏の存在を明らかにした。荒木氏による桐野河内村押領は天文年間であるので、ほぼ同時期に荒木氏の居城が藪部村にあったとは考えられない。

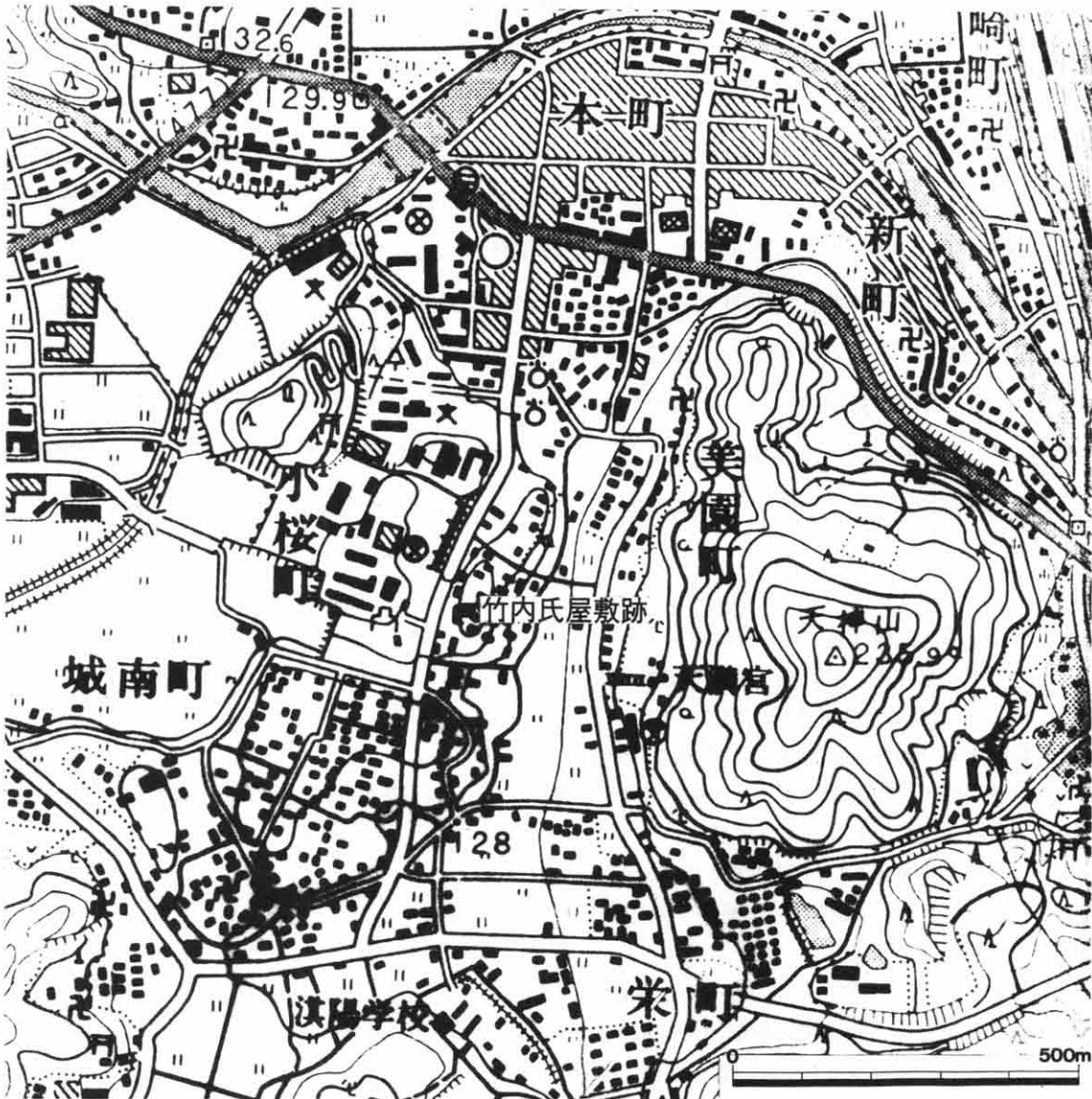
荒木氏の居城とされる城としては、他に多紀郡の細工所城がある。細工所城の遺構についてみると、標高400m程の山頂にあり、街道の分岐点を見下ろす位置にある。主郭は40m×20m程の広さで、西側に5m×5mの小さな段と15m×12mの郭が続き、中心郭群を形成している。その西には三角形状の郭があり、南側に虎口が存在する。主郭の東側にも2段を有しその先は葛籠折れの通路となる。

また中心郭群から四方へ郭が伸びている。西北側は斜面を切り落とし、通路を狭くしたり堀切で遮断している。最西北端部分には低土塁囲みの郭がある。東南側の郭は少し距離を置いており削平も不十分である。全体的に堅堀は多用せず、中心郭群のような高い切岸で防御しているようである。

では明智光秀の丹波攻略の動向を見てみると、天正3年(1575)12月に荻野直正を黒井城に攻め^(注17)める。翌天正4年正月に波多野氏の背反により光秀は敗北を喫し、いったん退却せねばならない状況にな^(注18)った。再び丹波攻めが行われるのは天正5年からである。10月に多紀郡初井の館が落



第1図 城郭位置図



第2図 竹内氏屋敷跡位置図

城^(注19)、翌6年3月に長岡藤孝に対し氷上郡、多紀郡への道路の整備が命じられ^(注20)、大軍による丹波攻略が迫っていることがうかがえる。そして翌4月に荒木山城守の居城^(注21)が落ち、同年12月に八上城が包圍^(注22)されている。光秀軍は八上城攻撃のため八上へ至る街道に接した波多野家臣の城を順次落としていったと見るべきである。

明智光秀等によって細工所城が落城した後、光秀の兵が入っているが、細工所城において特に織豊系の改修が加わった形跡はみられない。これはその後すぐに八上城を包圍したため、付城としても使われることがなかったためと考えられる^(注23)。

以上のことから荒木山城守の居城とは中世蘭部城ではなく、細工所城(荒木城、井串城)とするのが妥当である。

また細工所城の東へ谷を隔てること600mのところ^(注24)に鉄砲丸という山がある。『丹波志』によると光秀勢がここから細工所城めがけ鉄砲を放ったとされ明智方の構築した城で、地元の伝承にお

いても激しい戦いが繰り広げられたことがうかがえることもこれを補足するものであろう。^(注25)

5. おわりに

以上のように、従来、荒木山城守の居城を中世藺部城とする説があり、当地域における中心的な城であるかのように言われてきた。しかし中世藺部城が存在したとされる地域には、藺部村下司である竹内氏の存在を明らかにした。荒木氏の桐野河内に対する押領行為は天文年間がピークであるので、ほぼ同時期、同地域に竹内氏の存在が確認できたことは、荒木氏の中世藺部城の存在説に否定的にならざるを得ない。またその周辺地域においても荒木氏の籠城に際して明智軍が陣を構えた伝承等も見当たらない。これらから『信長公記』や「丹羽長秀書状」にみられる荒木山城守の居城は多紀郡の細工所城とするのが妥当であるとの見解を示した。ただ竹内氏の屋敷が軍事的防御機能を持っていたとも考えうることから、ここでは「荒木山城守の藺部城」はなかったとしたい。

(たかや・しげお＝園部町文化博物館)

注1 若江 茂、高橋成計両氏の御教示による。

注2 『日本城郭体系』第11巻 京都・滋賀・福井(新人物往来社 1980年)、『京都府遺跡調査概報』第4冊(京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年)

注3 高柳光寿『明智光秀』(吉川弘文館 1958年)

注4 一倉喜好「丹波桐野河内における室町幕府の権力失墜」(『日本歴史』第132号 1959年)

注5 『信長公記』天正6年4月10日条

注6 「丹羽長秀書状」(『兵庫県史』中世2 408)

注7 『初井家日記』(篠山毎日新聞社 1931年)

注8 『丹波戦国史』等

注9 「荒木氏系図」(吉田 清「ふるさと探訪」『広報そのべ』No.244)

注10 江戸期には小麦山山麓に園部城が築造され、大幅に改変を受けている。また現在は小麦山山頂は公園となり、麓も開発を受け旧態を留めていない。

注11 『日本城郭体系』第11巻 京都・滋賀・福井(新人物往来社 1980年)

注12 『京都府の地名』(平凡社 1981年)

注13 森竹千代家文書『丹波志』姓氏部

注14 『園部町史』史料編第2巻

注15 「藺部村天満宮文書」(『大日本史料』第8編之七)

注16 「園部城絵図」『日本城郭体系』第11巻 京都・滋賀・福井(新人物往来社 1980年)

注17 「八木豊信書状」(『大日本古文書』家わけ9 吉川家文書之一 第93号)

注18 『兼見卿記』天正4年正月15日条

注19 『兼見卿記』天正5年10月29日条

注20 奥野高広『織田信長文書の研究』758号

注21 『信長公記』天正6年4月10日条

注22 『信長公記』天正6年12月条

注23 八上城包囲に関しては、高橋成計「丹波八上城包囲の付城について」(『丹波史』15 1988年)

注24 高橋成計氏注23論文

注25 『日本城郭体系』第12巻大坂・兵庫(新人物往来社 1980年)

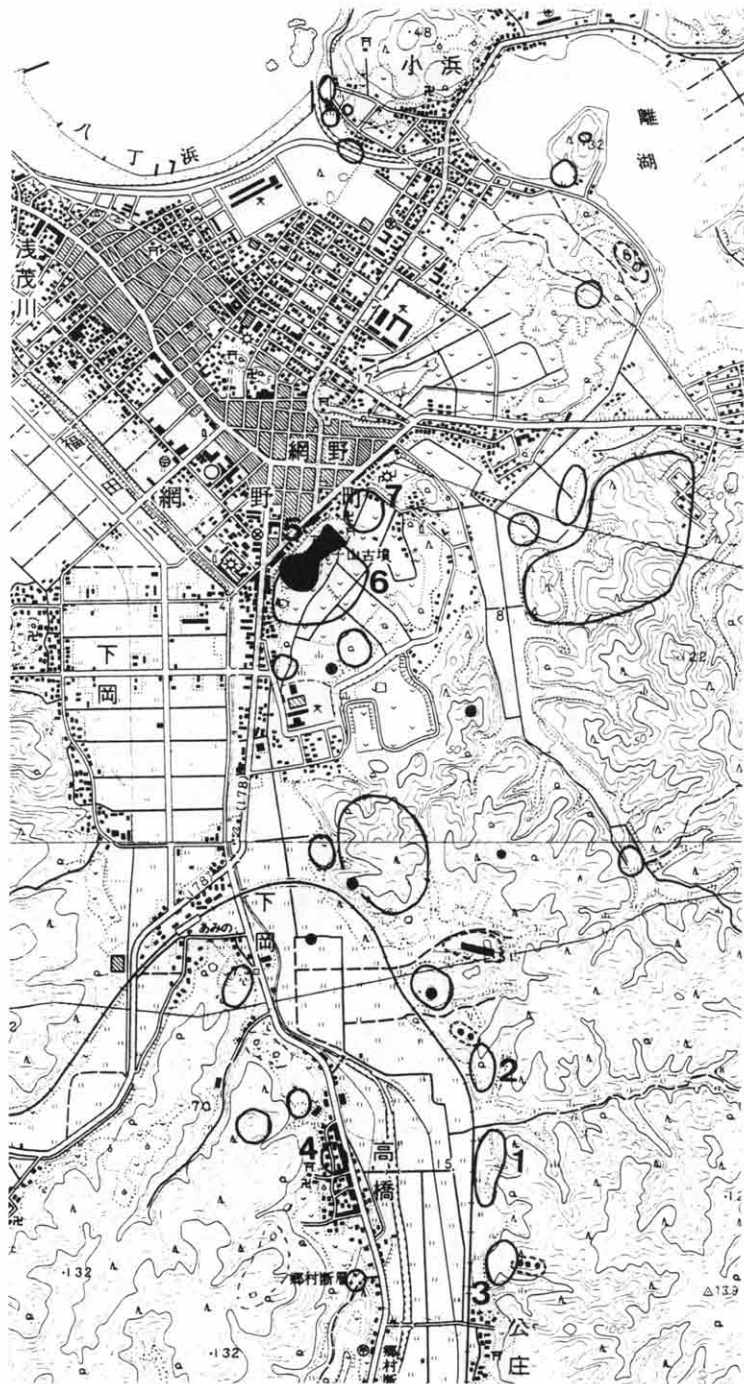
浅後谷南遺跡出土の導水施設について

黒坪 一樹

1. はじめに

浅後谷南遺跡は、京都府竹野郡網野町字公庄に位置する(第1図)。今年度の調査で、弥生時代の墳墓跡を検出した浅後谷南城跡から南方向に見下ろす水田地に当たっている。標高は約15~25mを測る。今回の調査の結果、弥生時代後期・古墳時代前期・平安時代の遺構(流路跡・柱穴)に伴って遺物(弥生土器・土師器・木製品・須恵器)が多量に出土した。特に、流路跡出土の古墳時代前期(布留式期)の土師器資料は、コンテナ整理箱にしておよそ100箱という膨大な量である。さらに、保存状態の極めて良好な古墳時代前期(布留式期)の導水施設を検出した。今回は、この導水施設について概要を述べる。

さて、浅後谷南遺跡近隣には中世の山城跡や古墳、弥生土器や土師器の散布地などが点在している(第2図)。この地域ではこれまで発掘調査があまりなされておらず、大規模で著名な遺跡の存在は知られていない。し



第1図 調査地位置図(1/25,000)

- | | | |
|------------------|------------|---------|
| 1. 浅後谷南遺跡・浅後谷南墳墓 | 2. 浅後谷南城跡 | 3. 公庄城跡 |
| 4. 高橋遺跡 | 5. 網野銚子山古墳 | 6. 三宅遺跡 |
| | | 7. 林遺跡 |

かし、今回の調査地から北へおよそ2kmの網野町中心域にまで範囲を広げると、丹後地方最大の前方後円墳である網野銚子山古墳(第1図5)や、弥生時代から平安時代の大規模な集落跡である三宅遺跡(同図6)・林遺跡(同図7)などをあげることができる。

今回の調査は、国営農地郷1団地造成工事に先立つ遺跡の範囲確認を主目的に、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。

調査対象地は南北300m・東西100mを測る広大なものであるが、ほ場整備により深く掘削される水田部についてトレンチを設定した。掘削トレンチは、主として幅2~3m・長さ20~30mの細長いもので、合計8本(1~8トレンチ)とした(第2図)。調査した各トレンチの合計面積は約640㎡である。なお、調査期間は平成9年10月17日~平成10年2月26日までである。

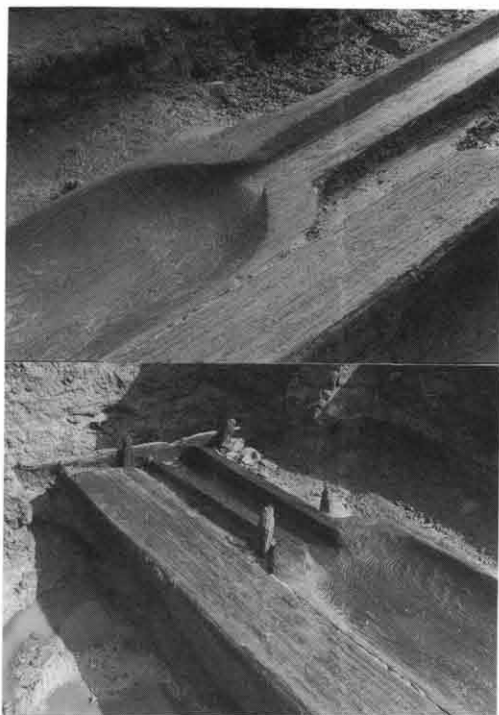


第2図 調査トレンチ配置図

2. 導水施設

導水施設は、7トレンチを北東から南西方向に流れる小規模な流路跡の北岸に沿って、接岸した状態で検出した。完全に原位置を留めている。流路跡の現存する規模は、長さ約13m分・幅約2~3m・深さ約0.3mを測る。

導水施設の本体は一木造りで、全長約3.5mを測る。中間部に水貯め用の槽(約1.1m×約0.6m)を、その前後に樋(幅約0.3m)をもつ特異な形態である。槽の下流側(第3図上位)の出水口は、上流側(第3図下位)の入水口とは異なり、内側に滑らかな絞り込みの造作が認められる。この出水口の絞りこみと底の盛り上がりにより、容易にすべての水

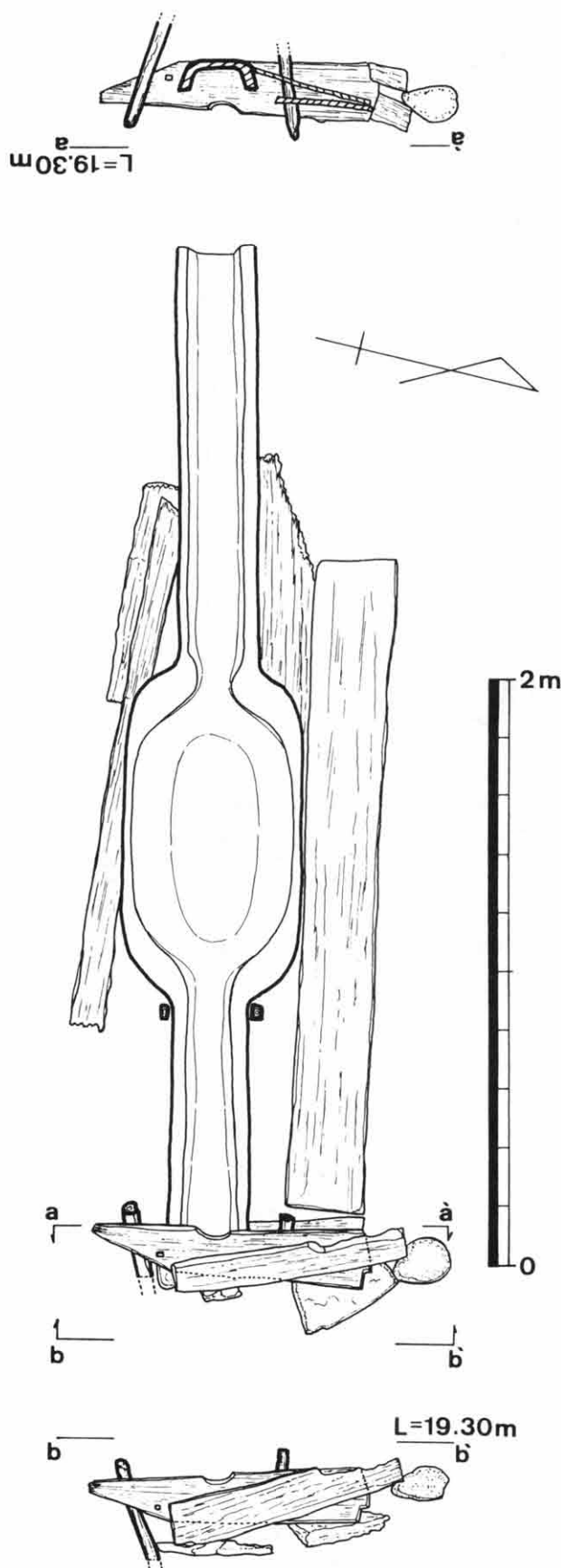


導水施設部分写真

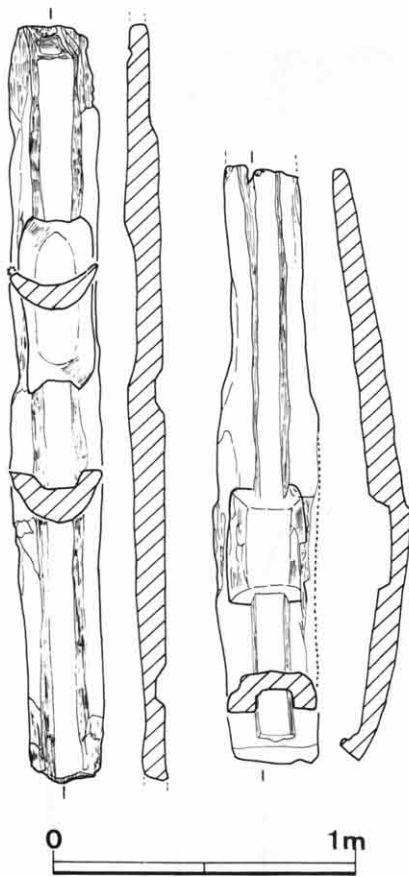
が流れ出さないようにしている。約10cmの深さをもつ槽も滑らかな仕上がりである。また、上流側の端部では横板と杭を用いて簡便なせき止めを行っている。横板の上辺は、樋に水が落ちるように、ほぼ半円形に抉られている。この横板は、何らかの転用部材と思われる。さらにこの本体の北側に密接して足場用の板が設置されている。出土遺物は、古墳時代前期の土師器(布留式)や桃の果核が出土している。所属時期は4世紀前半といえる。この導水施設から下流約4mのところ、梯子と板状木製品が出土している。これらは原位置を留めない。

3. おわりに

古墳時代の導水施設は、奈良県南郷^(注1)・滋賀県服部^(注2)・三重県城之越^(注3)・群馬県三ツ寺^(注4)・京都府瓦谷^(注5)などの遺跡か



第3図 7トレンチ出土導水施設



第4図 瓦谷遺跡出土導水管状木製品
(伊賀1991から再トレース)

ら検出されている。導水施設の本体の形状でみると、流水が一時的に溜まる槽とそこから流れる樋を一木で表現して造り出す南郷大東・服部・瓦谷例(第4図)と、本例は類似している。本体が一木で造られていることだけを見ても、これらの導水施設が個人で造ったり、所有したりするようなレベルのものではないということが実感される。事実、辰巳和弘氏は、豪族の首長が大王に清水を献じる儀礼を執り行った可能性を指摘される^(注6)。また、導水施設における祭祀は、「流水祭祀」と「湧水点祭祀」に大きく分類されている。いずれも水を流す行為そのものに意味があり、亀田 博氏は酒船石の用途を推察するなかで、「水源から発した水が池に貯められ水路で田に配られる様子を象徴したもの」とされ^(注7)、坂 靖氏は南郷大東遺跡の経済基盤を念頭に、「治水をおこない、上水道ともいえる美しい水を取り、その水で「生産」を祈念した」とされている^(注8)。浅後谷南遺跡の導水施設は、丘陵から谷部の平野にひろがる扇状地内の湧水点に設置されているといえる。上流側のせき止め装置を観察する限り、ある程度きれいな水を流したものといえる。今回は導水施設のみを報告となったが、今後は導水施設をとりまく

遺構の確認、相伴土器からの正確な年代の割り出しなどを行ったりして、周辺をとりまく環境などから、この遺跡の性格を考えていかなければならない。

(くろつば・かずき=当センター調査第2課調査第1係主査調査員)

- 注1 坂 靖・青柳泰介「井戸遺跡・南郷(丸山・大東)遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1994年度 奈良県立橿原考古学研究所) 1995
- 注2 大橋信弥「滋賀・服部遺跡」(『王権祭祀と水』 帝塚山考古学研究所) 1997
- 注3 穂積裕昌他『城之越遺跡—三重県上野市比土—』(『三重県埋蔵文化財調査報告』99-3 三重県埋蔵文化財センター) 1992
- 注4 下城 正他『三ツ寺I遺跡』 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社 1988
- 注5 伊賀高弘「瓦谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注6 辰巳和弘『高殿の古代学』 1990
- 注7 亀田 博「酒船石の用途についての憶測」(『季刊明日香風』55 (財)飛鳥保存財団) 1996
- 注8 坂 靖「古墳時代の導水施設と祭祀—南郷大東遺跡の流水祭祀—」(『考古学ジャーナル』No. 398) 1996

南山城における渡来人集落の様相

—精華町森垣外遺跡の概観と問題点の指摘—

小池 寛

1. はじめに

山城町椿井大塚山古墳や城陽市久津川車塚古墳などの著名な古墳が所在する京都府南山城地域は、古墳時代全般を通して多くの古墳が築造された地域として知られている。その一部の古墳については、発掘調査が実施され、墳丘や埋葬主体部についての状況が確認されており、築造年代が概ね把握されている。また、それらの古墳を定点として、南山城地域全般の編年案が、多方面から検討されるに到っている(和田1998)。

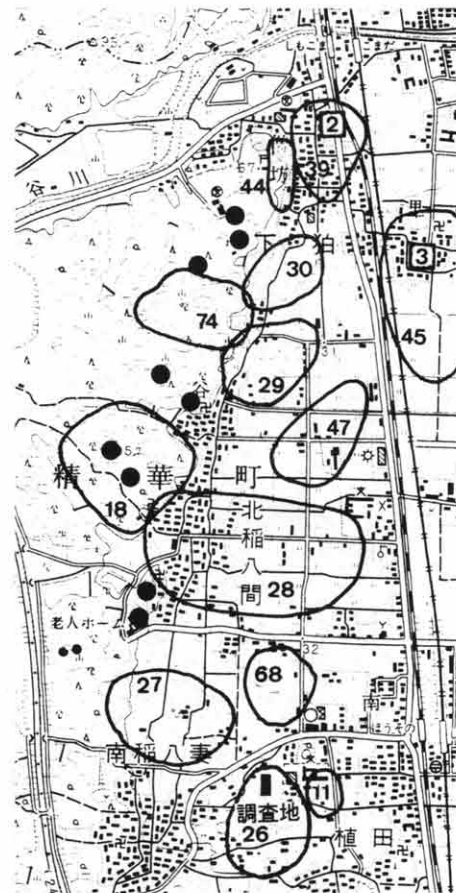
しかし、集落跡となると発掘調査で確認された事例も少なく、集落構造や存続期間など不明な点が多い。特に、中期から後期前半にかけての集落跡については、八幡市新田遺跡(奥村1984)や同内里八丁遺跡(森下1996)などで検出例はあるものの、集落構造の全容が解明された調査事例は、現時点では確認されていない。

そのような状況の中で1997年に実施した森垣外遺跡の発掘調査では、大壁住居跡・竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑などを検出し、古墳時代中期後半から後期の集落であることが判明した。特に、大壁住居跡の検出や陶質土器の出土は、朝鮮半島からの渡来人の存在を示唆する資料であり、南山城地域の歴史的環境を異なった側面から検討できる遺跡として、今後、慎重に検討を加える必要がある。

本稿は、現時点で確認できた事実を中心に検出遺構の変遷を整理し、僅かではあるが、集落構造について検討を加えることを目的としている。

2. 森垣外遺跡概観

森垣外遺跡は、京都府相楽郡精華町南稲八妻に所在し、標高は、最北端で39m、最高所で46mを測る(第1図)。当該遺跡からは、城陽市域を含む南山城南半



第1図 調査地位置図(1/25,000)

- | | |
|------------------|----------|
| 26. 森垣外遺跡 | 2. 下狛廃寺 |
| 3. 里廃寺 | 11. 祝園遺跡 |
| 18. 城山遺跡 | 27. 南稲遺跡 |
| 28. 北稲遺跡 | 29. 片山遺跡 |
| 30. 下馬遺跡 | 39. 拝殿遺跡 |
| 44. 鞍岡山遺跡 | 45. 里遺跡 |
| 47. 柿添遺跡 | 68. 北尻遺跡 |
| 74. 大福寺遺跡(●印は古墳) | |

部を広く見渡せる条件下にあり、集落の立地条件としては良好であったことが推測できる。

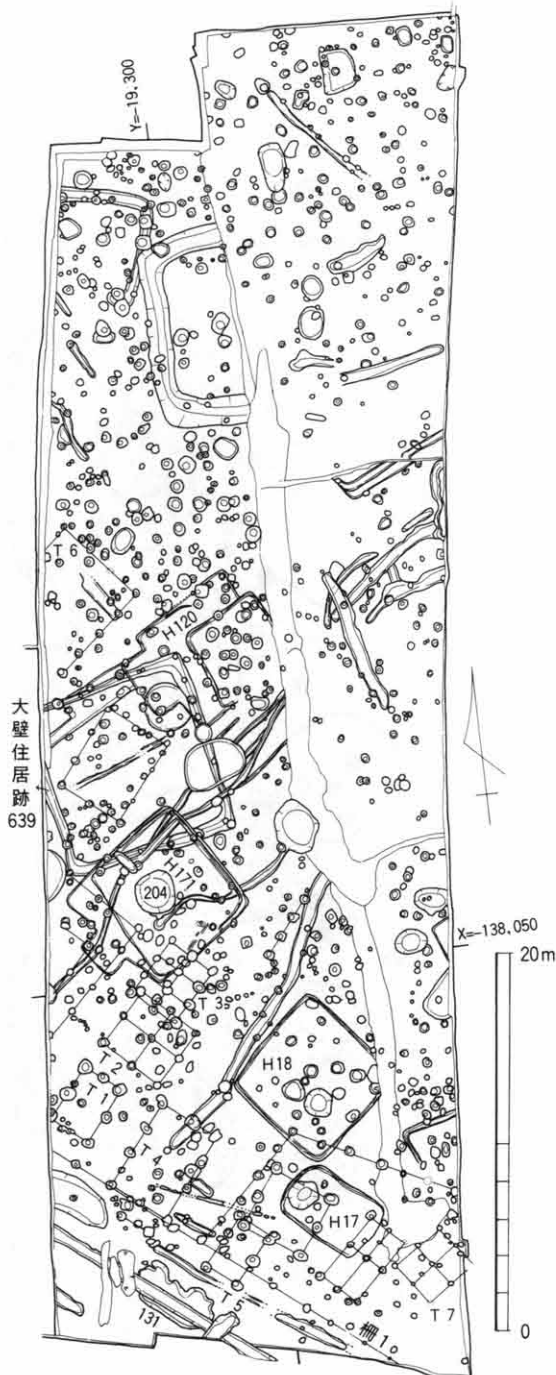
発掘調査を実施したA1地区(第2図)では、全面において多数の柱穴を検出するとともに、同一面で竪穴式住居跡を8基確認した。また、竪穴式住居跡120・171周辺部下層において大壁住居跡、円形土坑、溝などを検出しており、下層を古墳時代中期後半に、上層を中期末から後期に概ね比定できる。なお、遺構面は、南西から北東にかけて緩やかに傾斜しており、竪穴式住居跡や

掘立柱建物跡の主軸は、地形の傾斜とほぼ一致している。

下層で検出した大壁住居跡639(第3図)の主軸は、北から西に約15°振れており、溝の最深部での辺長は、南北辺・東西辺とも約9mであり、溝の幅は平均で0.6mを測る。また、溝の底部では、南北辺に5間分、東西辺に6間分の等間隔に穿たれた柱穴を検出しており、南北辺の1間が6尺(1.8m)、東西辺の1間が5尺(1.5m)の基準尺に準拠して基礎構造物が構築されたと推測できる。一方、南辺の東隅から2間目は、溝底を深く掘り込んだ後に柱穴を穿っていることから、扉などの施設が設置されていた可能性が高い。

大壁住居跡639の構築年代は、大壁住居跡639と同一面で検出した土坑204から、陶邑古窯址群製の杯(第4図9)が出土しており、陶邑編年TK216~TK208併行期に比定して大過ない状況である。

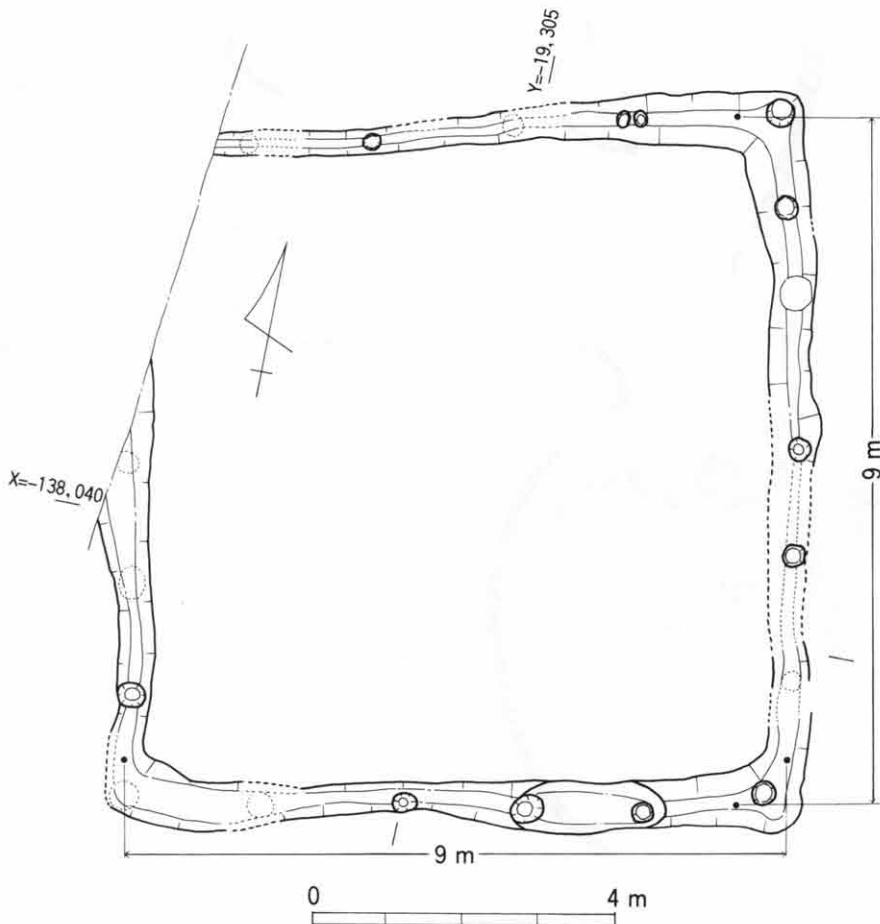
大壁住居跡は、大阪府内や滋賀県内で検出例があるが、京都府内では初出である。滋賀県穴太遺跡の大壁住居跡の分類を行った宮本長二郎は、大壁住居跡を5種類に分類したが、その分類に準拠すれば、当該事例は、「壁付棟持柱をもつ掘立柱大壁造の大型住居」(宮本1996)の特徴をもつA型住居に分類できる。穴太遺跡検出のA型住居は、奇しくも当該遺構と同じく一辺9mであり、溝の底部に12~15の柱穴を穿っている。年代は古墳時代後期である。



第2図 森垣外遺跡A1地区平面図
H:竪穴式住居跡 B:掘立柱建物跡

次に、8基検出した竪穴式住居跡の中で、特徴的な構造を呈する竪穴式住居跡120と171について概観しておきたい。竪穴式住居跡120は、北から西へ30°の主軸をもっており、南西―北東間は7.5m、南東―北西間は7.0mを測る。南西辺中央部には、1.3m×2.4mの長方形の張り出し部をもっている。一方、竪穴式住居跡171は、北から西へ30°の主軸をもっており、南西―北東間は5.8m、南東―北西間は7.0mを測る。南西辺中央部には、1.5m×3.3mの長方形の張り出し部をもっている。この張り出し部の用途については、類例を集成し正確に検討する必要があるが、竪穴式住居跡120の張り出し部から移動式竈の部材が比較的まとまって出土していることから、広義な意味での炊飯に伴う空間であった可能性が指摘できる。なお、竪穴式住居跡120・171床面からMT15～TK10に比定できる須恵器が出土している。以上が、大壁住居跡639と竪穴式住居跡120・171の概観であるが、次に掘立柱建物跡について、その傾向を概観しておきたい。

現時点で復原し得た掘立柱建物跡は7棟であり、小規模な雑舎群であったと考えられる。トレンチ南方に位置する掘立柱建物跡群の主軸は、北から東に36～54°振っているのに対して、トレンチ北方に位置する掘立柱建物跡群の主軸は、北から西へ33°前後振る建物跡も散見できる。これは、掘立柱建物跡の主軸を設定する際、地形の傾斜を基準としたためであり、主軸の振れ角に

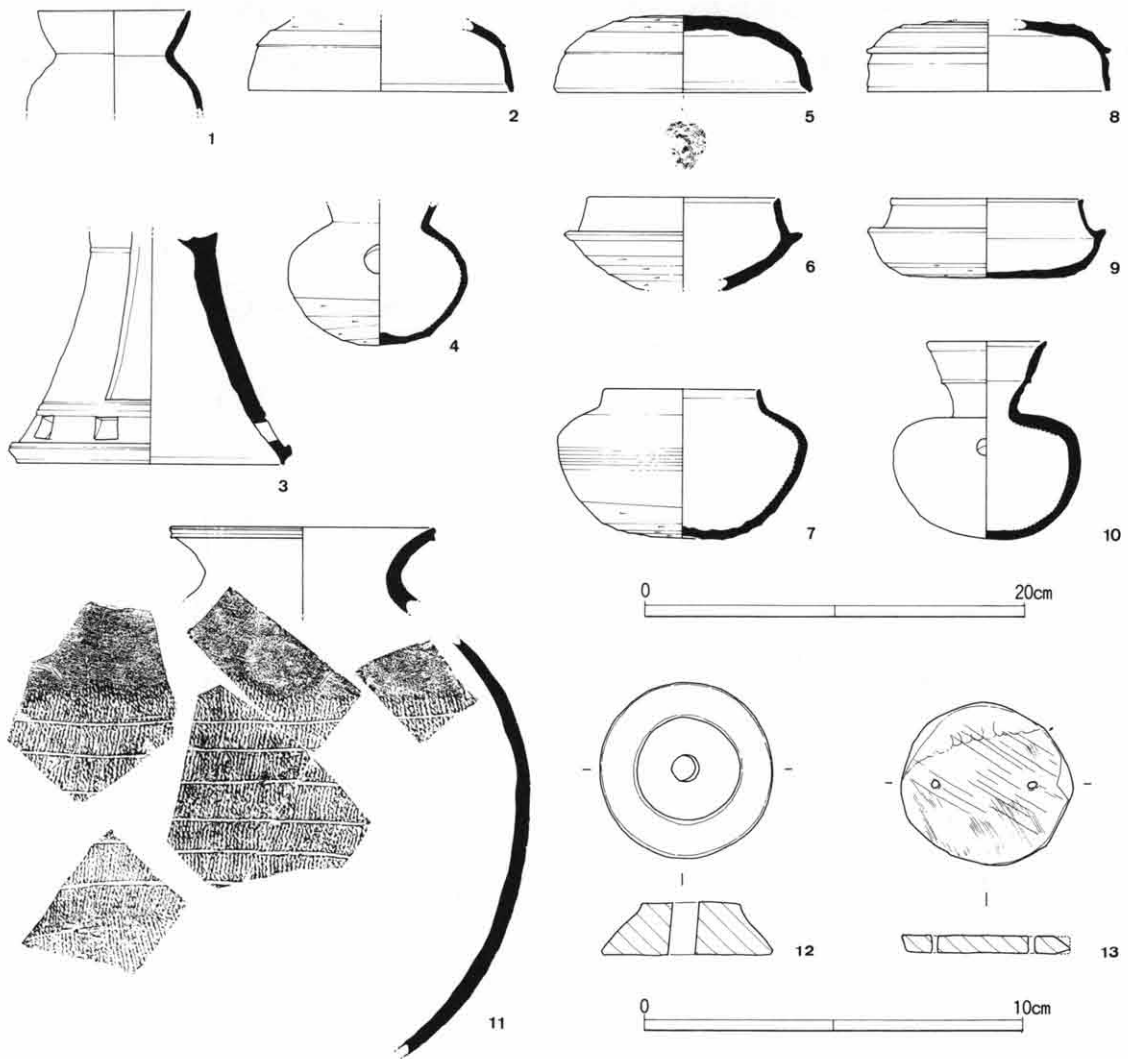


第3図 大壁住居跡639平面図

よって単純に建物配置と群構成を復原することが、危険な作業であることを示唆している。

掘立柱建物跡を構成する柱穴からは、陶邑編年TK47~TK10併行期の須恵器を中心にTK209併行期に到るまでの須恵器も出土していることから、掘立柱建物によって構成される集落は、中期末から後期後半に到るまで存続していたと考えられる。なお、大壁住居跡639・竪穴式住居跡120・171と掘立柱建物跡群の併行関係については、現時点では判然としないが、竪穴式住居群と共存する掘立柱建物の存在も視野に入れておきたい。

なお、調査地南端では、北から西へ52°の主軸をもつ柵を検出した。柵以南では掘立柱建物跡を検出していないことと、柵と並行して3条の溝が掘られていることから、集落の南限を区画する施設と考えられる。土坑131は、調査地南端部で検出した不整形土坑であり、長軸4.7m、短軸最大長は2.3mである。坑内から須恵器・土師器・砥石などとともに陶質土器が出土している。第4図3は、中央部に2方透かし孔を穿ち、その下方に1.2cm四方の透かし孔をもつ脚部である。



第4図 出土遺物実測図・拓影

1. 方墳10 2・8. A1地区包含層 3~7・11. 土坑131 9. 土坑204 10. 土坑653
 12. 竪穴式住居跡134 13. 竪穴式住居跡17

土坑131から出土した須恵器は、陶邑編年MT15ないしTK10併行期に比定できるが、同型式には同様な脚部が見られないことと透かしの状況から、今後、型式学的検討とともに胎土分析を行う必要がある。一方、第4図11は、口径14cmを測る陶質土器の甕であり、全体的に焼き歪みが著しいものの、50%の残存率を有している。肩部は、無文の叩き工具によって整形され、体部には縄文と9条の螺旋状凹線が観察できる。当該資料は、胎土・焼成・整形痕から陶質土器として認定できるが、丁寧な縄文であることと9条の凹線がめぐることから、5世紀前半に朝鮮半島の洛東江下流域で焼成されたと考えられる^(注2)。

3. 森垣外遺跡の集落について

森垣外遺跡は、陶邑編年TK216併行期に比定できる大壁住居跡639の存在から、古墳時代中期後半に集落として成立することが判明した。一方、大壁住居跡を検出した上層では、一辺7mの大型竪穴式住居跡を確認しており、大壁住居から竪穴式住居に移行することが把握できた。特に、竪穴式住居跡120・171の張り出し部からは、移動式竈の部材が出土しており、渡来系の要素を見出すことができる。

掘立柱建物跡群は、竪穴式住居跡と併存する時期も含め、陶邑編年TK209併行期にまで存続していることが把握できた。柱穴内から鉄滓などが出土していることから、周辺で鍛冶が行われていた可能性がある。鞆の羽口の出土も注意しておきたい。

遺跡における渡来人の様相を類型化した亀田修一(亀田1993)によれば、鍛冶工房を抱えた渡来人集落は、常に火災による集落焼失の危険にさらされているため、母集落から一定の距離を保った地点に集落を構えさせられる傾向が指摘されている。その点から今回の調査地を見れば、溝や柵などで区画された住居域は、渡来人を中心に鍛冶などの作業に伴う作業及び居住空間として認識することができ、この空間を維持した母集落は、調査地以南に広がっていることが試掘調査結果から想定できる。また、今回の調査では、有孔円盤や紡錘車などの石製模造品が出土し、集落内で宗教的行為が行われていたことを示している。なお、韓式系土師器や製塩土器・土錘・馬歯などの出土も注目される。

京都府内において陶質土器が出土する地域は、古閑正浩の集成作業(古閑1996)により、乙訓に集中していることが判明しているが、渡来人の存在を示す遺構とともに陶質土器が出土した遺跡は、当該遺跡が初出である。乙訓においても、今後、渡来人の存在を示唆する遺構の検出が待たれるが、南山城にも渡来人が古墳時代中期後半に居住したことが、考古資料によって確かめられた意義は、それ以後の南山城地域の渡来文化を考える上で貴重な発見といえる。

近年、陶質土器などの外来系遺物の出土は、増加する傾向にあるが、明確な遺構から共伴遺物を伴って出土する事例は限定される。更に、出土遺構の集落内での機能や集落構造がある程度明らかにされた遺跡からの出土事例となると、かなり限定される傾向がある。今後は、集落構造が把握され、なおかつ陶質土器や鉄滓が出土した岡山県山陽町斎富遺跡(下澤編1996)などとの比較により、渡来人が居住した集落の共通要素を抽出し、立地条件や集落構造を類型化する必要がある。

る。その上で外来系遺物を捉え直す作業が急がれる。当該調査では、その基礎資料として重要な成果を得ることができた。

4. まとめ

南山城地域では、全長180mの久津川車塚古墳が古墳時代中期中葉に築造され、中期後半には、首長墓系譜をひく全長110mの芭蕉塚古墳が築造される。それ以後、首長系譜をひく大型の前方後円墳が見られないことから、この時期に南山城地域に基盤をおく首長層の政治的再編成が行われたと考えられる。また、河内や大和・近江において外来系の遺構・遺物が集落内で増加しはじめる時期も中期末以後であり、森垣外遺跡の中心的な時期も中期末～後期中葉である。

大型前方後円墳の消失と外来系の遺構・遺物を有する集落の増加は、直接的に結び付く現象ではないが、畿内政権によって掌握されていた渡来人が、やがて、斎富遺跡や森垣外遺跡のような先進的な集落に参入するような変化は、重要であると思われる。

今回の調査地は、渡来人を中心に形成された集落の一部と考えられ、韃の羽口や鉄滓などの出土から鍛冶などを行った作業空間及び住居域と想定できる。一方、当調査地以南の試掘調査では、同時期の遺構・遺物を検出しており、標高も45mと高いことから、集落の立地条件は、A1地区よりも良好である。このことから標高45mを測る一帯には、今回、検出した渡来人集落を実質的に運営した母集落の存在を想定することができる。この母集落と渡来人集落の関係については、今後の調査成果を待たなければならないが、トモとしての母集落とべとしての渡来人集落の関係で捉えられる可能性も消極的ながら指摘しておきたい。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第4係調査員)

注1 森垣外遺跡の発掘調査は、平成9年11月から平成10年3月の期間に実施した。現在も調査を継続中であり、更に、集落の構造が明らかになるであろう。

注2 定森秀夫・亀田修一・田中清美諸氏のご教示を頂いた。記して感謝いたしたい。

<参考文献>

奥村清一郎 1984 「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』 京都府教育委員会

和田晴吾 1988 「南山城の古墳—その概要と現状—」『京都地域研究』Vol.4 立命館大学人文科学研究 所

亀田修一 1993 「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』30 九州古文化研究会

古関正浩 1996 「京都府乙訓地域の韓式系土器・カマド形煮炊具の様相」『韓式系土器研究』VI 韓式系土器研究会

森下 衛 1996 「第二京阪自動車道関係遺跡平成7年度発掘調査概要・内里八丁遺跡」『京都府遺跡調査概報』第73冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』 中央公論美術出版

下澤公明編 1996 「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105 岡山県教育委員会

長岡京の大規模宅地

— 名神桂川パーキング・エリアの調査から —

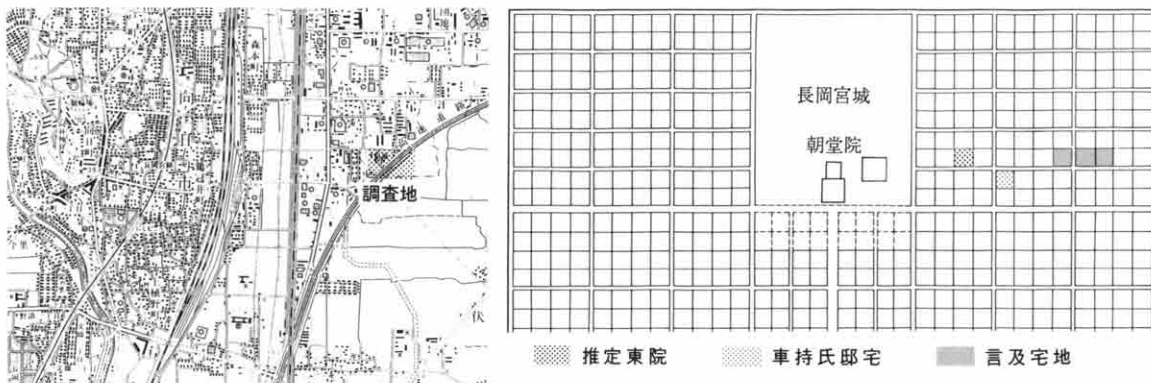
野島 永

1. はじめに

長岡京における発掘調査においても、一町を占有する大規模宅地の事例がみられるようになってきた。今回紹介する宅地は、京都市南区久世東土川町金井田・正登における中央自動車道西宮線(名神高速道路)の京都桂川パーキング・エリアの建設に伴う発掘調査によって検出したものであり、長岡宮城の東、二条条間大路の北側に位置する二条三坊十五町(南一条三坊十三町)・二条四坊二町(南一条四坊四町)・二条四坊七町(南一条四坊五町)にあたる(第1図参照)^(注1)。各町について個別に概観し、建物配置基準について考えてみたい。長岡京期の宅地分割が、「月借錢解」(『正倉院文書』)にみられる漠然とした比率によるものではなく、5・10丈を単位とした四行八門制によることは「六条令解」(『平安遺文』巻1-4)によって知られるが、2分の1町あるいは1町を占有する宅地内の建物配置計画の基準とも成り得たことを指摘したい。

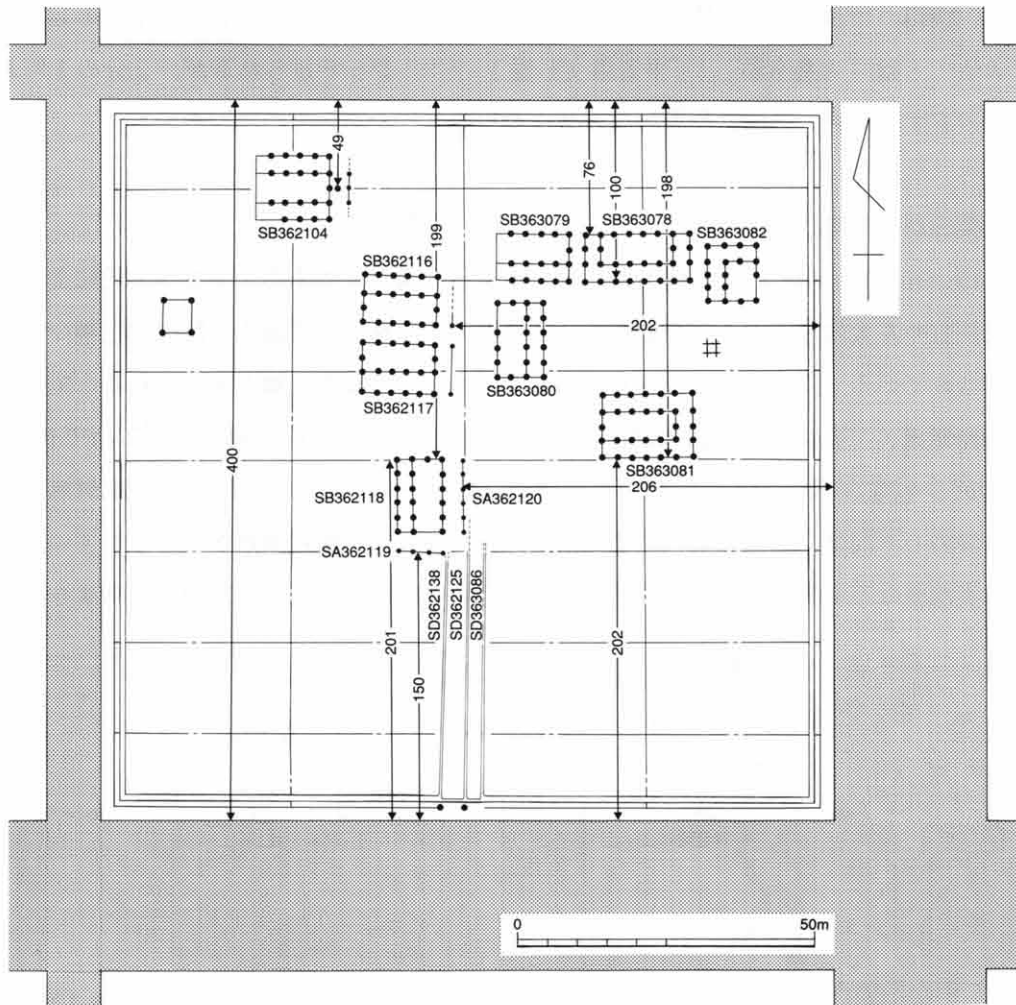
2. 二条三坊十五町(第2図)

二条三坊十五町は、南に二条条間大路、東に東三坊大路が位置する^(注2)。平良泰久氏によって、造東大寺司長官や左大辨・大宰大貳を歴任し、造長岡宮使を務めた参議正三位佐伯宿禰今毛人の邸宅と推察されている^(注3)。四周に築地が巡り、一町を占有する大規模宅地と考えられる。宅地の南北両側の条路側溝、二条条間北小路南側溝と二条条間大路北側溝の心々間は118.50mで400尺、宅地外郭築垣心々間385尺となる。宅地の東西両側の坊路側溝、東三坊坊間東小路東側溝と東三坊大路西側溝の心々間は、西側の東三坊坊間東小路東側溝および西辺築垣が検出されていないために正確な実測値は不明であるが、左京第177次調査から、推定120.95mで約409尺あまりに復原さ



第1図 調査地と宅地位置図(1/50,000)

れる。築垣心は条坊側溝心から7.5～8尺程度で、『延喜式』左京職式京程条にみる大路・小路の規模による差異はない。宅地南辺中央には大路に開く門2基がある。2基の門に応じて宅地中央に向かって2列の町内小路が設置され、側溝が掘削されている。中央の側溝SD362125は宅地の中央に位置している。建物はすべて掘立柱建物で、宅地の北東部に集中している。柱間寸法は、SB362116・117を除いてすべて身舎8尺・廂の出9尺に統一する。前殿と考えられるSB363081は、南・東・北に廂をもつ身舎2間×5間の東西棟の掘立柱建物で、東・南・西に廂を持つ後殿SB363078と中軸線をあわせる。SB363081の南廂柱筋は二条条間大路北側溝から202尺になる。SB363078南廂柱筋は二条条間北小路南側溝から100尺に位置する。これらの実測値から、二条条間北小路南側溝と二条条間大路北側溝を南北二辺とし、東西は東三坊大路西側溝・東三坊坊間東小路東側溝からそれぞれ約5尺の地点に東西二辺を仮定し、東西4等分割・南北等8分割する四行八門制を想定すれば、SB363078の南廂柱筋は北二門、SB363081南廂柱筋は北四門の計画線に合致してくる。このほかの掘立柱建物も概観すれば、SB363079は身舎の内側に二列に並ぶ挿鉢形土坑を検出しており、醸造施設の可能性がある。SB363078の西側に直列し、ともに北二門の計画線に南廂柱筋を揃える。SB363082は、二条条間北小路南側溝に流下する排水

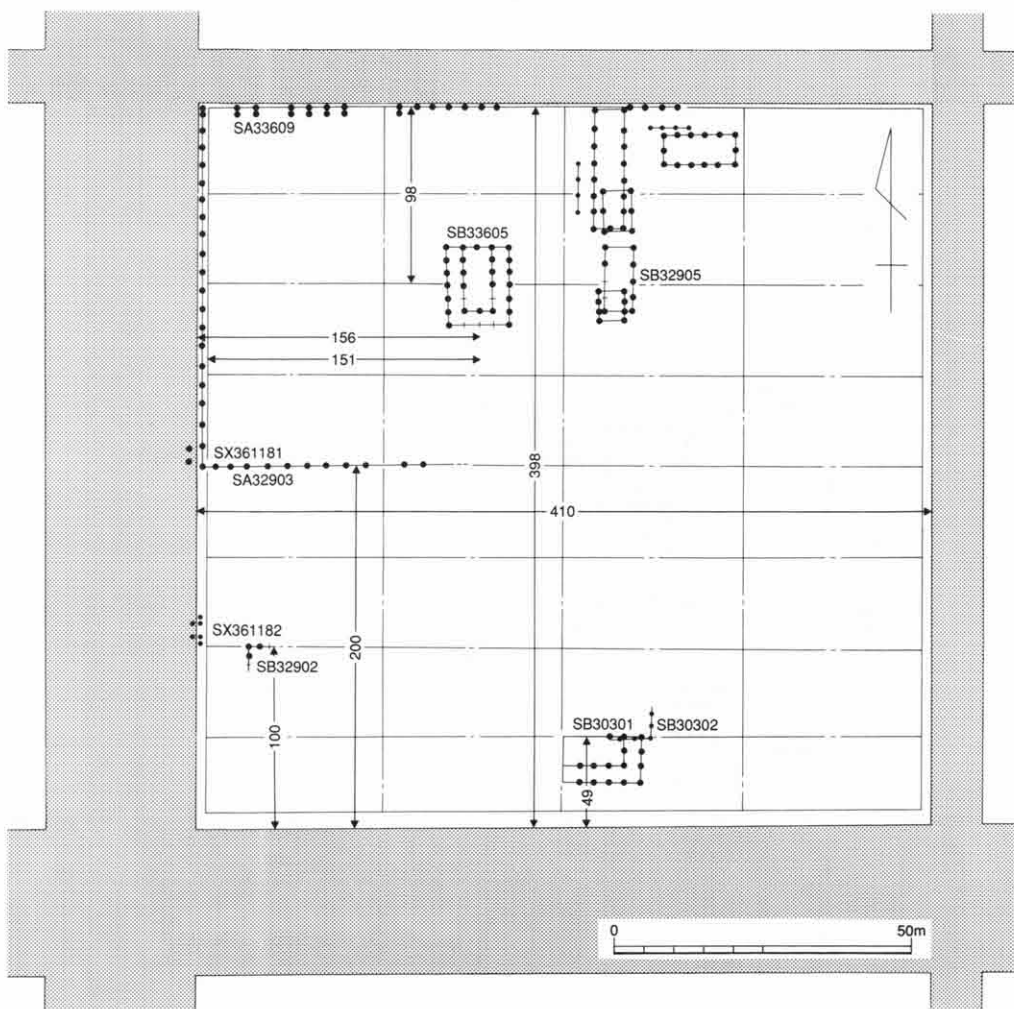


第2図 左京二条三坊十五町
宅地外周の実線は外郭築垣心、一点破線は四行八門の想定計画線

溝が付設しており、炊飯・供膳用の土師器等の廃棄土坑や、井戸が近辺に位置することから、厨とみられる。S B 363078の東側にあり、身舎の中軸線を北二門の計画線にあわせる。S B 362118は、西に廂をもつ身舎2間×5間の南北棟の掘立柱建物である。北妻柱筋を北四門の計画線にあわせて、S B 363081の南廂柱筋に揃える。S B 362118の南と東に塀S A 362119・120があり、それぞれを北五門・西二行の計画線上に配置する。S B 362104は南北に廂をもつ2間×5間の東西棟の掘立柱建物で、中軸線を西一行、妻心を北一門の計画線にあわせる。以上、6棟の建物が、想定した四行八門制の計画線にその中軸線や廂柱筋あるいは、妻心をあわせるように配置する。

一方、S B 362116・117は、それぞれ北と南に廂をもつ2間×5間の身舎を持ち、並列して建てられる。S B 362117の柱穴から檜皮や漆喰が出土し、檜皮葺の屋根に漆喰を塗った白壁の建物が想定される。検出状況から、宅地班給当初に建てられたものではないことが判明している。廂の柱間寸法や建物振角も他の掘立柱建物と異なり、廂柱筋や妻心が北二・三門の計画線にあわない。

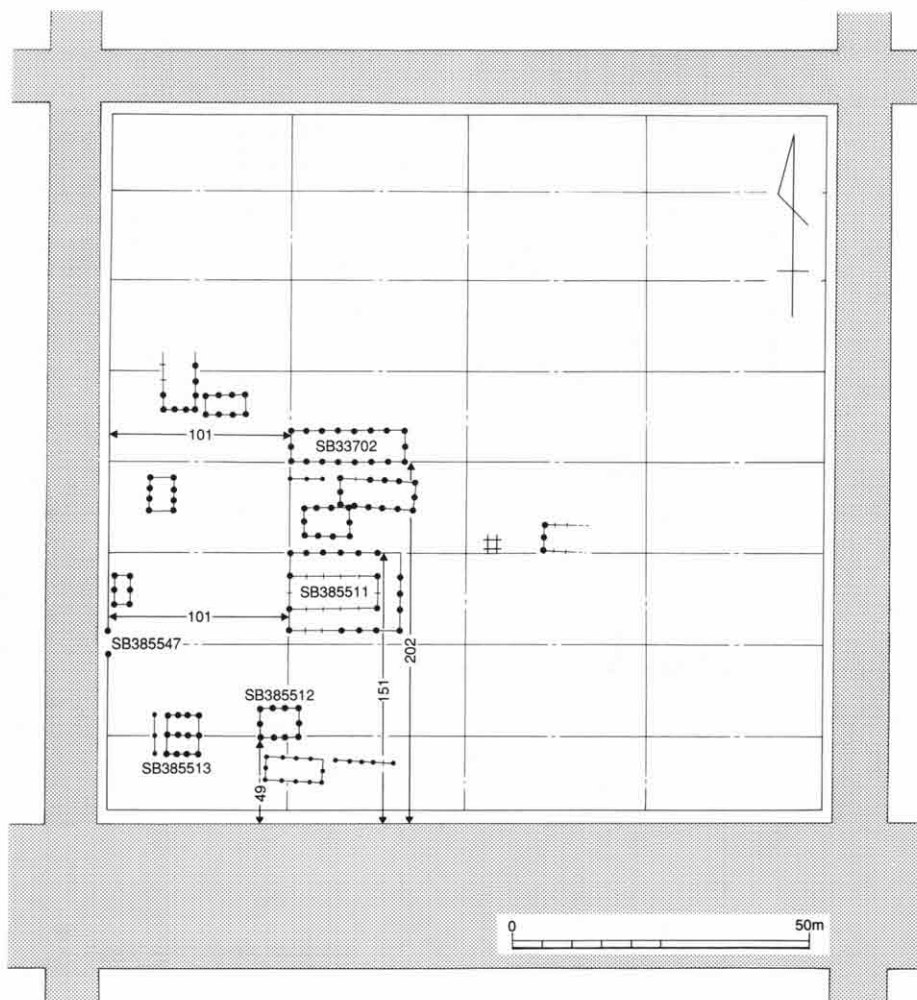
これらの観点から、十五町は、40丈四方を志向した宅地であり、宅地班給当初には、宅地の南北両側の条路側溝を南北二辺とした四行八門制の計画線にそって建物を配置していたことが明らかである。がしかし、その後、建物S B 362116・117の増築に関しては、当初の計画線をそれほど重視しなかったものとみられる。



第3図 左京二条四坊二町

3. 二条四坊二町(第3図)

二条四坊二町は、南に二条条間大路、西に東三坊大路が位置する。南西から北東に向かって名神高速道路が貫通しているため、中心部分については調査が行なわれていない。宅地北側の二条条間北小路南側溝は検出されなかったが、宅地の北辺を限る掘立柱塀 S A 33609と二条条間大路北側溝の距離は、宅地西端で118.3m(約400尺)、中央で117.8m(398尺)を測る。東三坊大路東側溝と東四坊坊間西小路西側溝の心々間は121.5m(410尺)になる。宅地中央を東西に走る掘立柱塀 S A 32903は、二条条間大路北側溝から200尺に位置し、宅地を正確に南北2分の1に分割していた。北半の宅地の中心的建物と考えられる S B 33605は、東・南・西に廂をもつ南北棟の掘立柱建物である。先述した二条三坊十五町同様に四行八門制の計画線を想定すれば、S B 33605の中軸線は北二門の計画線にのり、妻心を西二行の中央に配置する。1間×4間の掘立柱建物 S B 32905も中軸線を北二門の計画線にはほぼあわせており、S B 33605と二字型の建物配置を構成する。一方、南側の宅地では、橋 S X 361182の南端と S B 32902の北側柱筋を揃えて、北六門の計画線にあわせる。また、S B 30301の身舎北側柱筋を北七門の計画線にあわせていることも看取される。



第4図 左京二条四坊七町

4. 二条四坊七町(第4図)

宅地の南西部分を調査したため、宅地の北側および東側の条坊側溝・宅地外郭築垣の位置は不明である。先述した二町宅地の北辺を限るS A 33609と二条条間大路北側溝の距離は117.6m(397尺)となる。東西では、東四坊坊間西小路東側溝と東京極大路西側溝心々間から想定小路幅(側溝心々間)を差し引いて宅地幅を等分すれば、東西坊路側溝心々間はおよそ407尺前後になる。まず、主屋とみられる北・東・南に廂をもつ掘立柱建物跡S B 385511の北廂柱筋は、二条条間大路北側溝から151尺、北五門の計画線上に位置する。西妻柱筋は東四坊坊間西小路東側溝から106尺東にある。門跡S B 385547が東四坊坊間西小路東側溝から約5尺にあることから、S B 385511西妻柱筋は宅地西辺から101尺東、西一行の計画線上にほぼ位置する。また、その後方、2間×7間の掘立柱建物S B 33702南側柱筋は二条条間大路北側溝から202尺で北四門の計画線上、その西妻柱筋をS B 385511の西妻柱筋に揃え、西一行の計画線にあわせる。両者は建物振角も一致することから、同時期に建てられたものとみられ、二字型の建物配置を構成する。さらにS B 385512南側柱筋も北七門の計画線にあわせる。また、宅地の東西を二等分する南北線付近に柵列や町内小路などの区画施設が認められなかったことから、七町は一町規模で占有されたと推測される。

5. 建物配置基準の共通性

四坊近辺における宅地のみならず、左京二条三坊七町の調査でも同様に四行八門制による計画線に規制された建物配置基準を想定しうる結果が得られている。すなわち、左京第141次調査によれば、南北両側の条路側溝、二条条間北小路南側溝と二条条間大路北側溝の心々間、推定118.6m(約400尺)になる。二条条間大路北側溝から200尺・300尺の地点において東西溝S D 141106・109が掘削される。S B 141100・101・102は、それぞれの西廂柱筋や西側柱筋・西妻柱筋を揃えており、東三坊坊間西小路東側溝から推定50尺前後に配置させる。さらにS B 141101北妻柱筋は、二条条間大路北側溝から251尺北、北三門の計画線上に位置する。三坊七町も一町を占有する大規模宅地として利用されていた可能性が高いことが指摘されている。

しかし、同様に二条条間大路の北側に位置する左京二条二坊十町、推定東院^(注6)では、建物配置の基準を条路側溝ではなく、十町の中心やや南に位置する八脚門心としている。つまり、内郭正殿のS B 26500の身舎南側柱筋や東西脇殿S B 26503・S B 38700の南妻柱筋、東外郭中殿S B 27707南側柱筋は八脚門心から99～100尺に位置し、内郭後殿S B 26501北側柱筋および、東外郭北西・北東殿S B 27701・02北妻柱筋は八脚門心から約200尺に位置している。東院は、『日本紀略』延暦十二年正月二十一日条にみえ、平安京遷都のため内裏に代わる施設として遷御したことが知られている。つまり、二条二坊十町を東院と仮定すれば、十町内建物配置基準が、長岡京条坊造営時点に計画・施工されたものではないと示す。

一方、二条条間大路に面した南側の町においては、その南北両側の条路側溝、二条条間大路南側溝と二条条間南小路北側溝の心々間は365尺前後であり、宅地の南北幅は著しく制限される。条路側溝や、宅地外郭築垣から50尺あるいは100尺の計画線に則った建物配置を窺うことはできない。

以上の知見から、宮城東面街区のなかでも二条条間大路の北側に位置する町では、一町を占有する大規模宅地が多く、その南北両側の条路側溝間40丈を基準として、南北8分割・東西4分割する四行八門制の計画線が建物配置を規制していた宅地を認識することができる。しかし、その他の宮城東面街区の宅地では、その南北幅が著しく制限されており、南北方向について四行八門制による宅地内分割基準に規制された建物配置を普遍的に想定することは現状では困難である。それゆえ、二条条間大路北側の町の南北幅を、条路施工時の単なる誤差、あるいは計画性の欠如に起因すると考えるよりも、二条条間大路北側の町が特別に設定されたものとみる方が妥当である。

しかし、南北の宅地幅を意図的に広く計画したのであるならば、なぜ左・右京街区に見られるように宅地の外郭築垣心々間を40丈とし、それを基準として四行八門制を設定しなかったのであろうか。二条条間大路北側の町における四行八門制の計画線は、左・右京街区に見られる小規模宅地のための単位面積の分割基準ではなく、単に建物を整然と配置させるための計画線として設定されたと推測される。一案として、条路側溝施工と同時期、宅地外郭築垣の築成を経ずして一町規模で占有される宅地内の建物配置のために整然とした割り付けを早急に行なわねばならない状況に迫られていたものと解することもできる。つまり、それは、視点を変えてみれば、条坊路計画・施工段階において、既に宅地の被班給者が確定していたわけであり、長岡京遷都直前、造営推進に最も必要と考えられた施設(宮外諸司)や官人の宅地として計画的かつ早急に設定された町であったとも想像できよう。

(のじま・ひさし=当センター調査第2課調査第4係調査員)

- 注1 条坊路・町呼称および宅地に関する語句は、山中 章氏の論考に従い、条坊復原案を踏襲し、平城京型復原案による旧呼称を括弧内に付した(山中 章「古代条坊制論」『考古学研究』38-4 1992)。
- 注2 二条三坊十五町・二条四坊二町・二条四坊七町の調査の概要については、下記の文献を参考にした。久世康博・上村和直「長岡京左京一条三坊・二条三坊」(『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1988、百瀬正恒・丸川義広・長宗繁一「長岡京左京二条三坊」(『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1991、岸岡貴英・中川和哉ほか「名神高速道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995、岩松 保ほか「名神高速道路関係遺跡平成6年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第69冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996、岩松 保ほか「名神高速道路関係遺跡平成7年度発掘調査概要—長岡京跡左京第361・362・363次(7ANVKN-6・7・8)—」(『京都府遺跡調査概報』第74冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997、岩松 保・野島 永「名神高速道路関係遺跡平成8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第78冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注3 平良泰久「長岡京の貴紳の家」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注4 鍋田 勇「名神高速道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要 C-2トレンチ(7ANWSA-3地区)」(『京都府遺跡調査概報』第61冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注5 松崎俊郎「長岡京跡左京第141次(7ANEUK-2地区)～左京南一条三坊五町・南一条第二小路、鶏冠井遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第30集(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1990
- 注6 梅本康広『長岡京跡(推定)東院跡(長岡京左京第328次調査)』 現地説明会資料(財)向日市埋蔵文化財センター 1994、梅本康広『長岡京跡左京第351次調査』 長岡京連絡協議会資料 1994

桂川右岸における石剣の出土例

— 東土川遺跡を中心に —

中川 和哉

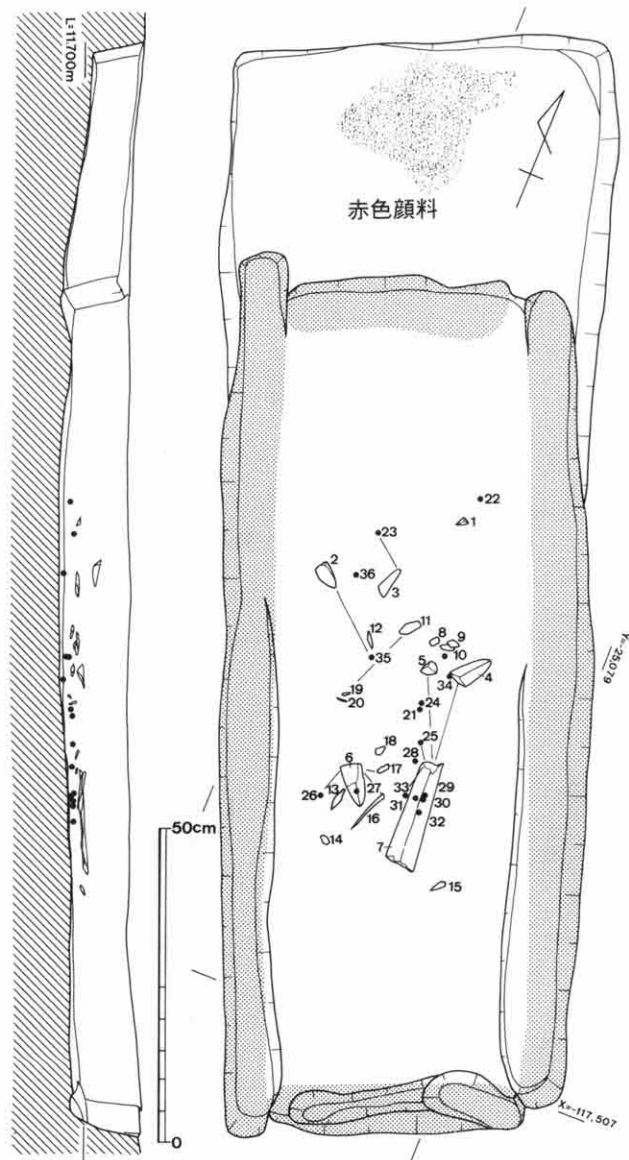
1. はじめに

東土川遺跡は京都市南区東土川町に位置し、名神高速道路の「京都桂川パーキングエリア」建設に先立ち約50,000㎡の大規模な調査が実施された。1993年度から5年間継続調査を実施してきたが、昨年度で調査が完了したことにより、多く出土した石剣類の事例をまとめて紹介したい。

これまでの調査において海拔12m前後の遺構面から、水田百数十枚、方形周溝墓17～19基、環濠、土壙などが検出できた遺物には多くの弥生土器・石器・木製品などがある。遺構・遺物の時期については弥生時代中期に限られるが、畿内第Ⅳ様式のものが多い。遺構の詳細については紙面の都合上、注に挙げた各年度の概報等^(注1)を参考とされたい。東土川遺跡の西側には隣接して、銅鐸の鋳型が出土したことで知られる鶏冠井遺跡がある。

2. 木棺内の出土状況と遺物

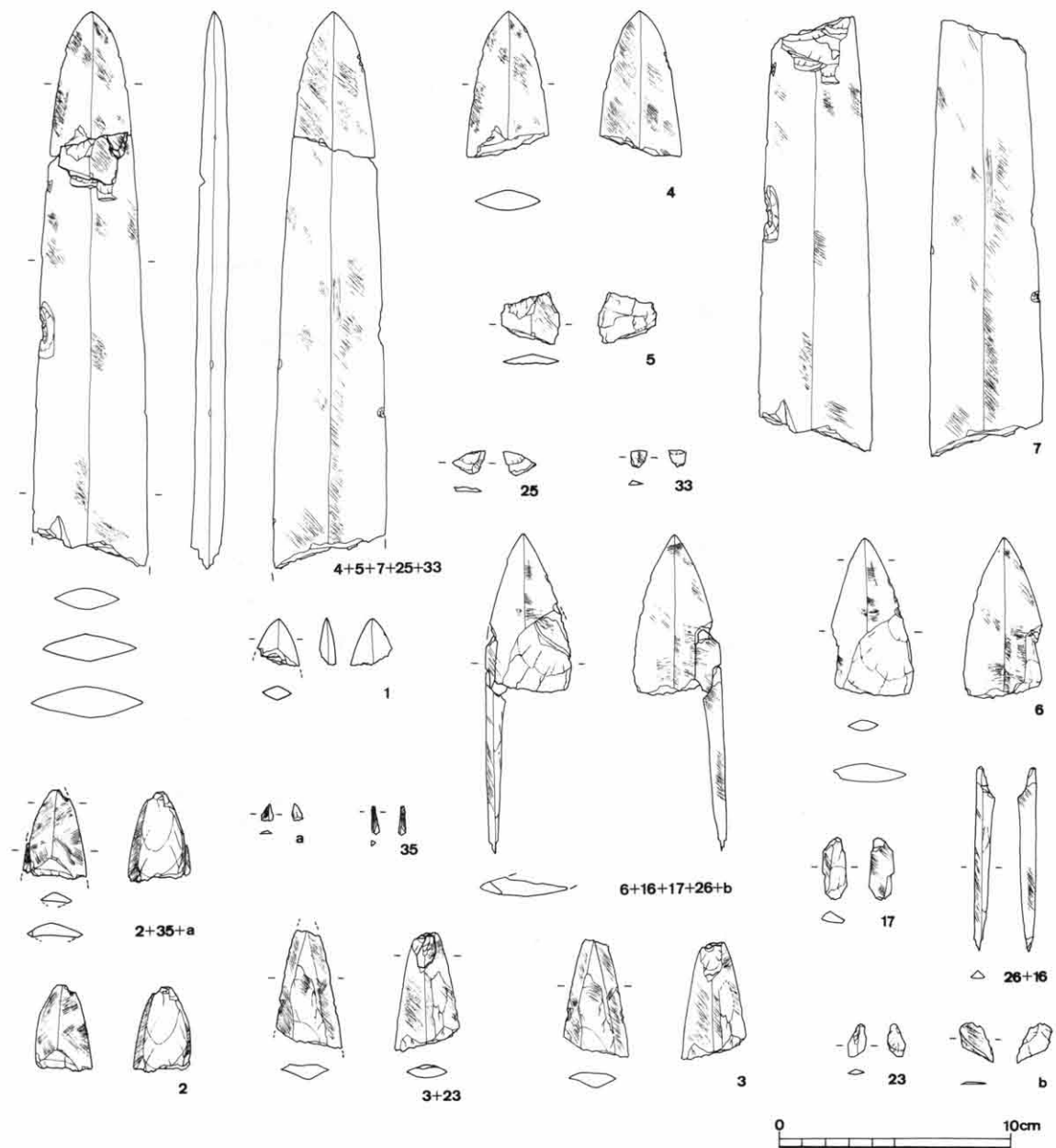
1996年度長岡京左京第385次調査で検出した方形周溝墓S T 385619木棺内から多くの石剣、石鏃が出土した。削平によって遺構の上部が削られていたが、L字状に曲がる溝の西辺の延長線から検出できたことにより、溝中埋葬主体部と考えられる。溝中埋葬は近接する方形周溝墓S T 385614からも検出した。遺構の時期はL字状に曲がる溝からほぼ完形で出土した3個体の土器からⅢ末からⅣ様式に位置づけられると考えられるが、若干の



第1図 S T 385619木棺墓

意見の相違がある。墓壙掘形の規模は長さ約1.75m、幅約0.55mを測る。木棺の長側板は掘形いっぱいには設置されているが、小口は北に約0.35mの空間が存在する。この部分は掘形の底部が木棺の設置されている部分に比べて高く、底部には赤色顔料が残されていたが、遺物は1点も出土しなかった。木棺は小口を長側板で夾む「H」形をしており、その内法は長さ約1.25m、幅約0.4mを測る。墓壙部の上部は削平が著しく約0.11cmしか残存していなかった。

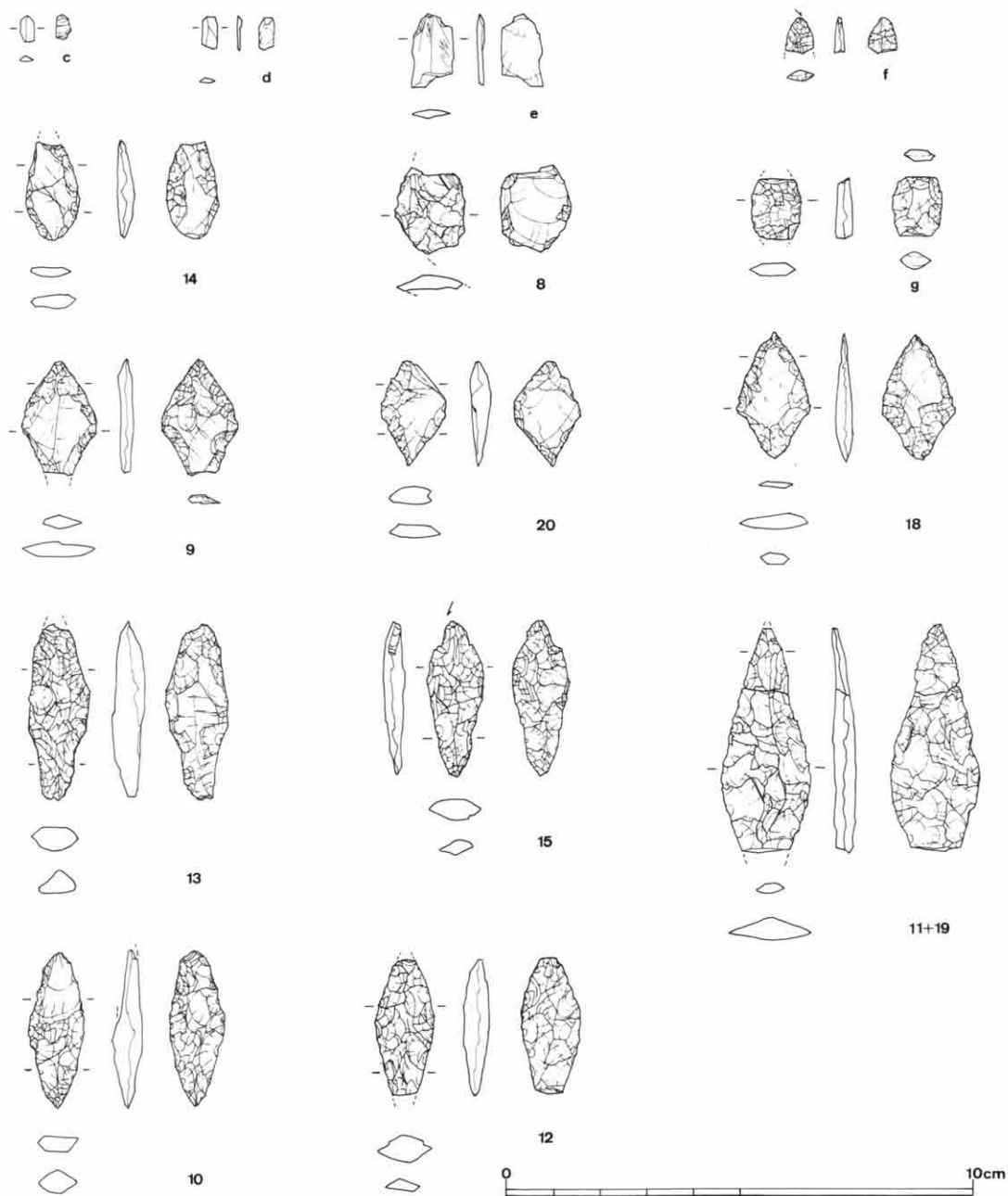
木棺内からは中央部を中心に磨製石剣7～8本、打製石鏃12本が出土している。検出の初段階に於いて、石器の出土が予見できなかったため若干のサンプリング漏れが存在するが、遺構の性格を認識したのちは埋土を全て土嚢に詰め持ち帰り、微細遺物の検出に努めた。第2・3図の石器の番号は木棺内の現位置を押さえて記録した取り上げ番号で、第1図の番号と一致する。その



第2図 ST385619木棺墓出土石器(1)

他埋土の洗浄によって検出した遺物についてはアルファベットを付けて提示した。石器の特徴は先端部のみ出土や、先端部、基部の破損が多いことである。磨製石剣は全て粘板岩を用いて作られており、基部は1点も出土していない。c・d・eは磨製石剣の一部で、いずれも鏑が器表面に残されている。図示した上方に向かい鏑が湾曲することから、鋒部分に近いと考えられる。cは両面に研磨痕があり、鋒部分が剥離したものである。

磨製石剣4+5+7+25+33は体部表面に樋が認められないことから鉄剣形であるが、基部は折れて欠損している。出土状況は鋒部の4が北に、南に中央部の7が出土しており、折れ面は互いに向き合い、延長線上に12cm離れた状態で出土している。また接合の結果、両者は同一面を上にした状態であった。5・25・33もいずれもまとまって出土していることから、被葬者の体内に



第3図 S T 385619木棺墓出土石器(2)

において、破損したものと想定される。6+16+17+26+bはまとまった状態で出土している。1は先端部のみの出土で、同一個体と考えられる破片は認められなかった。2+35+aは3点が接合する石剣で、前方からの衝撃によって片面が大きく破損している。c~eの何れかが同一個体である可能性がある。2+23は2点からなる接合資料で、鋒は破損している。接合状況から前方部からの衝撃によって破損したものと考えられる。図示した以外の磨製石剣に用いられた粘板岩の微細な破片は、洗浄によって多く出土している。研磨面のあるものも若干存在するが、微細で部位を特定することができない。

打製の石鏃はすべてサヌカイト製である。fは先端部のみの出土であるが衝突痕と考えられる剥離が認められる。先端部の欠損したものには8・10・11+19・12・13・14・15・gがある。その多くは衝突時に生じたと考えられる石鏃の調整加工を切る剥離や折れ面をもつ。20は基部の部分に比べ先端部の加工が粗く、特に折れ面から加工がなされ先端部が再生されている。基部に対してやや均整を欠いていることから、矢柄に装着された状態で刃部再生された可能性が指摘できる。10・12・13・15については天地逆の可能性もあるが、13は基部の端部に自然面のあることから、杏仁形の体部をもつ鏃として理解した。10・15は先端部からの衝突痕が認められ解釈と一致する。サヌカイト製品には他に微細なものが多くあり、中には石鏃の器表面に見られるような二次加工剥離痕を留める碎片もある。

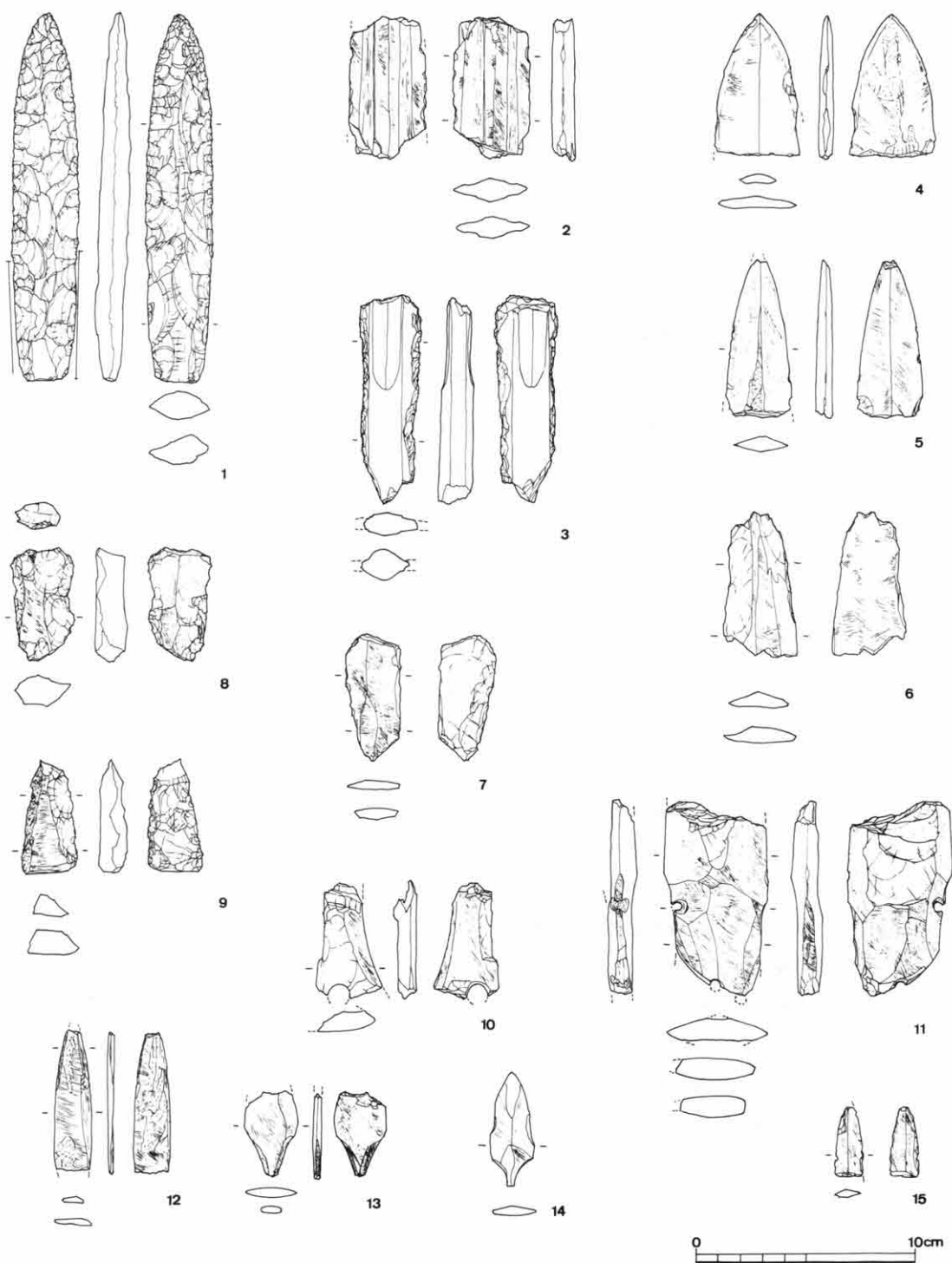
3. 東土川遺跡出土の石器

第4図1はS D 303008出土のサヌカイト製の打製石剣で、基部には自然面が残されている。基部の両側辺は、下から5cmにわたって刃が潰されており、着柄あるいは蔓を巻くのに適した形状に加工が施されている。2は粘板岩製の銅剣形石剣の一部で、種定分類^(注2)のⅡ形にあたる。3は粘板岩製で種定分類^(注3)の0式にあたる。4・5は粘板岩製の磨製石剣の鋒部である。6・7は形状が整わないが、鎬が認められることから、粘板岩製の磨製石剣の一部とした。8・9はサヌカイト製の石器で、研磨面を体部の一部にもっている。8は研磨面を剥離痕が切っている。また、折れ面から加工が施されており、再加工を意図していたと考えられる。このようなサヌカイトの研磨は石剣に多く認められることから、石剣の破損品とした。10・11は粘板岩製の石戈である。10は関の部分が大きく外反し、双孔の穿たれた形態をもつものと想定できる。11は関の部分が左右で異なりずれていることから、石戈とした。11の刃部は研磨が丁寧であるが、茎部は研磨が粗く線状痕が深く刻まれ、砥石の違いが考えられる。穿孔は3ヶ所認められるがいずれも両面穿孔である。関の部分の下にある穿孔は、側縁に近く不自然であることと、研磨の違いから基部の折れたものを再利用した可能性も指摘できる。12は粘板岩の剥片の全面に研磨が施されているが、刃部が認められない。細身の磨製石鏃の整形加工段階のものと考えられる。

4. 小 結

木棺墓S T 385619出土の石器の数の多さから、被葬者の性格については『魏志倭人伝』に言う

持衰的な有力者という説と、戦闘による死亡と2説がある。石器の数量が多いことから戦闘による死とは考えない人もいるが、限界状況下において経済的合理性で人を殺すわけではない。遺物から判ることは、手元から射放った石鏃の多くが完形に近く残っているのに比べ、近接兵器である剣は基部がなく体内で折れた状態で出土し、殺害者の手に柄の部分が残ったと考えられる。鏃



第4図 東土川遺跡出土石器

1・5・14. S D303008

4. S K33611

9・13. S K336141

2・11. 93年度A-1地区包含層

6・7・15. S D33612

10. S D303011

3. 92年度B-1a地区包含層

8. S D336105

12. S D32909

と剣の扱いは使用形態で2者に分けられる。持衰であるならば、第2図7に見られるように元部がほとんど再利用できない大きさのものを取り除くであろうか。またサンプリングに若干の不安があるが、3+23の様に鋒のないものは、被葬者との戦闘中盾に衝突したり、他の人物を殺傷するときに生じたものとは考えられないであろうか。また、これらの出土状態から副葬品である可能性はない。石鏃は近畿地方に多く見られる形態で、石剣の石材の質もまた乙訓地域で産出するものと考えられる。これらのことからいわゆる戦いの規模を考察していく必要があるが、鉄剣形のみが殺傷に用いられていることが、銅剣形との機能の違いを如実に表しているものと考えられる。

また、山城盆地の中においても桂川西岸域である乙訓および京都市の一部は、磨製の石製武器が多く出土するところとして知られている。原料となる粘板岩は、遺跡の立地している礫層中から引き抜くことが可能であるが、法量が小さく石庖丁には利用可能であるが石剣の長さに足りない。より産出地に近い河床や露頭に原石を求めていたと考えられる。周辺遺跡の中でも長岡京市の神足遺跡^(注4)では、鉄剣形石剣40点以上、銅剣形石剣13点以上が出土している。特筆すべきことは35cmを超える整形加工段階の未成品が存在することである。少なくとも石剣を遺跡内で生産していたことが明らかである。また、東土川遺跡の北側約500mに展開する京都市南区の中久世遺跡^(注5)では、12本以上の磨製石剣が発見されているという。磨製石剣の生産体制を検証するのに適した地域と言うことができるが、報告例も少なくまだ研究の緒に付いたばかりである。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第3係調査員)

- 注1 戸原和人・岩松 保・中川和哉他 1995 「名神高速道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
 戸原・岩松・中川他 1996 「名神高速道路関係遺跡平成6年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
 戸原・岩松・中川・野島 永他 1997 「名神高速道路関係遺跡平成7年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第74冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
 野島 永 1997 「名神高速道路関係遺跡平成8年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第78冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注2 種定淳介 1990 「銅剣形石剣試論(上)」『考古学研究』第36巻第4号、種定淳介 1990 「銅剣形石剣試論(下)」『考古学研究』第37巻第1号
- 注3 中川和哉 1996 「銅剣形石剣に関する2、3の問題点」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注4 岩崎 誠・福永伸哉 1991 「4 弥生時代」『長岡京市史資料編』1 長岡京市役所
- 注5 國下多美樹 1994 「山城地域の弥生時代石器」『都城』5 (財)向日市埋蔵文化財センター

平成9年度京都府埋蔵文化財の調査

平良泰久

平成9年度に京都府内で文化財保護法に基く届出・通知が行われた発掘調査は358件、前年度に比べ71件増えているが、これは京都市埋蔵文化財調査センターにおいて実施されている試掘調査を上記件数に新たにカウントされることとなったためであって、発掘調査の実態は数年来大きな変化はない。新発見のニュースは、奈良県「黒塚古墳の三角縁神獣鏡」の大フィーバーが記憶に新しいが、京都府でも年度の押しつまった2月になって、北では舞鶴市浦入遺跡の「縄文丸木舟」、南では宇治市平等院の「翼廊のなかった鳳凰堂」が話題をさらった。以下、平成9年度に京都府内で行われた発掘調査成果について概観する。京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を行った遺跡は右表のとおりである。

旧石器・縄文時代

この時期の発掘は相変わらず少ない。長岡京市南栗ヶ塚遺跡では旧石器時代のナイフ形石器や接合する剥片などが出土、原石を運搬してきて当地で石器を加工したことを示す資料である。

縄文時代については、数は少ないが大きな成果があった。網野町松ヶ崎遺跡では低湿地から前期初頭の土器群、多量の堅果類や石皿・敲石、獣骨・魚骨や石錘等が出土、土器編年の空白を埋めるものとして、また当時の環境や生活を復原する資料として重要である。

舞鶴市浦入遺跡では、海岸線から前期の丸木舟が出土、長さ4.6m、最大幅1m、全長は約10mと推定され、縄文時代最大級の丸木舟であって、外洋航海用とみられる。山陰・北陸等との活発な日本海沿岸交易の様子を示すものとして注目される。

弥生時代

網野町浅後谷南遺跡では弥生時代後期の墳墓と弥生時代後期～古墳時代前期の「水辺の祭祀」の跡が見つかった。墳墓は丘陵上にある9基の木棺墓群であって、中央にある最大の木棺からはガラスの玉類・鉈や水銀朱が出土、福田川流域の有力者の墓とみられる。水辺の祭祀が見つかったのは墳墓のある丘陵の南の谷筋である。水路から土器が多量に出土、精巧に作られた木樋を用いた導水施設も残っていた。スギを主要材とする丹後の優れた木工技術を示す資料である。

亀岡市余部遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓や竪穴住居が多数みつき、住居のいくつかからメノウの石針・砥石・管玉の未製品や石器の加工剥片等が出土した。弥栄町奈具岡遺跡より古く、玉作りが専門化する前の玉作りと石器製作を同時に行っていた工房とみられ、玉作りの技術の発展過程の解明に役立つものと期待される。

長岡京市雲宮遺跡は大規模な発掘調査で弥生時代前期～古墳時代前期の集落の様相が判明し

京都府埋蔵文化財調査研究センター平成9年度発掘調査地一覧

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	天王山古墳群	古墳	久美浜町	増田孝彦 岡崎研一	4～10月	後期古墳10基。木棺墓。
2	谷垣古墳群	古墳	久美浜町	岡崎研一	7～8月	後期古墳1基。木棺墓。
3	別荘遺跡・同古墳群	古墳 集落	久美浜町	増田孝彦	5～10月	弥生後期～古墳時代の竪穴住居。古墳1基。平安鍛冶工房。
4	スガ町古墳群	古墳	網野町	村田和弘	5～10月	古墳4基。木棺墓。地割れ。
5	浅後谷南城跡・同墳墓	城 墳墓	網野町	竹原一彦	10～2月	中世の建物1棟。弥生時代後期の主体部9基。
6	浅後谷南遺跡	集落	網野町	黒坪一樹	10～2月	弥生時代後期の遺物多数。木製導水施設。
7	生野内城跡	城	網野町	竹原一彦	11～12月	城跡に係わる遺構・遺物なし。炭窯1基。
8	吉沢城跡	城 古墳	弥栄町	石尾政信	10～1月	下層に古墳確認。
9	菩提城跡・菩提東古墳	城 古墳	弥栄町	村田和弘	10～1月	建物2棟。柵。
10	茶カス古墳群	古墳	弥栄町	竹井治雄	9～12月	古墳3基。木棺墓。前期～中期。
11	芋野城跡	城	弥栄町	黒坪一樹	5～7月	顕著な遺構・遺物なし。
12	愛宕神社古墳群	古墳	弥栄町	竹原一彦 竹井治雄	4～8月	中期古墳2基。木棺墓。銅鏡(斜縁二神二獣鏡か)・鉄器・玉類・櫛。
13	苗代城跡・同古墳群	城 古墳	峰山町	石尾政信 松尾史子	5～8月	城跡に関わる遺構・遺物なし。古墳6基。木棺墓11基・壺棺2基。
14	相之目古墳	古墳	峰山町	石尾政信	5～6月	顕著な遺構・遺物なし。
15	松ヶ崎遺跡	集落	網野町	戸原和人	7～9月	縄文・弥生土器。古墳時代の井戸。
16	横枕遺跡	集落	網野町	松尾史子	10～12月	緑釉陶器・灰釉陶器等の遺物多数。
17	井町古墳群	古墳	丹後町	引原茂治	10～12月	前期古墳2基。木棺墓4基。
18	浦入遺跡	集落	舞鶴市	田代 弘 筒井崇史	4～3月	奈良時代の竪穴住居。 奈良～平安時代の製塩炉・鍛冶炉。 縄文時代前期～中期の丸木舟。
19	竹中遺跡	集落	舞鶴市	竹下士郎	8～9月	瓦器・土師器等若干。
20	川向古墳群	古墳	舞鶴市	石尾政信 河野一隆	12月～2月	前期古墳1基。木棺墓・壺棺墓。
21	鳥谷古墳群	古墳	京北町	竹下士郎	11月～1月	後期古墳1基、横穴式石室。金環・須恵器三足壺・鉄器。
22	太田遺跡	集落	亀岡市	増田孝彦	10～3月	弥生時代後期～古墳時代前期と中世。
23	余部遺跡第2次	集落 墳墓	亀岡市	野々口陽子	6～2月	弥生の玉作り工房・方形周溝墓。古墳時代の鉄鋌。
24	余部遺跡第3次	集落	亀岡市	引原茂治	7～8月	弥生中期の方形周溝墓1基。
25	成勝寺跡・岡崎遺跡	都城 集落	京都市	有井広幸	1～3月	古墳時代の竪穴住居。平安後期から鎌倉時代の井戸。
26	中海道遺跡第46次	集落	向日市	竹下士郎	5～7月	弥生～古墳時代の竪穴住居。
27	長岡京跡左京第400次・鶏冠井清水遺跡	都城 墳墓	向日市	石井清司	5～8月	長岡京条坊側溝。弥生時代の方形周溝墓。
28	長岡京跡左京第399次・東土川遺跡	都城 集落 墳墓	京都市	戸原和人 岩松 保 小池 寛 八木厚之 中川和哉 中村周平 野島 永	4～2月	長岡京跡および縄文～中世の東土川遺跡。中世の素掘り溝。長岡京南一条大路・掘立柱建物・井戸・土坑等。古墳時代溝。弥生時代方形周溝墓。
29	長岡京跡右京第584次	都城	長岡京市	八木厚之	12月～1月	顕著な遺構・遺物なし。

30	下植野南遺跡	集落	大山崎町	戸原和人 岩松 保 松尾史子	1～3月	弥生時代末期～古墳時代前期。
31	柏平遺跡	集落	城陽市	有井広幸	8～9月	顕著な遺構・遺物なし。
32	佐山遺跡	集落	久御山町	岩松 保 森下 衛	5～12月	弥生時代～古墳時代の竪穴住居。中世の包含層。
33	内里八丁遺跡	集落	八幡市	古瀬誠三 森下 衛 柴 暁彦	4～3月	弥生～中世。奈良時代から平安時代初期の幅12mの道路。
34	宮ノ背遺跡	集落	八幡市	河野一隆	6～10月	弥生後期。縄文土器。
35	西ノ口遺跡	集落	八幡市	河野一隆	6～10月	弥生時代終末期。後期古墳1基。
36	備前遺跡	集落	八幡市	河野一隆	6～10月	弥生時代中期末～後期の高地性集落。石戈。
37	棕ノ木遺跡	集落	精華町	森島康雄 有井広幸	5～11月	中世前期。掘立柱建物。中国製白磁碗。
38	森垣外遺跡	集落	精華町	小池 寛 中村周平	11～3月	古墳時代後期前半。陶質土器、韓式土器。
39	木津城跡・木津城山遺跡	城 集落 墳墓	木津町	古瀬誠三 伊賀高弘 有井広幸	6～3月	城跡に関わる顕著な遺構・遺物なし。弥生後期の高地性集落。弥生後期の方形台状墓2基。鏡片。古墳終末期の古墳。
40	片山1号墳	古墳	木津町	伊賀高弘	8～10月	古墳状隆起。
41	天神山古墳群	古墳	木津町	伊賀高弘	10～1月	古墳状隆起。

た。弥生前期の環濠は幅3m・深さ1mで、これまでに確認されている環濠との位置関係から東西100m以上、南北約80mの大規模なものと推定された。このほかにも前期～中期の溝や焼土遺構多数からなる生産工房、さらに中期末～古墳前期の幅約8mの巨大環濠や竪穴住居10棟以上・方形周溝墓2基等が見つかったという。小形仿製鏡も1点出土。方形周溝墓は、向日市鶏冠井清水遺跡や岸ノ下・殿長遺跡でもみついている。

八幡市備前遺跡は弥生時代中期末～後期の高地性集落である。眺望のよい丘陵上で竪穴住居10棟が見つかり、九州型の石戈が出土した。木津町城山遺跡も弥生時代後期の高地性集落である。東西200m・南北300mの範囲に竪穴住居13棟以上があり、南山城では最大規模である。住居の一つから直径5cmの素文鏡が出土、日本最古の素文鏡の可能性がある。隣接する尾根には方形台状墓が2基並び、少なくとも7基の埋葬施設がある。発掘した1基からは中国製の獣帯鏡の破片が見つかった。鏡片副葬としても古い事例であり、有力集団の村と墓とみられる。

古墳時代

羽柴町愛宕神社古墳群は3基からなる古墳群であり、一辺20mの方墳である1号墳から中国鏡・勾玉・管玉・櫛・鉄刀等が出土した。鏡は破片を重ね棺の小口に立てかけてあり、特異な副葬状態といえる。前期後半の古墳である。同町茶カス古墳群は3基の小円墳・小方墳を発掘した。いずれも木棺直葬墳であるが、副葬品はない。前期～中期に継起的に築かれた愛宕神社古墳群よりは下位のクラス古墳であろう。方墳2基を発掘し、1基から剣と鉈が出土しただけの丹後町井町古墳群や副葬品がまったくなかった網野町スガ町古墳群、舞鶴市川向古墳群も同様なものと考えてよいだろう。

峰山町苗代古墳群は6基の古墳からなり、最大の2号墳は多埋葬墳、その他の古墳は単独埋葬墳である。2号墳の埋葬施設は木棺6基、壺棺3基からなる家族墓である。副葬品は玉類若干と鈿のみであり、前期～中期の古墳群とみられる。

久美浜町天王山古墳群は木棺から玉類・須恵器・馬具等が出土、同町谷垣古墳群も木棺から玉類・須恵器等が出土、いずれも中期～後期に営まれた古墳群である。

加悦町白米山古墳は前年度に引続き行われた確認調査である。前年度の発掘で古墳の大改造として話題となった石垣は後世のものと判明したが、後円部頂上で竪穴式石室が見つかった。内部は未発掘のため副葬品等内容は不明であるが、石室のまわりには杭列と柱穴列が二重にめぐっており、埋葬後古墳の完成までの間に行われた祭祀の様子を示すものとして注目された。

京北町鳥谷4号墳は無袖の横穴式石室を内部主体とする円墳で、古墳時代後期末に築かれたものと判明した。出土した特殊な形の三足壺は渡来系氏族との関わりも推定され、被葬者の性格を考える上で興味深い資料である。亀岡市桜峠18号墳も後期の横穴式石室墳で、金環・須恵器等が出土した。長岡京市井ノ内稲荷塚古墳では前年度の後円部横穴式石室に続き前方部を発掘、玉類・銀環・刀・須恵器等を副葬する木棺を確認した。後円部と前方部で異なる埋葬施設をもつ後期前半の前方後円墳として注目される。向日市では長岡京の造営で破壊された終末期の横穴式石室墳の痕跡が4基みつき(法華寺古墳群)、木津町片山古墳群でも終末期の小横穴式石室墳2基が新たに確認された。

長岡京市今里車塚古墳は、これまで全長約70mの前方後円墳と考えられていたが、周濠の形態等から前方部は予想より小さく、帆立貝形古墳の可能性が高くなった。

ここ数年継続的に調査している山城町椿井大塚山古墳は、くびれ部と前方部を発掘し、後円部が従来の案より一回り大きくなること、石堤による独得の墳丘築造工程が確認された。その工法は、最初に石堤を造って古墳の輪郭を決め、内側に土を盛って墳丘を築くという、他に例のない築造法である。

集落関係では向日市岸ノ下・殿長遺跡、長岡京市谷田遺跡、八幡市内里八丁遺跡、精華町森垣外遺跡等が発掘された。中でも森垣外遺跡は壁立式の住居や陶質土器等朝鮮半島系の遺構・遺物が顕著であり、次年度以降の調査が期待される。生産遺跡関係では長岡京市雲宮遺跡で中期～後期の水田がみついている。

飛鳥・奈良時代

京都市檜原廃寺では北回廊とみられる掘立柱列が見つかった。北回廊であるとするれば南北距離は約110mとなり異常に大きい。遺構の性格や伽藍配置について今後検討を要する。向日市宝菩提院廃寺では北西部の調査で瓦窯が見つかった。京都市檜原廃寺や北白川廃寺の同範瓦があり、瓦の供給関係を考える上で興味深い資料である。

加茂町恭仁宮跡では大極殿の北方内裏推定地で掘立柱塀の北東コーナーがみつき、内裏は東西2区画に分かれるものと推定された。西側の区画は東西約98m・南北約127mの長方形と確定した。近年の調査で判明した宮の四至の問題とも合わせて、恭仁宮独自の配置形態を示すものと

して注目される。

八幡市内里八丁遺跡・京田辺市興戸遺跡では道路関連遺構が見つかった。内里八丁遺跡は北々西一南々東に平行して走る2条の溝(心々距離12m)で、足利健亮氏の提唱する推定古山陰道に位置及び方向が概ね一致することから奈良時代の山陰道の遺構と考えられ、隣接する建物群はこれに関連する公的施設の可能性が想定された。興戸遺跡の道路遺構は平行する2条の溝が十字形に直交しており、古代山陽道と推定される府道と方位が一致し、山陽道を基準に付近の区画整理が行われたものとみられる。

生産関係では、平安時代の製塩遺跡とみられていた舞鶴市浦入遺跡で奈良時代に遡る製塩・鍛冶遺構群が見つかった。丘陵を削ってテラスを造成、そこに製塩炉・鍛冶炉・掘立柱建物等を配置している。

平安時代

長岡宮関係では、向日市鶏冠井町の大極殿の前庭にあたる場所で「宝幢」の遺構とみられる大規模な柱穴が見つかった。宝幢は本来天皇の即位式に立てられたものだが、長岡京期に即位はなく、正月朝賀にも同様な儀式を行ったものとして注目される。大極殿の西側では昨年度検出された地鎮祭祀場跡の構造が判明した。二重の杭列で区画された30m四方より大きい方形区画で、南北二区に仕切られ、北側には石を使った祭壇が設置された可能性が考えられた。春宮坊では春宮坊関連の木簡約150点・漆紙文書(死亡人帳)・墨書土器・琥珀・べっ甲等が出土、春宮坊の役所の様子や他の役所との連携の実態をうかがえる興味深い資料である。京域の調査では、京都市南区でここ数年継続発掘されていた名神高速道路関係の調査が終了した。今年度は平安時代の銅印が出土したほか、長岡京関係では条坊道路と小建物の検出にとどまったが、全体として5万㎡を越える広大な面積を発掘しており、今後の成果のとりまとめが期待される。長岡京市神足の東市推定地では掘立柱建物や墨書土器が出土、役所の可能性も考えられるという。その隣接地の調査では多数の掘立柱建物や金銅飾鋳・分銅等が出土している。

平安京関係では、京都市中京区の高陽院・朱雀院・右京職の調査が注目される。高陽院は平安時代を代表する邸宅の一つだが、池の洲浜とともに今回初めて建物の礎石の一部が見つかった。建物は西対の一部とみられている。嵯峨上皇の離宮である朱雀院では掘立柱建物3棟が整然と並び、出土した平城宮や長岡宮の瓦等から旧都の建物の移建・再利用とみられている。右京職では掘立柱建物とともに「計帳所」「右籍所」などと書かれた墨書土器が見つかり、文献や古地図でしかわからなかった右京職の場所がはじめて特定された。

平安京の周辺では、右京区梅ヶ畑で平安時代初期の雨乞い祭祀の跡が、右京区太秦で中期のロストル式平窯が、北区金閣寺で後期の建物等が見つかった。梅ヶ畑祭祀遺跡は丘陵上の三段の区画に石敷・焼土があり、二彩陶器・瓶子・皇朝十二銭等が出土した。『扶桑略記』の記述を裏づけるものとして注目される。金閣寺で見つかったのは建物と築地塀の一部で、金閣寺の前身「北山第」のさらに前身にあたり、成立と変遷の過程を追求し得る貴重な資料である。さらに大山崎町の天王山頂で平安初期の蔵骨器が出土、中には火葬した女性人骨と水晶玉が納められていた。

府北部では網野町の横枕遺跡で竪穴・井戸・土坑・鍛冶炉等の鍛冶関連遺構と平安時代前期の緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・墨書土器・帯金具等の官衙的要素の強い遺物が出土、海上交通の要衝にあたり、物資の集積地とみられる。大江町河守遺跡では平安初期の条里水田と「津丸一段」と書かれた木簡がみつかった。由良川流域の小平野であり、水田の所属時期等今後の検討を期待したい。

府南部では宇治市の平等院・白川金色院で大きな成果があった。平等院鳳凰堂は創建当初中央の中堂だけで両脇の翼廊はなかった可能性が指摘された。すなわち南翼の下層から洲浜がみつかったのであり、創建当初の鳳凰堂の姿をどう復原するか、歴史・建築・庭園の分野で大きな議論が沸き起った。この他平等院では南泉坊の庭園がみつき、付近の矢落遺跡では藤原氏の別業の一つとみられる庭園の洲浜がみつかった。白川金色院の経塚は中国製の青白磁の合子・和鏡・ガラス小玉・北宋銭等が納められていた。子持ち合子は他に例のない一級品だという。

鎌倉・室町・江戸時代

野田川町の山岳寺院雲岩寺跡では鎌倉中期の経塚から獅子形の金銅製飾り金具が出土、亀岡市の太田遺跡では掘立柱建物や井戸とともに鉄滓・刀子片等が出土、鎌倉前期の鍛冶工房とみられる。

京都市上京区では足利義昭邸かとみられる安土桃山時代の庭園遺構が、下京区では室町初期の鑄造工房とみられる炉や鏡の鑄型多数が、山科区の山科本願寺跡では幅10mを超える巨大な濠や石垣・暗渠、焼けた建物遺構が出土、室町末期の動乱期における堅固な城塞としての寺院の実態を示す資料として注目される。向日市物集女城跡では土塁が応仁の乱を背景に築造されたものと判明した。

寺院関係では、京都市山科区の醍醐寺の子院「妙法院」、宇治市の三室戸寺の子院の遺構を発掘、平安末期から室町時代に至る長期の変遷をたどることができる。宇治市白川金色院では室町中期の儀式用の井戸「閼伽井」がみつかった。

精華町椋ノ木遺跡では平安時代後期～鎌倉時代の方格地割りの溝や掘立柱建物・墓等を発掘、中世集落の中心部分や範囲、集落の変遷が明らかになった。

4月30日に中山修一先生が、12月28日に杉山信三先生が相いついで逝去された。中山先生は長岡京の調査と研究に、杉山先生は平安京の調査と研究にささげられた生涯であった。御冥福をお祈りしたい。

(たいら・やすひさ＝当センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長)

平成9年度発掘調査略報

18. 別荘古墳群・別荘遺跡

所在地 熊野郡久美浜町鹿野小字別荘
 調査期間 平成9年5月1日～10月23日
 調査面積 約5,000m²

はじめに この調査は、丹後国営農地(西部地区)開発事業の鹿野団地造成に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。鹿野団地造成工事に伴う発掘調査は、平成8年度から開始され、天王山古墳群A・B支群の調査を、京都府教育委員会・久美浜町教育委員会・当調査研究センターとの3者が分担して調査を実施してきた。

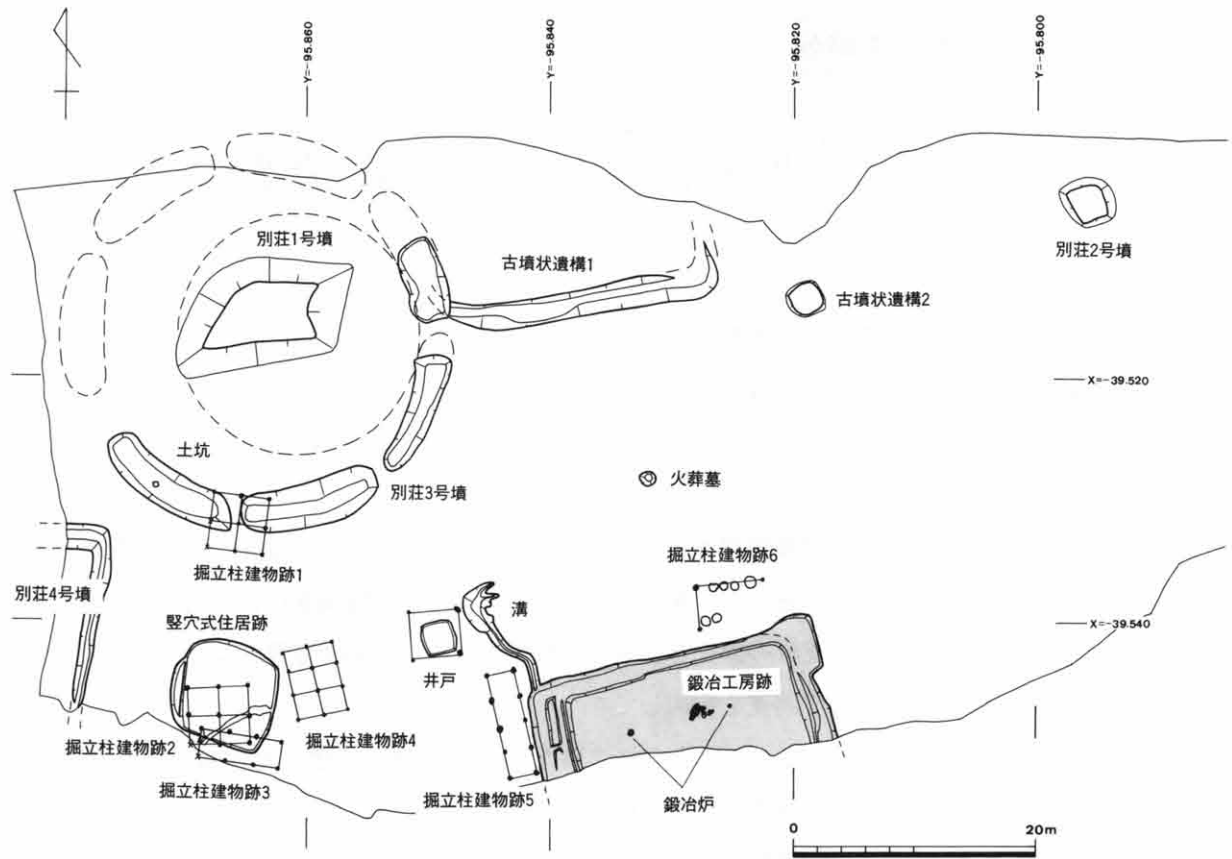
調査概要 別荘古墳群では、1号墳南側で新たに墳丘部分が全壊した古墳2基が検出され(3・4号墳)、東側では古墳状遺構2基も検出した。調査終了時点で別荘古墳群は、新たに検出した古墳2基を加え3基の古墳群(1・3・4号墳)と、1基の古墳状遺構(古墳状遺構1)、2基(2号墳・古墳状遺構2)の方形の段地形を検出した。方形の段地形については、五輪塔・石仏を安置していた段と考えられる。

別荘遺跡では、1号墳南側で古墳時代中期の竪穴式住居跡2基、中世の遺構として平坦部中央から南側で掘立柱建物跡6棟以上、鍛冶工房跡を検出した。鍛冶工房内では、建て替えに伴う掘立柱建物跡8棟、鍛冶炉5基も検出した。鍛冶炉は削平を受けており、本体部分が一部残存するものは1基のみであった。最初に建てられたと考えられる建物跡には、入り口部分に岩盤を削り出した階段が設けられていた。そのほか土坑1基、火葬墓1基、溝状遺構1条、1,200を越える柱穴群などを検出した。これ以外のものとして、竪穴式住居跡1・2の西側に南北にのびる畑の区画溝は、中世の段階では台地上の集落に入る道路であった可能性がある。他の区画溝に比べて深く、3号墳の周溝近くで急に細くなっていたり、3号墳の周溝内には土坑があり、検出面での規模は、約0.6m×約0.8m・深さ約0.3mを測り、周溝が埋まってから土坑を掘削したとすると約1.3mの深さとなり、掘削不可能であり、道路のすぐ近くに土坑を設けていたものと考えたい。

まとめ 別荘古墳群、天王山古墳群A・B支群の調査結果と合わせて考えてみると、後期古墳は、い



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 遺構配置図

いずれも6世紀中頃の築造で、時間差をおかず短期間で出現したもので、2～3基を一単位として丘陵全域に分散している。立地や墳丘築造方法、規模、副葬品など、内容が一定でない点や、先の古墳を破壊した上に新たな古墳を設けていることから造墓集団の違いが指摘される。丘陵上には、横穴式石室を内部主体とする可能性がある鬼の釜古墳群があり、佐濃谷川河口域での横穴式石室導入直前の古墳群の可能性もある。

別荘遺跡で検出された竪穴式住居跡や、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての出土遺物は、天王山古墳群築造に直接関係する可能性がある。

掘立柱建物跡については、鍛冶工房内の掘立柱建物跡と方向が異なる掘立柱建物跡と2種がある。鍛冶工房内で検出された掘立柱建物跡は規模・構造的にもしっかりしたもので、貯蔵庫や多くの土器類から定住しながら鉄器生産が行われていたと推定される。工房跡周辺の建物跡群のうち、工房と同方向になるものは、工房に伴う住居や倉庫などが考えられる。工房及びそれに関連する施設については平安時代末期～鎌倉時代初頭に比定される遺物が出土しており、また工房と方向が異なる建物跡についても、周辺から出土した遺物によって鎌倉時代中頃の時期が考えられる。集落跡としては、立地条件や規模などから、谷を挟んだ南西側の台地に位置する鹿野A遺跡が考えられる。また、鎌倉時代初頭には鹿野庄や鹿野保という庄園名が文献に見られることと合わせて、この地域の中世を考える上で重要な遺跡となった。

(増田孝彦)

19. 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓

所在地 竹野郡網野町高橋地先
 調査期間 平成9年10月2日～平成10年2月26日
 調査面積 約350m²

はじめに 今回の調査は、丹後国営農地郷1団地造成に伴って、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。浅後谷南城跡は、日本海に注ぐ福田川右岸丘陵上(河口から2km)に所在する。今回は、浅後谷南城跡のうち、尾根先端部付近に認められた平坦面が調査対象地となった。浅後谷南城跡は、『京都府遺跡地図』所収の周知遺跡であるが、同城に関する城主・性格・内容などは不明な点が多い。

今回の調査では、城跡関連施設を検出するとともに、新たに弥生時代の墳墓の存在を確認した。当初、弥生墳墓については周知の遺跡でなく、同墳墓に対し網野町教育委員会によって浅後谷南墳墓の新名称が与えられた。

調査概要 浅後谷南城跡は過去に調査例がなく、調査開始に当たり、遺構の遺存状況を把握することを目的に試掘調査を実施した。調査対象地となった尾根先端の平坦地は標高約28m付近にあり、水田部との比高差は約15mを測る。試掘調査の結果、調査対象地(約20m×約20m)から柱穴跡のほか、多数の耕作溝を検出した。この試掘調査の成果をもとに、その後の調査は平坦面全域を対象として面的調査に移行した。

調査の結果、城跡関連施設として掘立柱建物跡1棟と柵列を検出した。また、同一遺構面から弥生時代に属する埋葬主体部9基を検出した。

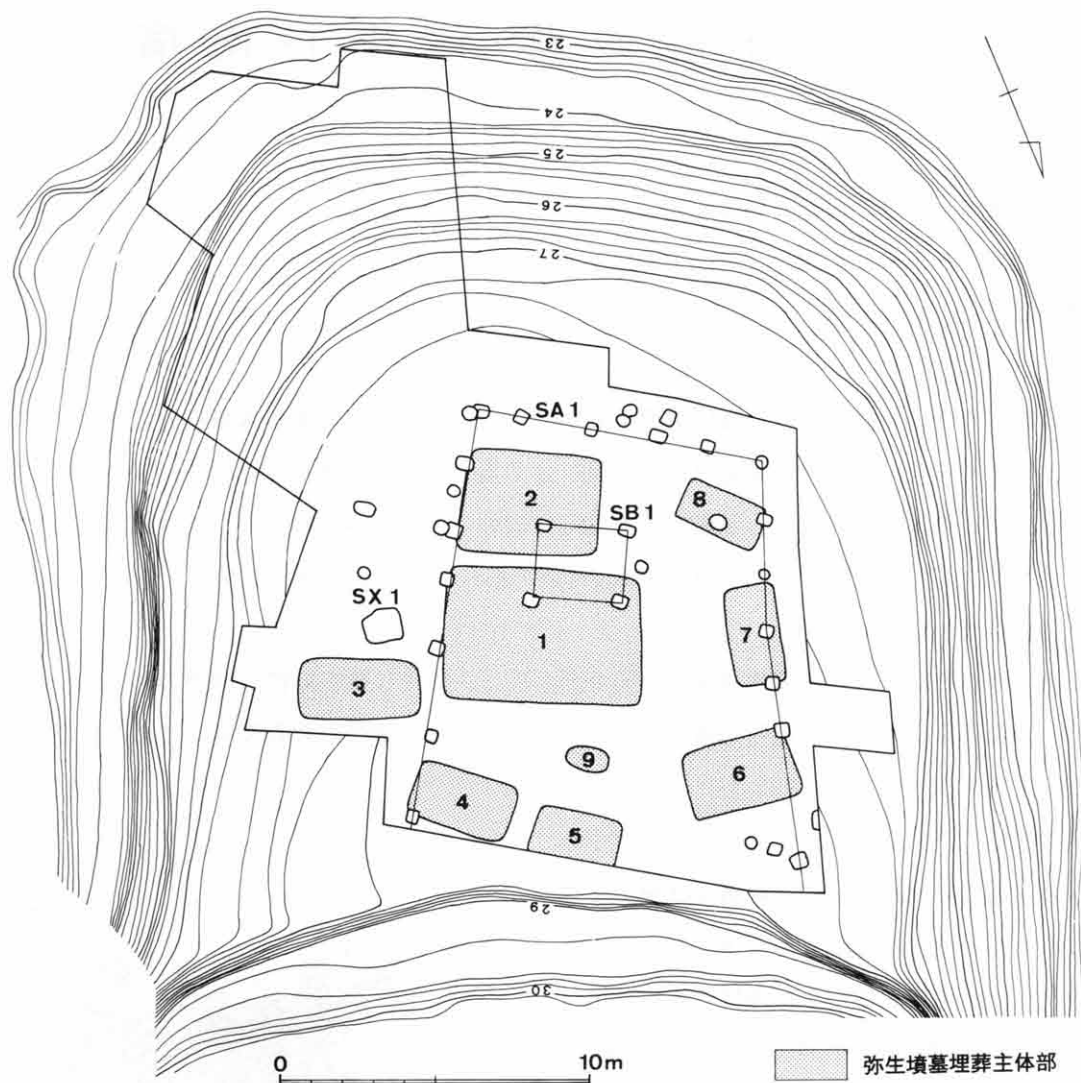
城跡関連遺構 掘立柱建物跡(SB1)は1間四方の建物跡であり、規模は約3.0m×約2.3mを測る。建物跡の柱穴掘形は方形で、一辺約50cmの規模を測る。建物跡は尾根の軸線に主軸を合わせており、北から西に約28°振っている。

柵列(SA1)は、建物跡の北東側(尾根高所側)が調査範囲外で確認できないが、建物跡の



第1図 調査地位置図(1/50,000)

1. 浅後谷南城跡
2. 浅後谷南遺跡
3. 網野銚子山古墳



第2図 調査地平面図

四周をめぐらず、さらに尾根上部に向かっていとみられる。柵列の柱穴間隔は1.5~2.8mを測る。

墳墓関連遺構 検出した埋葬主体部は9基である。各埋葬主体部は切り合い関係をもたず、大型墓壙を中心に置き、周囲に8基の埋葬主体部を配置する状況にある。

今回の調査で検出した埋葬主体部の中で特に目を引くのが、第1主体部とした中心埋葬施設である。第1主体部は平坦面の中央に位置し、大規模な墓壙をもつ。長方形を呈する墓壙は、いわゆる二段墓壙と呼ばれ、平坦な墓壙底の中央部に木棺埋納土壙をもつ。墓壙規模は全長約6.5m×幅約4.4m、検出面から棺底面まで約1.7mの規模を測る。墓壙埋土掘削過程で木棺痕跡(黄色系砂)を確認し、舟形木棺が使用されていたことが明らかになった。検出した舟形木棺の痕跡は、全長約4.0m×幅約1.55m×高さ約0.7mの規模を測った。木棺埋納土壙の底面中央部には、全長約2.2m×幅約0.6mの範囲で水銀朱の散布がみられた。特に、東端部付近の朱は鮮やかで厚みをもっていることから、被葬者の頭部に当たると判断する。副葬品として、頭部付近からガラス製勾玉5点・小玉200~300点・鉄製鈍1点が出土した。また、北側棺外の長側面から鉄剣2点

が出土している。

他の第2～第8主体部も第1主体部と同様に木棺直葬であり、第9主体部のみ土壙墓である。

まとめ 今回の調査では、浅後谷南城跡関連施設のうち、物見槽と推測する建物跡を検出した。また、新たに弥生時代後期の墳墓を検出する成果を得ることができた。

墳墓で検出した中心埋葬施設(第1主体部)の被葬者は、その内容からすれば、この地域を統括する指導者の1人とみられる。今回の調査と同時に実施した浅後谷南遺跡(南西側丘陵裾)調査(本誌掲載)でも、墳墓と同時期の土器が多量に出土している。浅後谷南遺跡は集落跡であり、その指導者層の墓が浅後谷南墳墓と判断してよからう。今回の調査地のさらに尾根上部側には、いくつかの同様な平坦面が存在することから、さらに数基の弥生時代の墳墓の存在が予測される。今後、浅後谷南遺跡を含め周辺地での調査が進めば、より多くの成果が得られよう。

(竹原一彦)



弥生墳墓第1主体部全景(北西から)

20. 吉 沢 城 跡

調査地 竹野郡弥栄町字吉沢小字天神山・家ノ山ほか
調査期間 平成9年10月27日～平成10年1月29日
調査面積 約650m²(試掘)

はじめに この調査は、丹後国営農地開発事業(吉沢団地)に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。吉沢城跡は、弥栄町字吉沢小字城山に所在する早尾神社境内を中心とした戦国時代の城跡とされる。城跡は、神社本殿がある標高約68mのやや広い平坦地と、その南に同じ標高の平坦地があり、土塁跡と推定される高まりがみられる。この平坦地の間には深い堀割があり、北側の平坦地に主郭(本丸)が推定される。周囲は急な崖で、それから下にこれらを取り巻く曲輪群が造られている。今回の調査対象地は、吉沢城跡の南東の丘陵上に所在する平坦地で、南方まで広がる広域の城跡と推定した場合に、関連する施設が想定される。そこでは、平坦地や階段状の地形が観察できた。また、南側には、弥栄町小原集落に至る道沿いの低丘陵に新ヶ尾古墳群、同東古墳群があり、北方の丘陵には茶カス古墳群があり、古墳の可能性もあった。

調査概要 調査対象地を、方形の平坦地と緩傾斜地及び階段状地形、二段の平坦地が続く地形、稜線が古墳状を呈する地形の3か所に分け、竹野川に近い方から、A・B・C地区と呼称した。

A地区では、平坦地・緩傾斜地・階段状地形に、幅約1.4mのトレンチを合計9か所設定した。試掘調査によって、方形の平坦地で隅丸方形土壙(埋葬施設)1か所、緩傾斜地及び階段状地形で隅丸方形土坑を3か所、緩傾斜地の南東で溝跡を検出した。また、緩傾斜地の西側に急斜面があり、急斜面の崩落土から平安時代後期の土器が出土した。

B地区では、試掘調査で土坑が見つかり、表土掘削の範囲を拡大した。低位平坦地で方形土坑1か所、高位平坦地で炭や焼土が混じる土坑2か所、平坦地の地形変換点で落ち込みを検出した。



調査地位置図(1/50,000)

C地区の試掘調査では、表土直下が黄褐色・淡褐色砂質土(花崗岩風化土)の「地山」となり、自然地形と判明した。

まとめ 城跡に関連するものには、緩傾斜地の南東で検出した尾根筋を断ち切る溝跡と、緩傾斜地西側の急斜面がある。溝跡以外は掘削しておらず、時期は不明である。A地区で検出した隅丸方形土壙(埋葬施設)を古墳と判断して、弥栄町教育委員会と協議した結果、小字名から家ノ山古墳群と呼ぶことになった。

(石尾政信)

21. 菩提城跡(菩提東古墳)

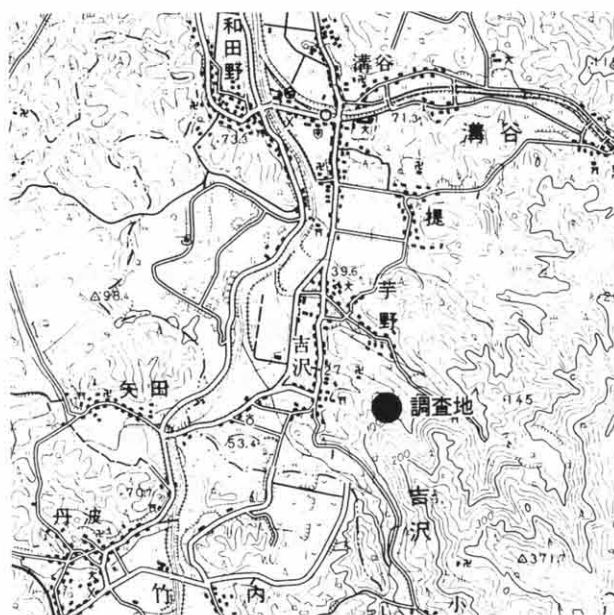
所在地 竹野郡弥栄町字吉沢小字菩提
 調査期間 平成9年10月13日～平成10年1月23日
 調査面積 約450m²

はじめに 今回の調査は、丹後東部地区国営農地開発事業吉沢団地の造成に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。調査対象地は、竹野川の東側にある吉沢地区の入り組んだ丘陵上に位置する。調査地は、丘陵の主尾根と切り放された尾根先の小高い丘陵の南側半分である。

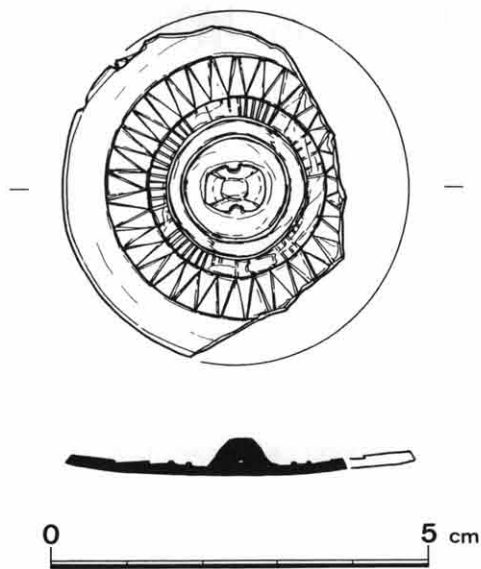
調査概要

(1)菩提城跡の遺構(中世の遺構) 小高い丘陵の頂部平坦地で、径約15～20cmの柱穴を数多く検出し、建物跡2棟と塀5列があったと思われる。建物跡は、東西棟の掘立柱のものを2棟検出した。2棟の建物跡は、掘立柱塀で囲まれるように区画されている。塀は、頂部平坦地で4列、東側のテラス部分で塀を1列検出した。また、不定形の土坑や南北方向に長い「コ」の字状を呈する小溝、東西方向の短い小溝などを検出した。出土遺物は、須恵器・土師器・陶磁器などの数点の土器片と砥石1点・鉄製の鋤先1点であった。これらの遺構は、切り離された小高い丘陵内で完結しており、本城の付属施設と思われる。規模もそれほど大きくなく、見張り施設のような可能性が考えられる。調査区の南端で、陸橋が確認できたこともその裏付けとなろう。

(2)菩提東古墳の遺構(古墳時代の遺構) 頂部平坦地の東側半分の下層及び西側斜面や東側テラス部分で、古墳時代の遺構を検出した。墳丘頂部東側は、城跡の遺構で削平され、古墳時代の遺構は破壊されている状況であった。墳丘は、後世に地形が変えられ詳細不明であるが、長方形の方墳と考えられる。現状での規模は、南北が約20m・東西16m、墳丘の高さは約2mを測る。検出した遺構は、埋葬施設4基や土坑などである。埋葬施設は、頂部平坦地で破壊されたものが1基、南西斜面で1基と東側テラス部分で2基検出した。その内、丘陵の南西側の斜面を平坦に削り込んで造られているものを第1主体部とした。第1主体部は、二段墓壇の木棺直葬墓である。下段の墓壇内(棺内)の北側には、朱が床面



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 第1主体部出土小型鏡実測図

城跡の遺構では、建物跡は、堀によって区画され、その方向などに規則性がみられる。しかし、建物跡の規模が小規模な上に、遺物が少量であることから常駐する施設ではなく、小規模な見張り台程度の施設の可能性がある。ここから北側と西側の平地が一望できることから、この地に設置されたと考える。調査地の南側には、陸橋が存在し、南側に城の本体が存在する可能性がある。これらの遺構の時期は、出土遺物から平安時代末～鎌倉時代前期と考えられる。今後、山城に伴う小規模な見張り施設のような遺構について、その役割と機能や城本体との位置関係などを検討する必要がある。また、今回の調査で新たに検出した下層の古墳時代の遺構は、埋葬施設など古墳に伴う遺構であったため、弥栄町教育委員会と協議し、「菩提東古墳」の名称が新たに与えられた。埋葬施設は、頂部の平坦地には1基しかなく、丘陵斜面や東側のテラス部分で3基検出した。これら4基の埋葬施設は、すべて小規模なものであった。この古墳には、小規模な埋葬施設が点在するだけで、中心となる埋葬施設は墳頂部では検出できなかった。しかし、墳頂部は、遺構の残存率が低く、後世に削られ破壊された可能性もある。だが、南西側の墳丘斜面の途中に設けられた第1主体部からは多量の遺物が出土した。第1主体部は、小規模な墓墳ではあるが、玉類や鏡が副葬されていることから、この地域での主要な人物が埋葬されていた可能性が考えられる。しかし、墳頂部ではなく墳丘斜面の途中に造られるなど立地に特異性がみられ、今後類似する検出例などから検討する必要がある。この主体部の埋葬時期は、出土した遺物の玉類のセット関係などから古墳時代前期後半～中期初めと考える。鏡は、錆などでろくなっており、鏡背の文様などは判別しづらいが、鋸歯文や櫛描き文が確認できた。大きさは、施文の鏡としては、京都府内では最小と思われる。この鏡は、現在、類似鏡や鏡式を検討中である。

今回の調査で、中世の山城に関連する遺構のほかに、新たに古墳時代の遺構が確認されたことで、今後この付近にも古墳の存在が予想される。また、丘陵の先端に存在する菩提古墳との関連も検討する必要がある。

(村田和弘)

から約2～5cmの厚さで人頭大の広がりで敷かれていた。朱の堆積の底から、板状滑石製勾玉が1点出土した。中央付近で管玉3点やガラス製(アルカリ石灰)小玉9点・滑石製小玉55点・琥珀玉4点が集中して出土した。玉類の集中した地点からやや南側で、青銅製の小型鏡が鏡面を上にした状態で1面出土した。この鏡は、径約4.5cmと小さく、一部欠損する。鏡背の文様は、外区に鋸歯文、内区に櫛歯文が確認されるが、錆などで細かい文様が判別しづらい。

まとめ 今回の調査は、当初、城跡として発掘調査を開始したが、城跡に関する遺構(中世)のほかに、下層で古墳時代の遺構を確認した。

22. 太田遺跡第5次

所在地 亀岡市藤田野町太田107・107-1・2
 調査期間 平成9年10月29日～平成10年3月3日
 調査面積 約1,700m²

はじめに この調査は、府営ほ場整備事業に先立ち、京都府亀岡土地改良事務所の依頼を受け実施した。太田遺跡は、亀岡盆地西側の行者山麓部に東西1,400m・南北600mにわたって広がる弥生時代前期から中世の大規模な複合遺跡である。調査地周辺には弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が多数存在している。

太田遺跡は、過去4次にわたる発掘・試掘調査が実施されている。

調査概要 検出された遺構は、竪穴式住居跡2基、掘立柱建物跡8棟以上、柱穴約700以上、井戸6基、土坑2基、溝45条がある。

弥生時代の遺構は、柱穴であるが、建物跡を特定することはできなかった。

古墳時代の遺構としては、1トレンチ西側拡張部で竪穴式住居跡2基を検出した。いずれも中世以降の遺構により削平を受けており、残存状況はよくない。

鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物跡8・井戸6・溝45・土坑3がある。掘立柱建物跡の多くは、南北方向に主軸を置く傾向が認められた。

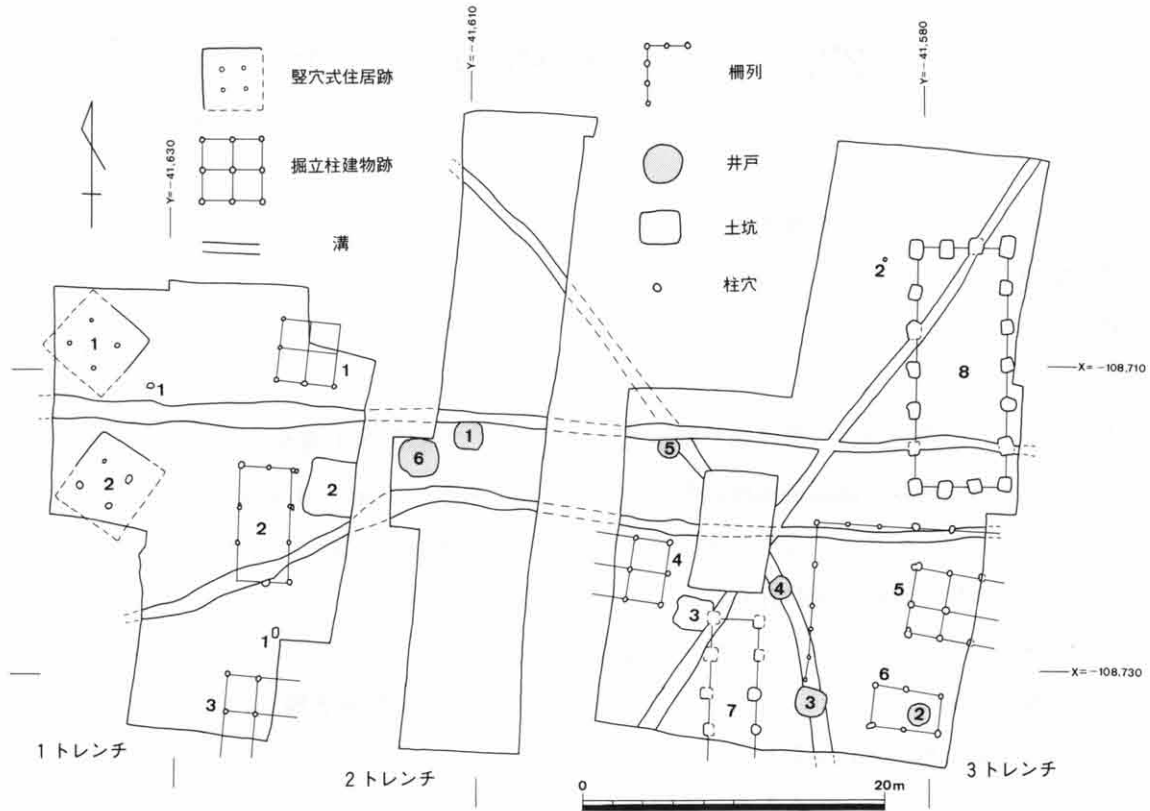
3トレンチ北側の大型掘立柱建物跡は、3間(約6.3m)×6間(約15.6m)を測る南北棟建物跡で、方位は真北を向く。柱間寸法は、桁行約2.6m・梁間約2.1mの等間隔を測る。

以上の掘立柱建物跡は、掘立柱建物跡8と同方向になる掘立柱建物跡と同時期と思われる。出土遺物から13世紀中頃～後半に比定される。

溝 南北方向にのびる溝は、現在の畦畔と同じ方向で、大半が耕作や区画に伴うと考えられる。出土遺物から、14世紀以降に掘削されたものであり、方向などから条里の基準に合わせられたとも考えられる。溝3・4は、現在の畦畔になる以前の集落内の水路であった可能性がある。注目されるのは、各トレンチの中央部分を東西にのびる幅約0.7m・深さ0.7m前後の2条の溝で、両溝間は、各トレンチとも平均約5mの幅を持っている。3トレンチ～2トレンチまではほぼ直線的にのびてきた二つの溝のうち、北側溝1は1トレンチ端まで直線的に続くが、南側溝2は1・2トレンチ間でその方向を南南西に転じている。この2つ



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 遺構配置図

の溝は、道路に伴う側溝であったと考えられ、出土遺物から13世紀前半～中頃と考えられる。また、1トレンチで南側溝2が方向を転じる部分は、「Y」字状に分岐する交差点の可能性もある。

3トレンチで検出した大型建物跡は、道路遺構が機能を終えた後に建てられている。道路遺構と平行する建物跡は、道路遺構と同時期と考えられるが、道路上に建つものはそれ以前の建物と推定される。建物跡は、遺物包含層中から鍛冶滓や少量の鉄製品が出土していることから、鍛冶工房(鍛冶生産)に伴う建物跡の可能性もある。

井戸 出土遺物からすると、井戸1・3(方形木枠組み井戸)・5(素掘り井戸)は11世紀中頃～後半、井戸2(円形石組み井戸)は13世紀前半～中頃、井戸4(円形石組み井戸)は13世紀中頃～後半、井戸6(方形石組み井戸)は13世紀後半のものと考えられ、時代を追ってその築造方法が異なる。

まとめ 調査によって、行者山麓部分にも弥生時代後期の集落が存在することが判明し、古墳時代後期の竪穴式住居跡も検出され、西方に位置する鹿谷遺跡との関係が注目される。

奈良時代・平安時代についても、出土遺物や遺構などから引き続き集落が形成されていたことが明らかである。鎌倉時代には、道路遺構を中心に小規模な掘立柱建物跡とともに礎石を伴わない大型建物跡を検出し、集落内での建物の配置やありかたを考える上で重要なものとなった。また、時期を特定することはできなかったが、鍛冶滓の出土は亀岡市内では初めてであり、生産活動を知る上で重要なものとなった。これらのことは、この地域とされる中世の佐伯荘を考えていく上で興味深い。

(増田孝彦)

23. 余部遺跡第2次

所在地 亀岡市余部町新条
 調査期間 平成9年6月2日～平成10年2月13日
 調査面積 約2,240m²

はじめに 今回の発掘調査は、広域幹線アクセス街路整備事業に先立ち、京都府亀岡土木事務所の依頼を受けて実施した。遺跡は、亀岡盆地のほぼ中央部に位置し、東西約900m・南北約1kmにわたって広がると推定されている。調査地南側の微高地では、平成9年度に、弥生時代中期の竪穴式住居跡群や環濠の可能性ある溝状遺構が調査されている。

調査概要 調査地点は、遺跡の北域にあたり、主に弥生時代から古墳時代にかけての多くの遺構を検出した。調査区は、第1トレンチから第7トレンチまで、東から7区にわけて進め、第1トレンチ東側と北側では、古墳関係の遺構などが広がる可能性があったため、一部農道下で拡張調査を実施した。また、第2トレンチでも弥生時代の玉作り工房を検出したために、同様に当初の調査予定区を拡張して調査を行った。

今回の調査では、弥生時代の竪穴式住居跡1基・方形周溝墓19基と、古墳時代の埋葬施設2基・竪穴式住居跡9基・掘立柱建物跡19棟、さらに中世以降の素掘り溝を検出した。

第1トレンチでは、弥生時代中期後半の4基の方形周溝墓を検出したが、このうち最大規模の方形周溝墓101は、東西約9.7m・南北約13.5m・深さ0.4～0.7mを測り、周溝内から、弥生土器、石庖丁などが出土した。削平のため、明確な主体部は確認できなかった。第1トレンチ東側で検出した古墳時代中期の埋葬施設105は、約2.4m×約0.7m・深さ約0.2mを測り、土坑内から鉄鋌2点・鉄斧2点・鉄鎌1点・鉄剣1点・鉄刀子1点・滑石製勾玉1点・白玉10点が出土した。また、第1トレンチ北側で検出した古墳時代中期末～後期と推定される掘立柱建物跡114は、調査区内で最も規模が大きく、柱間が1.8～2.0mを測る3間×6間の建物跡である。第2トレンチ北側で検出した竪穴式住居跡216は、長径約8.0m・短径約6.0mの平面形が楕円形の住居跡である。床面から筋砥石、碧玉剥片、安山岩製石鏃未製品、大陸系磨製石斧、石庖丁などが出土した。住居跡内及び周辺の土砂の洗浄を行った結果、碧玉製管玉未製品とともに、玉髓製



第1図 調査地位置図(1/25,000)



調査地遠景

の打製石針が出土した。一方、第5トレンチでは、古墳時代中期～後期の竪穴式住居跡2基、古墳時代後期と推定される掘立柱建物跡5棟を検出した。このうち掘立柱建物跡505は、柱間約2.0mの3間×3間の総柱建物跡で、柱穴内から土師器高杯の脚部が出土している。

まとめ 今回の調査によって、余部遺跡は、弥生時代～江戸時代までの複合集落遺跡であることが明らかになった。

特に注目されるのは、弥生時代の遺構群であり、方形周溝墓群の検出によって、拠点集落の外縁部に形成された大規模な墓域であることが判明した。また、弥生時代中期前半と推定される碧玉製管玉の生産が行われていた玉作り工房跡の調査では、土納袋約500袋に及ぶ住居跡の埋土を洗浄をした結果、管玉穿孔に用いられたと考えられる多くの玉髓製打製石針が出土し、府内では奈具岡遺跡につぐ2例目の打製石針の出土資料を得た。工房内では、石斧・石鏃などの石器製作が同時に行われており、玉作りの生産形態を考えるうえで興味深い資料となった。

古墳時代の遺構では、調査区東端で鉄鋌などの鉄器や玉類を副葬する埋葬施設を検出した。これについては、埋葬施設東側で検出した同時期と推定される溝が、古墳の周溝の一部となる可能性が高いことから、周辺埋葬と考えるのが妥当であろう。

(野々口陽子)

24. 長岡京跡右京第584次(7ANGND-1地区)

所在地 長岡京市井ノ内的田21
 調査期間 平成9年12月1日～平成10年1月27日
 調査面積 約350m²

はじめに 今回の調査は、外環状線広域幹線アクセス街路整備事業に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。今回の調査地は長岡京跡の条坊推定地では、西二坊大路と南一条条間第一小路(新呼称：二条条間北小路)の交差点南方の、西二坊大路部分に当たる。過去における周辺地域の調査では、南方で西二坊大路東側溝や路面の轍などが検出されている。また、縄文～中世に集落が営まれていた上里遺跡でもある。

調査概要 調査地の層序は、現代の盛り土の下に旧耕作土があり、その下には黒灰色粘質砂礫層、暗黒灰褐色粘土層、明黄灰白色粘質土層、明黄灰色粘質土層が認められたが、遺構・遺物の存在は確認できなかった。調査地北半部では上記の土層に続く暗茶灰色砂礫層上面で精査を行った。南半部では、明黄茶色砂礫層上面で、精査を行った。

その結果、調査地北端部を中心に、溝状に灰色に変色する部分が3条認められた。また、その南側でも、調査地を東西方向に横断する形で溝状に灰色に変色する部分と、それと同様な溝状の黒色に変色する部分を確認し、その後精査を行った。土器の小片が数点出土したが、断面観察により自然流路跡と認識した。

また、その南の黒色の溝状の凹みについては、ここからも土器の小片が数点出土したが、断面を観察することによって、黒色粘土の堆積であると認識した。さらに、調査地の南半部では、礫が広がり流路状に見える部分を2条検出した。断面観察の結果、いずれも自然流路跡と認識した。

まとめ 今回の調査では明確に長岡京期の遺構と考えられるものは、検出できなかった。過去の開田化の際に大きく削平された結果とみられる。自然流路跡から出土した弥生土器は、当該地が上里遺跡の縁辺部であることを示している。

(八木厚之)



調査地位置図(平城京型復原 1/20,000)

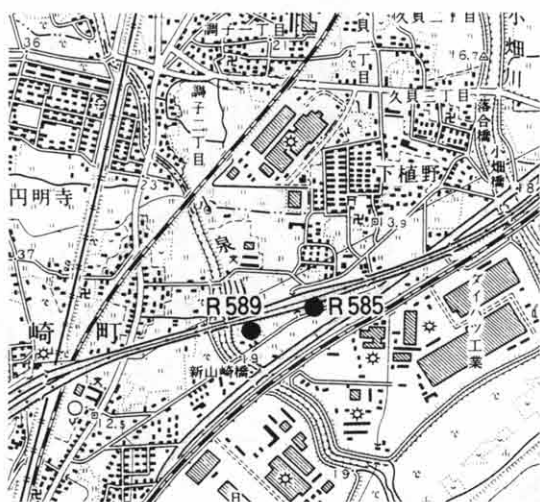
25. 長岡京跡右京第585次(7ANTGT-6)・第589次(7ANSKT-3)

所在地 乙訓郡大山崎町下植野五条本・円明寺門田地内
調査期間 平成10年1月17日～3月10日(平成10年度継続)
調査面積 約2,320m²(五条本地区 約120m²、門田地区 約2,200m²)

はじめに 今回の調査は、大山崎ジャンクション建設予定地内の発掘調査で、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。平成9年度は、五条本地区と門田地区の2か所で調査した。平城京型の復原によると、五条本地区が西一坊大路・右京九条一坊十三町、門田地区は右京九条二坊十二・十三町隣接地で、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である下植野南遺跡として周知されている。前者は、長岡京跡右京第585次調査で、後者は同第589次調査である。

調査概要 五条本地区の調査では、幅約10m・深さ約1.1mの南北方向の旧河道を検出した。この流路の最下層からは、弥生時代末から古墳時代前期の土器が出土し、周辺に同時期の集落跡の存在が推定される。門田地区の調査は、遺構面の清掃と下位の土層の堆積状況を確認したにすぎず、本格的な遺構の検出は次年度に行うこととなった。遺構面は、現在までのところ二面を確認している。上面は現地表下1.4～1.5mにあり、調査地の東半に褐色砂礫と灰色砂礫層が分布し、褐色砂礫層中からは黒色土器や緑釉陶器などの平安時代の遺物が出土している。この遺構面では、中世の湿地状の落ち込みの他、平安時代と考えられる土師器甕の埋納土坑や中世の井戸を確認している。この砂礫層の下位には、古墳時代の土器を包含する暗褐色粘質土が広く堆積しており、この時期の集落遺構が分布していると考えられる。

まとめ 五条本地区の調査では、長岡京関係の遺構・遺物は全く検出できなかったが、周辺に庄内期から布留期かけての集落が存在することがわかった。門田地区の調査では、名神高速道路



調査地位置図(1/25,000)

拡幅工事や大山崎町体育館建設に伴う発掘調査で古墳時代の集落や平安時代の掘立柱建物跡などが確認されている。下植野南遺跡の平安時代の建物跡群は、平城宮式軒丸・軒平瓦の出土や大形の建物の存在などから、第三次山城国府との関連が想定されるが、今回の調査地では数点の土器の出土はみるが、現在まで関連遺構は確認できていない。一方、古墳時代の集落の広がりについては、良好な包含層を認めており、調査地の南・東側にも分布している様相を示している。(岩松 保)

26. 城山遺跡

所在地 相楽郡木津町大字木津小字片山
 調査期間 平成9年6月17日～平成10年3月6日
 調査面積 約3,000m²

はじめに 城山遺跡は、木津川河谷により形成された山城盆地の南端で、木津の旧市街が広がる沖積低地の東に面する標高約100m・比高約60mの丘陵上に分布する。今回の調査は、関西文化学術研究都市の開発に伴い、住宅・都市整備公団の依頼を受けて実施した。調査は、「木津城跡」の広がりを目指すため、緑地として残される木津城主郭部分の周囲に試掘トレンチを設けて行った。その結果、各調査区とも中世の城郭に関連する遺構・遺物は検出されず、代わって弥生時代後期の遺物を含む遺構が広い範囲で確認された。このため、遺跡は重複するが「木津城跡」を含むより広い範囲を中世木津城と区別するため、新たに「城山遺跡」と命名し、条件の整った木津城主郭から南側にのびる主尾根の東側斜面を本調査に切り替えてその内容の究明を試みた。

調査概要 調査で検出された遺構は、弥生時代後期と古墳時代終末期に二分できる。前者には、竪穴式住居跡13基とそれを囲画するように掘られた濠状遺構3条、方形台状墓2基、古墳時代に属する遺構は、横穴系の埋葬施設を内部施設とする小円墳2基である。その多くは本調査地区で検出されたが、2基の台状墓は木津城主郭から北西にのびる尾根筋で確認した。

竪穴式住居跡は、一辺4～5mの隅丸方形プランのものが主体を占めるが、1基のみ平面円形を呈するやや規模の大きな住居跡もある。また、確認した住居跡の約半数は、傾斜地を敷地とするため、いわゆる半竪穴半平地式住居の形態を採る。火所として炉の痕跡を炭の堆積として複数の住居跡で確認している。柱穴については、各住居跡とも不規則に配され、主柱穴の抽出を難しくしている。出土遺物としては、土器類が少なからずみられ、中でも調査区南端の円形住居跡内覆土中から完形の素文鏡が1点出土し、その帰属する時期も含めて注意すべきである。

濠状の溝は、調査区の配置の関係で、全容をつかむことはできないが、1つは、住居跡群内を区画するように、主尾根に直交する方向に掘削された溝で、幅約1.6mの陸橋を付設する。後の時代の地形改変で本来の掘り込み面を失うが、幅3m以上で、深さも2mを越える「U」



調査地位置図(1/25,000)



調査地空中写真

字形断面の濠状の溝に復原できる。この溝からは弥生時代後期初頭の土器が多量に出土した。今ひとつの溝は、瘦せ尾根の頂部をやや下った位置で等高線と平行する方向に掘られたもので、幅約3m・深さ約1mの「V」字形断面を呈する。一部のみしか掘削していないが、他の弥生時代の遺構と異なり、埋土中から後期後半の土器が出土した。

方形台状墓は、尾根の軸線に沿って配した幅3mのトレンチで確認したため、全容はわからないが、尾根筋に直交する方向の幅約3mの溝が約20m間隔で3条検出された。溝に挟まれた空間で、複数の木棺直葬の埋葬施設を確認したことから、溝で墓域を区画した方形台状墓が中央の溝を共有して、2基東西に並んでいると判断した。遺構の有無の確認を調査方針としたため完掘していないが、区画溝内の出土土器から弥生時代後期前半に築造された可能性がある。台状部周縁に営まれた埋葬施設から獣帯鏡破鏡が出土しているが、土器との暦年代の比較で問題点を提起した。

2基の古墳は、調査区の東側斜面で、約30mの間隔で造営されている。標高の高い古墳の背後側にのみ周溝をめぐるせ、平面形が馬蹄形を示すことから、ともに直径約12mの円墳とみられる。内部施設は、横穴式石室であるが、石材はほとんど失われている。わずかに残る石材や抜き取り痕跡から、約50cmの小石材を用いた無袖の平面構造であったと考えられる。これらの古墳に伴う遺物は、玄室礫敷上から出土した鉄釘片数点のみで、土器などの副葬品は全く残されていなかった。

まとめ 今回の調査で検出した遺構のうち、弥生時代の遺構は、その立地環境や、溝のもつ防衛的な側面などから、典型的な高地性集落を構成する住居跡である。機能した時期は、出土遺物から弥生時代後期の前葉を主体とする。時期的な側面をみると、木津川流域でこれまで確認された高地性集落の多くは後期後葉を中心に営まれたもので、これらと同列に扱えない。むしろ、大和盆地の縁辺に早くに出現する高地性集落と軌を一にするとみられる。 (伊賀高弘)

誌上遺物展示

5. 京都市内出土の近世陶器

出土地点 今回報告する近世陶器は、当調査研究センターが1986～1987年に実施した、平安京跡(左京北辺三坊五町)の発掘調査で出土した^(注1)。所在地は京都市上京区烏丸通中立売上ル龍前町他である。この地点は、弥生時代前期の内膳町遺跡のあるところで、平安時代になると、諸司厨町の一つである内膳町が中立売通りを挟んだ南側に営まれていた。後に里内裏が東隣りにおかれ、中世後期になると、禁裏六町と呼ばれた有力町民の住する町の一つ(正親町)を構成していた。

安土・桃山時代には、この地は大きく変革する。すなわち、秀吉による聚楽第造営に際しては、聚楽第から御所までの間に、多くの大名屋敷がおかれ、金箔瓦を多用した豪華な街並みが創出された。

この地の調査でも多くの金箔瓦が出土した。特に、中立売通りに近い所では、垂木先瓦が多数出土した。中でも、「佐竹扇」と呼ばれる家紋瓦は注目される。これは東北の雄である佐竹氏の家紋でもあり、この関連は興味深い。また、多くの陶磁器も出土した。更に、銅製品を鋳造した可能性が高いことも明らかとなった。

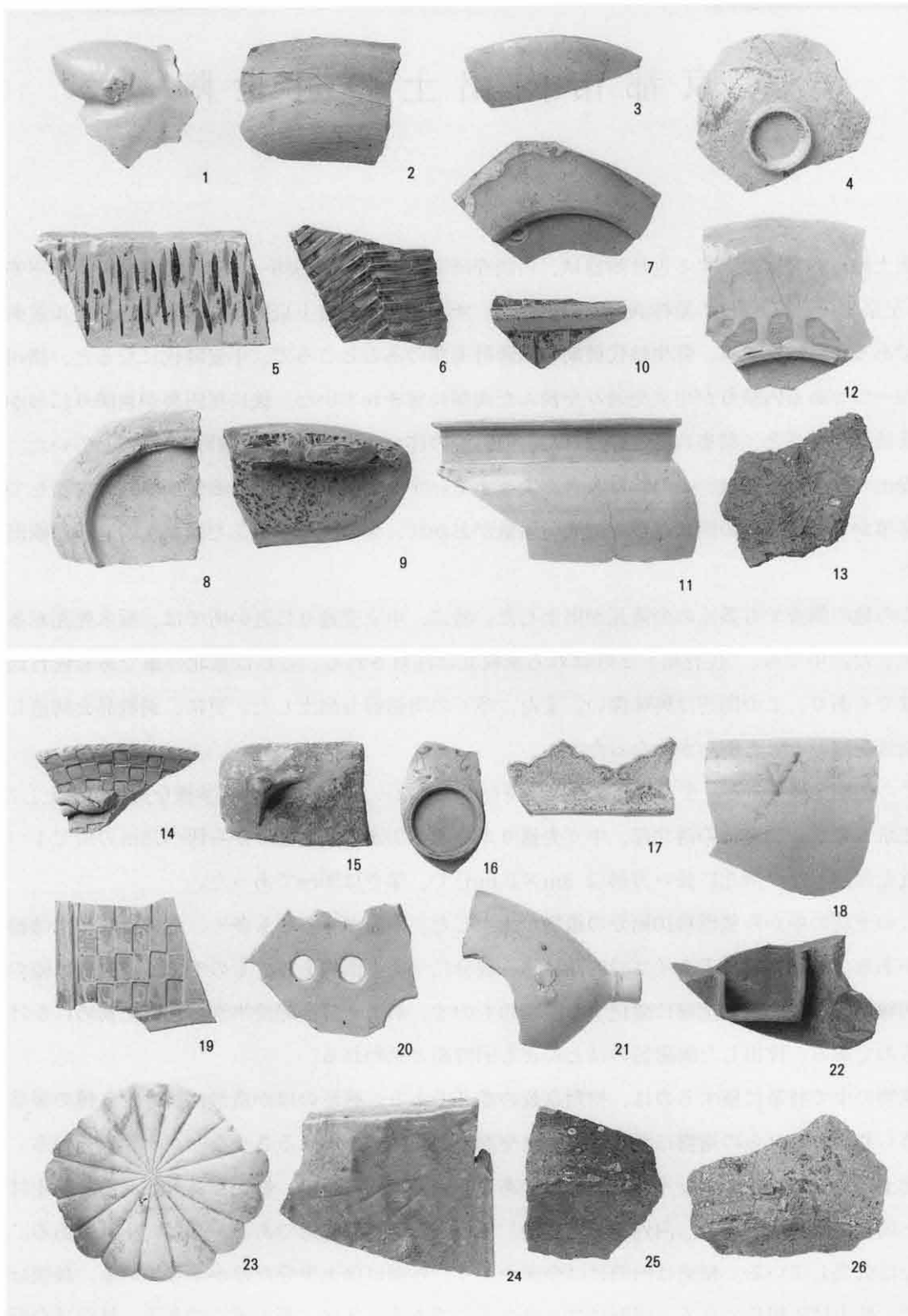
この時期を過ぎると、また、有力町民の住む場所となつたらしく、多種多様な遺物が出土した。

土坑SK2 調査地の西北部、中立売通から北へ50m、烏丸通から西へ75mの所で1つの土坑を確認した。南北に長い方形(2.3m×1.6m)で、深さは30cmであった。

この土坑の中から整理箱10箱分の遺物が出土した。陶器がもっとも多く、他に白磁や土師器などがある。土師器皿はIタイプ^(注2)で内面見込み部分に一条の圈線を施すものである。圈線は幅のある凹線から幅狭い鋭い沈線に変化する段階のもので、およそ17世紀後半から18世紀初めにかけてのものである。伴出した陶磁器のほとんども同時期と思われる。

遺物の中で特筆に値するのは、初期京焼の多さである。椀形のほか造形に長けた各種の製品が認められた。これらの遺物に混じって壁土や器の型、陶器を入れるさやなどが出土している。

出土遺物 1は、いちょうの葉様の皿である。釉調は灰白色で、細かな貫入がある。胎土は釉調と同様に灰白色である。内外面とも施釉している。型押し成形である。2は、小鉢である。上半分は欠失している。釉薬は内面には全面かかり、外面には上半分だけかかっている。釉調は灰色で、胎土は灰褐色である。成形はロクロケズリである。3は、蓋の破片である。外面は全面施釉で、内面は露胎である。釉調は灰色で、胎土は灰褐色である。4は皿である。内外面とも施釉されていて、釉調は灰色である。二次被熱されており、釉の表面は荒れている。高台は小振りである。内面に藍色で花文様を描いている。5は、造形品である。内外面とも施釉している。色味



S K02出土陶器類

のためのものかもしれない。長方形の表面に暗褐色と薄墨色で直線が描かれている。6は、壺もしくは鉢である。内外面とも施釉している。釉調は灰緑色を基調として、ところどころに青味が入る。外面には型押しによる矢羽文様が入る。胎土は灰色で、質はやや粗い。但し、砂粒は含まない。7は、小鉢と思われる。内面を施釉し、外面は口縁部のみ施釉している。釉調は灰色を基調として少し青味がかかる。口縁部は正円ではなく、斜めに切り込まれている。8は、皿もしくは小鉢である。形は楕円形で、高台を付けている。内外面とも施釉している。釉調は灰褐色を基調にし、少し黄色味がかかる。9は、造形品である。外面のみ施釉している。灰色を基調にし、少し青味がかかる。ところどころに茶色の釉薬が混ざる。置き物と思われるが、上部はほとんど欠失しており、どんな形かは不明である。10は、長方形の造形品である。内外面とも施釉している。釉調は灰色を基調にし、茶色が混ざる。11は、壺である。内外面とも施釉している。おふけ釉のような色合いである。釉調は黄色味が強い白色釉である。細かな貫入がある。12は、大きな皿の破片である。内外面とも施釉しているが、高台部分のみは露胎である。釉調は黄色味の混ざった白色である。高台は小振りである。ロクロ成形である。13は、壁土である。少し丸味を帯びており、おそらく、小規模な窯の一部と思われる。14は、造形品である。壺様で、口縁部外面に格子目の型押しを施し、中央部に絞った紐様の粘土を付着させる。内面を施釉している。釉調は薄緑色がかかった灰色である。15は、小鉢の部分である。おそらく焼成不良品と思われ、生焼けである。型作りで、底部には足が付く。16は、椀である。内外面とも施釉しているが、高台部分のみは露胎である。釉調はくすんだ灰色である。外面に青とこげ茶色の線で文様が描かれているが、何をイメージしたのかは不明である。17は、造形品である。上下とも端面であり、細長いものとなるが、あるいは、箱庭の橋をイメージした造形品かもしれない。上部は稜花となっている。内外面とも施釉しているが、釉の表面は荒れている。二次被熱を受けたものか。あるいは焼成不良品であろうか。下部にはコバルトによる文様を施している。18は、小鉢の破片である。内外面とも施釉している。なお、体部内面下半は露胎である。釉調は灰色を基調としており、細かな貫入がある。胎土は黄色味を帯びた灰色である。19は、長方形の造形品である。おそらく花生けと思われる。底部以外は施釉している。施釉部分には格子目様の型押しが施されている。釉調は灰色を基調に、少し茶色が混ざる。20は、蓋と思われる。平板で6か所以上に円孔を施している。外面を施釉している。釉調は灰白色を基調にし、少し黄色味が混ざる。内面には赤土部釉を施している。21は、小鉢である。植物をイメージしたもので、手に持つ部分の端面には刺突文を施し、蓮根の断面のようである。体部には縦筋が施される。釉調は白を基調にし、少し灰色味がかかる。1か所に足を付けている。22は造形品である。施釉はしない。端には長方形の小さな箱を設置している。井戸をイメージしたものか。これらはヘラケズリを多用して造形している。胎土は茶褐色である。箱庭の一種か。23は、浅い菊皿の型である。裏側には手に持ちやすいように十文字状の突起がある。素焼きである。24は、長方形の鉢である。内外面とも施釉している。外面の半分には緑色を基調にし、少し茶色が混ざる釉が施されている。25は、さやと思われる破片である。色調は暗褐色で、胎土には多量の白色砂を含んでいる。堅く焼きしまっている。26もさやと思われる破片である。

色調は赤褐色で、胎土には多量の白色砂を含んでいる。これも堅く焼きしまっている。

遺物の意味付け これらの遺物を意味付けしてみよう。年代観からいえば、17世紀後半から18世紀初めにかけてのものである。陶器はいわゆる初期京焼の範疇にはいるものである。さやや器の型、あるいは壁土を窯体の一部とすれば、まさしくこれらの遺物群は陶器の生産場所であることを証明している。

ここに一つの史料がある。それは『森田久右衛門日記』である。筆者である森田久右衛門は土佐の国の陶工である。いまでも知られる尾戸焼草創期の人である。延宝6(1678)年山内家四代豊昌の命により、江戸へ赴くことになり、その旅すがら諸国の窯を見学し詳細に日記に書き残した。7月に土佐を出発した久右衛門は8月18日には宇治の朝日焼を訪れた。19日には伏見から京へ入り、修学院御茶屋焼を見物し、20日には御室焼を見物する。窯も見学し7つあったことを記している。「唯今之焼手、野々村清右衛門と申也」とある。

野々村仁清のことである。21日には清水焼、音羽焼を見物し、23日に押小路焼を見物している。そして、24日の日記には以下の様にある。

「みそ路池焼見物ニ参 但御屋敷式里ほと御座候 加茂川を渡り参候 みそ路池と申在所へ参尋申候へハ 拾ヶ年以前ニ東加茂へ参三ヶ年ほとやき申候 今ハ京中立売西からす丸申所ニ居申候 名ハ左兵衛と申候とみそ路池在所之もの申ニ付 先東加茂へ参申候 則東加茂ニ釜所御座候見物申候 釜の様子ハ京おむろニ替たる儀も無御座候 (中略) 加茂見物仕それより京中立売西からす丸と申所之 町へ参見申候 見事ニやき申候あわひなり皿壺つ買参ル」

すなわち、みそ路池焼(御菩薩池焼ともいう)は、十年ほど前までは洛北にある深泥が池のほとりで焼いていたが、東加茂へ移り、今は京の中立売西烏丸(中立売通りと烏丸通りの交差点より西側)で商売していること。窯は東加茂で見学でき、その形は御室焼のそれと同じであったようだ。久右衛門は烏丸西で、見事な出来映えのあわびの形をした皿一枚を買っている。

今回紹介した遺物は、おそらくみぞろが池焼と思われる。この資料紹介が謎の多い初期京焼の実体に迫る一歩となれば、幸いである。

(伊野近富)

注1 伊野近富・石井清司・松井忠春・黒坪一樹「平安京左京北辺三坊五町発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注2 伊野近富「土師器皿」(『概説 中世の土器陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社) 1995

<参考文献>

中ノ堂一信『京都窯芸史』 淡交社 1984

なお、みそ路池焼については、調査時に三好 一氏、故立花正寛氏より教示を受けた。

長岡京跡調査だより・65

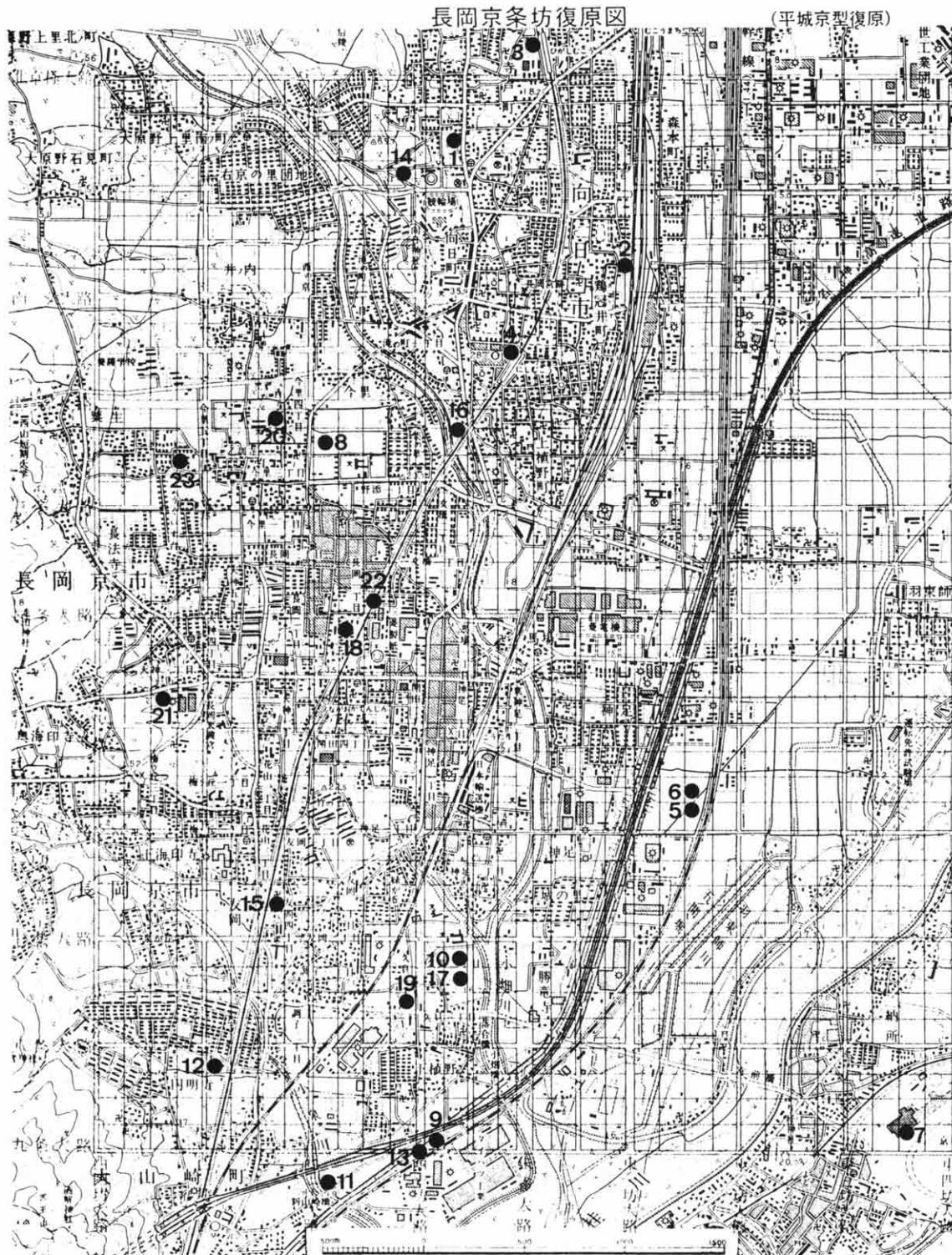
前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成10年2月25日、3月25日、4月22日に開催された。

報告のあった京内の発掘調査は宮内4件、左京域3件、右京域16件であった。京外の3件を併せると26件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。このうち、左京第407次の調査結果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

1998年4月末現在

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第356次	7ANBMC-6	向日市寺戸町南垣内45	(財)向日市埋文	1/6~2/6
2	宮内第357次	7ANEIB-4	向日市鶏冠井町一ノ坪2-1	(財)向日市埋文	2/26~3/6
3	宮内第358次	7ANBMC-7	向日市寺戸町南垣内55	(財)向日市埋文	2/26~3/6
4	宮内第359次	7ANFMK-13	向日市上植野町南開54-12・5	(財)向日市埋文	2/26~3/6
5	左京第407次	7ANMTD-4	長岡京市神足寺田1	(財)古代学協会・古代学研究所	7/7~3/28
6	左京第414次	7ANMTD-5	長岡京市神足寺田1-9・1-10・1-13・30-2、神足典薬1-5・1-7・1-12	(財)長岡京市埋文	10/1~
7	左京第417次	7AN	京都市伏見区納所大野京都競馬場内	(財)京都市埋文	3/3~4/21
8	右京第582次	7ANISF	長岡京市今里庄ノ湖32	(財)長岡京市埋文	10/27~12/26
9	右京第585次	7ANLTD-6	大山崎町下植野町五条本	(財)京都府埋文	1/19~2/13
10	右京第587次	7ANQKA-3	長岡京市久貝618他	(財)長岡京市埋文	12/1~98.1/22
11	右京第589次	7ANSKT-3	大山崎町下植野町門地内	(財)京都府埋文	4/13~
12	右京第590次	7ANSYS-3	大山崎町円明寺横林10-1	大山崎町教委	1/19~2/16
13	右京第591次	7ANTGT-5	大山崎町下植野五条本9・10・10-9・17-14	大山崎町教委	1/27~2/17
14	右京第592次	7ANBNN-2	向日市寺戸町中野16番地	(財)向日市埋文	1/23~2/12
15	右京第593次	7ANNSN-5	長岡京市友岡四丁目22他5筆	(財)長岡京市埋文	2/2~2/26
16	右京第594次	7ANFSR-5	向日市上植野町下川原18-8・41-2・61-1	(財)向日市埋文	2/3~3/17
17	左京第595次	7ANQKA-4	長岡京市久貝二丁目608-1・608-2	(財)長岡京市埋文	2/16~3/5
18	右京第596次	7ANKSN-7	長岡京市長岡一丁目407-7	(財)長岡京市埋文	3/2~3/13
19	右京第597次	7ANQKZ-2	長岡京市久貝一丁目129-1の一部・129-5・133-3	(財)長岡京市埋文	3/9~3/24
20	右京第598次	7ANIAE-11	長岡京市今里四丁目255-1	(財)長岡京市埋文	3/23~
21	右京第599次	7ANPHO-5	長岡京市天神三丁目1-5・210-10・210-12	(財)長岡京市埋文	4/6~4/16
22	右京第600次	7ANKYD-2	長岡京市長岡一丁目306-2・307-2	(財)長岡京市埋文	4/20~
23	右京第601次	7ANIHY-3	長岡京市今里彦林9-1	(財)長岡京市埋文	4/20~
24	笹尾遺跡第3次	7ASBKM-1	向日市寺戸町北前田29-2	(財)向日市埋文	4/21~
25	浄土谷遺跡第1次		長岡京市浄土谷箱谷32・36他	(財)長岡京市埋文	1/27~1/29
26	山城国府跡第48次	7XYS'RK14	大山崎町大山崎竜光29	大山崎町教委	3/17~



調査位置図

番号は一覧表・本文 () 内と対応

左京第407次(5)
(雲宮遺跡)

(財)古代学協会・古代学研究所

この調査地は、JR長岡京駅の東約800m、小畑川左岸の自然堤防上の標高11mに位置し、長岡京の左京六条二坊に相当する。発掘面積は約5,500m²に及ぶ。また、山城地方最古の弥生時代の集落跡として著名な雲宮遺跡の中心部にもあたる。これまでの調査で、竪穴式住居跡、焼土遺構、方形周溝墓や各種の弥生土器(壺、甕、鉢、高杯、朱彩土器)など、数多くの弥生・古墳時代から長岡京期、江戸時代に至る各時代の遺構や遺物が出土している。

顕著な発掘成果としては、調査トレンチの西側、中央部から弥生時代前期後半(紀元前3世紀頃)の環濠と思われる溝2条が検出されたことである。弥生時代前期の環濠は、長岡京跡左京第216次調査でも発見されているが、この環濠は、これに対応するものと考えられる。それと同時に、環濠に伴う柵列、橋跡も検出された。これらは、この遺跡が大阪府側の淀川西岸に点在する弥生遺跡と同じく、二本の環濠がとりまく拠点集落であったことをうかがわせる。また、調査地のほぼ中央部からは多くの丸太などの杭跡も発見され、この地点に川の流れを変える堰があったと考えられる。トレンチの南面には五角形の竪穴式住居跡1棟や焼土を伴う土坑が確認された。これらは一般的な住居の炉とは異なり、火を用いた何らかの生産活動の痕跡と考えられる。

これらの遺構の時期は弥生時代前期と思われるが、この時期のこのような遺構のあり方は他に類例が極めて少ない。また、焼土遺構群の東南側にはピット群が集中し、これらの生産活動にかかわる施設であったことが予想されている。この調査結果は、山城地方の前期弥生文化の解明だけでなく、西日本の弥生文化の波及の解明にとって大きな一歩となると思われる。

(米本光徳)

参考文献 (財)古代学協会・古代学研究所「長岡京左京第407次(六条二坊五・六・十一・十二町)発掘調査現地説明会資料」 1997.10.4

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧

(平成10年6月1日現在)

理事長	事務局長	木村 英男	
樋口 隆康	事務局次長	福嶋 利範・安藤 信策	
(京都府文化財保護審議会会長・京都大学名誉教授)	総務課	課長 福嶋 利範(兼)	
副理事長	主幹	安田 正人	
中澤 圭二	総務係長	安田 正人(事務取扱)	
(京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授)	主事	杉江 昌乃 今村 正寿	
常務理事		鍋田 幸世 岡田 正記	
木村 英男		西林 紀子	
理事	主査調査員	橋本 清一	
川上 貢		(府立山城郷土資料館へ派遣)	
(京都府文化財保護審議会会長職務代理・ 京都大学名誉教授)	調査課	課長 小山 雅人	
上田 正昭	第1課	企画係長 伊野 近富	
(京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授)	主査調査員	米本 光徳	
藤井 学	資料係長	小山 雅人(事務取扱)	
(奈良大学文学部教授・京都府立大学名誉教授)	主任調査員	松井 忠春・田中 彰	
佐原 眞	調査員	河野 一隆	
(国立歴史民俗博物館館長)	調査課	課長 安藤 信策(兼)	
足利 健亮	主幹	平良 泰久	
(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)	課長補佐	奥村清一郎・水谷 壽克	
都出比呂志	調査第1係長	水谷 壽克(兼)	
(大阪大学文学部教授)	主任調査員	引原 茂治	
井上 満郎	主査調査員	竹井 治雄 石尾 政信	
(京都産業大学法学部教授)	調査員	黒坪 一樹	
堤 圭三郎	調査第2係長	石崎 善久 村田 和弘	
中村 彰	主任調査員	福島 孝行	
(京都府府民労働部文化芸術室長)	主査調査員	辻本 和美	
西山 隆史	調査員	戸原 和人・増田 孝彦	
(京都府教育庁指導部長)	調査第3係長	岡崎 研一	
中谷 雅治	主任調査員	田代 弘 中川 和哉	
(京都府教育庁指導部文化財保護課長)	調査員	野々口陽子 筒井 崇史	
監事	調査第4係長	平良 泰久(事務取扱)	
安井 恒夫	主任調査員	竹原 一彦・岩松 保	
(京都府出納管理局長)	主査調査員	伊賀 高弘 森下 衛	
京極 隆夫	調査員	森島 康雄 柴 暁彦	
(京都府監査委員事務局長)		奥村清一郎(兼)	
		石井 清司	
		竹下 士郎	
		小池 寛 中村 周平	
		野島 永 藤井 整	
		松尾 史子	

センターの動向(10.2～4)

1. できごと

2. 4～6 奈良国立文化財研究所特別研修
「年代決定法課程」松尾史子調査員参加

6 内里八丁遺跡(八幡市)現地説明会
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿
ブロック主催者会議(於:奈良市)安藤
信策事務局次長、水谷壽克課長補佐出
席

7～8 第43回埋蔵文化財研究集会(於:
福岡県津屋崎町)村田和弘調査員出席

8 浦入遺跡R地点(舞鶴市)現地説明会

9 中澤圭二副理事長、浦入遺跡現地視
察

時事・人権問題特別研修(於:京都商
工会議所)伊野近富調査第1係長出席

10 上田正昭理事、太田遺跡(亀岡市)現
地視察

13 余部遺跡(亀岡市)発掘調査終了(6.2
～)

14 城陽市歴史民俗資料館講演会(於:文
化パーク城陽)小山雅人調査第1課長
「山城地方の形象はにわ」

16 都出比呂志理事、木津城跡・城山遺
跡(木津町)・内里八丁遺跡(八幡市)現
地視察

教員職出向職員研修「平安京」、講
師:堤 圭三郎理事、米本光徳・古瀬
誠三・竹下士郎主査調査員、八木厚之・
中村周平調査員受講

19 時事・人権問題特別研修(於:京都商工
会議所)小山雅人調査第1課長出席

20 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブ
ロック会議(於:京都パークホテル)木村
英男常務理事・事務局次長、福嶋利範・安
藤信策事務局次長、安田正人課長補佐、
杉江昌乃・今村正寿主事出席

森垣外遺跡(精華町)現地説明会

21 亀岡生涯学習川東市民大学(於:亀岡
市)安藤信策事務局次長「川東地域の遺
跡と町造り」

23 川上 貢理事、太田遺跡現地視察

24 太田遺跡現地説明会

25 川向古墳群(舞鶴市)関係者説明会
長岡京連絡協議会

26 城山遺跡現地説明会

浅後谷南城跡・浅後谷南遺跡発掘調査
終了(10.2～)

川向古墳群発掘調査終了(12.3～)

森垣外遺跡発掘調査終了(11.11～)

27 京都府公益法人等運営協議会(於:久美
浜町)福嶋利範事務局次長出席

28 第81回埋蔵文化財セミナー(別掲)

3. 3 太田遺跡発掘調査終了(10.29～)

6 条里制研究会(於:奈良市)森島康雄調
査員「精華町椋ノ木遺跡の方格地割り」
城山遺跡発掘調査終了(12.1～)

8 加悦町文化財シンポジウム(於:加悦
町)田代 弘調査員:基調報告「丹後の
弥生の玉と鉄」

10 内里八丁遺跡発掘調査終了(4.15～)

下植野南遺跡(大山崎町)発掘調査終了
(1.19～)

11 教員職出向職員研修「平安京・発掘業

- 務について」、講師：堤 圭三郎理事、米本光徳・古瀬誠三・竹下士郎主査調査員、八木厚之・中村周平調査員受講
- 13 成勝寺跡(京都市)関係者説明会
全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿地区第4回OA委員会(於：大阪市)土橋 誠主任調査員、森島康雄調査員出席
- 18 成勝寺跡発掘調査終了(1.9～)
- 19 浦入遺跡発掘調査終了(4.14～)
- 22 京北町文化財講演会(於：京北町)竹下士郎主査調査員「鳥谷古墳群の発掘調査について」
- 25 長岡京連絡協議会
第52回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、川上 貢、藤井 学、足利健亮、井上満郎、堤 圭三郎、梅野 宏、西山隆史、中谷雅治理事、高田慶久監事出席
- 31 退職職員辞令交付(別掲)
4. 1 新規採用職員辞令交付(別掲)
- 9 新規採用職員研修
- 11 浦入遺跡O地点関係者説明会
- 13 下植野南遺跡(大山崎町)発掘調査開始

内里八丁遺跡発掘調査開始

城山遺跡発掘調査開始

20 浅後谷南遺跡(網野町)発掘調査開始

21～22 堤 圭三郎理事、川向古墳群・浅後谷南遺跡現地視察

22 成勝寺跡発掘調査開始

長岡京連絡協議会

23 シミズ谷古墳群(弥栄町)発掘調査開始

28 川向古墳群発掘調査開始

2. 普及啓発事業

- 2.28 第81回埋蔵文化財セミナー開催(於：京都アスニー)—都城と官道—森下 衛調査員「古山陰道の発掘調査について」、野島 永調査員「長岡京左京域の発掘調査について」、吉川義彦関西文化財調査会代表「平安京朱雀院の発掘調査について」

3. 人事異動

- 3.31 八木厚之調査員退職(宇治市立木幡中学校へ)、西村 晃主事退職(京都府教育庁へ)
4. 1 石崎善久調査員採用(京都府教育庁から)、岡田正記主事採用(京都府立洛北高等学校から)

(安藤信策)

受贈図書一覧(10. 2～4)

(財)北海道埋蔵文化財センター	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第110集 滝里遺跡群Ⅶ、同第112集 鳴川右岸遺跡・桜町遺跡、同第113集 美沢川流域の遺跡群ⅨⅩ、同第114集 美沢川流域の遺跡群ⅩⅩ、同第115集 キウス5遺跡(3)、同第116集 キウス5遺跡(4)、同第117集 キウス7遺跡(4)、同第118集 ルルマップ15遺跡、同第119集 キウス4遺跡、同第120集 中野B遺跡(Ⅲ)、美々・美沢、調査年報9 平成8年度、同10 平成9年度
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集 泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書、同第248集 白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第252集 下辰前Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第254集 上甲子遺跡発掘調査報告書、同第256集 松本館跡発掘調査報告書、同第258集 板倉遺跡発掘調査報告書、同第259集 和当地Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第262集 田代遺跡発掘調査報告書、同第263集 柁の木遺跡発掘調査報告書
多賀城市埋蔵文化財調査センター	多賀城市文化財調査報告書第47集 八幡沖遺跡、同第48集 留ヶ谷遺跡、同第49集 大日北遺跡、同第51集 西沢遺跡、同第52集 高崎遺跡、年報 平成8年度
(財)茨城県教育財団	茨城県教育財団調査報告書第123集 大山Ⅰ遺跡、同第124集 仲郷遺跡、同第125集 西方貝塚、同第126集 番城内遺跡、同第127集 高野遺跡・前田村遺跡D・F区、同第128集 三反田下高井遺跡、同第129集 南小割遺跡・権現堂遺跡・親塚古墳・後原遺跡、同第130集 炭焼遺跡・札幌古墳群・三和貝塚・成田古墳群、同第131集 大橋B遺跡・釈迦才仏遺跡、同第132集 三度山遺跡・古屋敷遺跡、同第133集 熊の山遺跡、同第134集 神田遺跡、同第135集 矢倉遺跡・後口原遺跡、同第136集 大作遺跡・大畑遺跡、同第137集 星合遺跡・中ノ台遺跡
(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社	ひたちなか市の考古学Vol. 1
(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団	厨台No. 3 遺跡発掘調査報告書、原山塚発掘調査報告書、明地野館址遺跡、文太長者屋敷跡調査報告書、前野遺跡(1次)・前野3号墳(2次)発掘調査報告書、堀ノ内遺跡発掘調査報告書、棚木遺跡発掘調査報告書、鹿島町の文化財第67集 鹿島湖岸北部条里遺跡、同第70集 鹿島町内遺跡発掘調査報告ⅩⅡ、同第83集 春内遺跡、同第87集 大塚古墳周辺地区発掘調査報告書、同第90集 鹿島町内遺跡発掘調査報告ⅩⅥ、鹿嶋市の文化財第78集 鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告Ⅴ、同第79集 鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告ⅩⅡ、同第94集 片岡遺跡発掘調査報告Ⅱ、同第95集 鹿嶋市内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告17、同第96集 マツサキ遺跡、同第97集 大塚古墳周辺地区発掘調査報告書、同第98集 片岡遺跡発掘調査報告書Ⅲ、同第99集 国神古墳発掘調査報告書、同第100集 鹿嶋市内遺跡発掘調査報告書18、同第101集 御園生遺跡発掘調査報告書Ⅰ、藤原鎌足とその時代
(財)千葉県文化財センター	研究連絡誌 第49～51号、年報 No. 22、千葉県文化財センター調査報告第294集 流山市花山東遺跡、同第295集 千原台ニュータウン7、同第296集 流山市若宮第Ⅱ遺跡、同第297集 矢那川ダム埋蔵文化財調査報告書1、同第298集 酒々井町上本佐倉上宿遺跡、同第299集 佐倉市弥勒東台遺跡、同第300集 一本松遺跡・山田台No. 6-2遺跡・山田水呑遺跡・山田新田Ⅲ遺跡・山田新田所在馬土手、同第301集 東金市大関城跡、同第302集 成田市台ノ田Ⅱ遺跡、同第303集 干潟町道木内遺跡・椎木遺跡、同第304集 天神峰奥之台遺跡、同第305集 多古町一畝田甚兵衛山遺跡、同第306集 土木保守管理センター等埋蔵文化財調査報告書、同第307集 八日市場市借当川沼田泥炭遺跡、同第308集 千葉市武石遺跡、同第309集 村上遺跡群埋蔵文化財調査報告書、同第310集 君津市常代遺跡、同第311集 袖ヶ浦市大塚台遺跡、同第312集 佐倉市下勝田台畑遺跡、同第313集 本埜村大門遺跡
(財)東総文化財センター	(財)東総文化財センター発掘調査報告書第13集 三川倉橋前遺跡、年報1 平成3・4年度
(財)山武郡市文化財センター	(財)山武郡市文化財センター調査報告書第30集 藤ヶ谷遺跡・大平台遺跡・中ノ台遺跡・馬場A遺跡、同第38集 上吹入城跡、同第40集 森台遺跡群、同第47集 大綱山田台遺跡群Ⅳ、同第48集 稻荷谷Ⅱ遺跡、同第49集 鷲山入遺跡、同第50集 油井古塚原遺跡

(財)東京都教育文化財団 東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター調査報告第47集 多摩ニュータウン遺跡、同第49集 多摩ニュータウン遺跡、同第51集 多摩ニュータウン遺跡
(財)かながわ考古学財団	かながわ考古学財団調査報告20 吉岡遺跡群Ⅲ、同21 吉岡遺跡群Ⅳ、同27 池子遺跡群Ⅴ、吉岡遺跡群の発掘成果から、神奈川県立埋蔵文化財センター年報16
(財)横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター	市ノ沢団地遺跡(市立市沢小学校地区)発掘調査報告、市ヶ尾第二地区18街区(大場第二地区21街区)横穴墓群発掘調査報告、港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告22 能見堂遺跡、同24 鍛冶山遺跡
(財)長野県埋蔵文化財センター	(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書26 石川条里遺跡
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第17集 落合橋南遺跡Ⅱ、同第18集 八床9・10号窯跡
(財)滋賀県文化財保護協会	長浜ーいにしへ巡礼ー
(財)栗東町文化体育振興事業団 守山市立埋蔵文化財センター	栗東町埋蔵文化財調査1995年度 年報Ⅱ、同1996年度 年報 守山市文化財調査報告第36冊 経田遺跡発掘調査報告書、同第50冊 下長遺跡発掘調査報告書Ⅲ、同第56冊 平成6年度国庫補助対象遺跡発掘調査報告書
(財)大阪府文化財調査研究センター	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第17集 浜寺元町遺跡、年報2、第37回大阪府埋蔵文化財研究会資料集
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告55 久宝寺遺跡、同56 中田遺跡、同57 恩智遺跡(第7次調査)・郡川遺跡(第1次調査)・神宮寺遺跡(第1次調査)他、同58 跡部遺跡(第10次調査)・跡部遺跡(第11次調査)・跡部遺跡(第15次調査)他
奈良市埋蔵文化財調査センター	奈良市埋蔵文化財調査報告概要報告書 平成8年度、紀要1996、平城京東市跡推定地の調査XⅤ、平城京左京二条二坊十二坪、史跡大安寺旧境内Ⅰ 奈良市埋蔵文化財調査研究報告第1冊
(財)徳島県埋蔵文化財センター	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第16集 庄遺跡Ⅰ、同第17集 立善寺遺跡
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 鴨部・川田遺跡Ⅰ
福岡市埋蔵文化財センター	年報 第16号
上ノ国町教育委員会	上之国勝山館跡XⅡ～XⅧ、笹浪屋敷遺跡、夷王山墳墓群
白老町教育委員会	白老町虎杖浜遺跡群発掘調査概要報告書Ⅰ
仁木町教育委員会	仁木町埋蔵文化財調査報告書第1集 モンガクB遺跡
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第190集 高柳遺跡、同第198集 上ノ原山遺跡、同第218集 四郎丸館跡、同第219集 安久遺跡、同第222集 郡山遺跡、同第227集 郡山遺跡XⅧ、同第228集 仙台平野の遺跡群XⅦ
米沢市教育委員会	米沢市埋蔵文化財報告書第56集 金ヶ崎A遺跡発掘調査報告書、同第57集 大神窯跡発掘調査報告書、同第58集 東屋敷跡発掘調査報告書、同第59集 大浦A遺跡発掘調査報告書、同第61集 米沢遺跡地図、同第61集 遺跡詳細分布調査報告書第11集
郡山市教育委員会	郡山東部18～22、安子島城跡、夢田遺跡(第4次)・山田C遺跡(第1次)・岩ヶ作遺跡(第2次)、正直B遺跡、下羽広遺跡第3次、清水内遺跡1・2・3区、清水内遺跡4区、阿良久遺跡1区、阿良久遺跡第1次、音路瓦窯跡、西原遺跡群大島地区、大安場古墳群第1次、咲田遺跡赤木地区第5次、清水台遺跡第18・19・20次、鳴神・柿内戸遺跡第3次、郡山市埋蔵文化財分布調査報告3、同4
石岡市教育委員会	地蔵平遺跡・地蔵窪貝塚、峠遺跡、常陸国分尼寺跡発掘調査概報、鹿の子
前橋市教育委員会	大屋敷遺跡Ⅴ、上野国分寺参道遺跡、鶴光路練引遺跡、六供下堂木Ⅱ遺跡、宮地中田遺跡、小坂子油田Ⅰ・Ⅱ遺跡、稲荷前遺跡、総社愛宕山遺跡、小二子古墳、平成8年度市内遺跡発掘調査報告書
高崎市教育委員会	高崎市文化財調査報告書第147集 上小堀村東Ⅰ・Ⅱ遺跡、同第148集 南大類東沖・稲荷遺跡、同第149集 高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書11、同第153集 高崎市内出土資料整理報告書1、高崎市遺跡調査会報告書第54集 飯塚大道東遺跡、同第55集 高崎情報団地遺跡、同第56集 岩押町Ⅱ遺跡、同第57集 高崎城XⅣ遺跡、同第59集 上中居西屋敷Ⅱ遺跡、同第60集 大沢遺跡、同第62集 上中居荒神Ⅰ遺跡、同第63集 上滝榎町北Ⅱ遺跡、同第64集 上大類坂サ堰遺跡、同第65集 上並榎御料所Ⅱ遺跡、同第66集中尾村前Ⅵ遺跡、同第67集 飯塚大苗代遺跡、同第68集 上中居島薬師遺跡

東金市教育委員会	平成9年度 東金市内遺跡発掘調査報告書
富津市教育委員会	平成9年度 萩ノ作遺跡発掘調査報告書、平成9年度 富津市内遺跡発掘調査報告書
日野市教育委員会	日野市埋蔵文化財発掘調査報告40 日野市埋蔵文化財発掘調査輯報Ⅸ、同41 南広間地遺跡9、同42 七ツ塚遺跡1、同43 南広間地遺跡第40次調査、同44 南広間地遺跡第42次調査
武蔵野市教育委員会	吉祥寺南町3丁目遺跡B地点、吉祥寺南町1丁目遺跡I地点、平成8年度 武蔵野市埋蔵文化財調査報告書
府中市教育委員会	府中市埋蔵文化財調査報告第20集 武蔵野国府関連遺跡調査報告20
藤沢市教育委員会	藤沢市文化財調査報告書 第32集、同第33集
若草町教育委員会	若草町埋蔵文化財調査報告書第1集 角力場第2遺跡、同第2集 溝呂木道上第5遺跡
伊那市教育委員会	山の神遺跡、金鑄場遺跡
吉田町教育委員会	吉田町歴史年表
氷見市教育委員会	氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅴ 氷見市埋蔵文化財調査報告書第25冊
小杉町教育委員会	小杉町埋蔵文化財発掘調査一覽 1996年度、赤坂遺跡発掘調査報告
小松市教育委員会	額見町遺跡
多治見市教育委員会	根本遺跡Ⅱ 多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第43号、大原5号窯発掘調査報告書 同第48号、明和40・41号窯発掘調査報告書 同第49号、多治見市文化財保護センター研究紀要 第3号
大垣市教育委員会	大垣市埋蔵文化財調査報告書第6集 曾根八千町遺跡、同第29集 昼飯大塚古墳Ⅱ、同第30集 大垣市埋蔵文化財調査概要平成7年度、同第31集 昼飯大塚古墳Ⅲ、埋蔵文化財出土品展
豊橋市教育委員会	豊橋市埋蔵文化財調査報告書第37集 大海津遺跡(Ⅱ)、同第38集 若宮遺跡、同第39集 大西貝塚(Ⅲ)、同第40集 市道遺跡(Ⅱ)、同第41集 中村遺跡・作神遺跡
長久手町教育委員会	長久手町史 資料編五 考古
嬉野町教育委員会	嬉野町埋蔵文化財調査報告第14集 野田遺跡発掘調査報告書、墨・文字・顔
長浜市教育委員会	長浜市埋蔵文化財調査資料第18集 下坂氏館跡・大成亥遺跡・下坂中中世墓群、同第19集 神戸遺跡発掘調査報告書
草津市教育委員会	草津市文化財調査報告書第32冊 草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書
野洲町教育委員会	三堂遺跡発掘調査報告
大阪市教育委員会	大阪市の文化財 改訂第7版
泉佐野市教育委員会	泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告47 中ノ池遺跡、同48 上町遺跡、同49 若宮遺跡
羽曳野市教育委員会	誉田白鳥遺跡発掘調査概要報告書、古市遺跡群ⅩⅨ 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書35
加西市教育委員会	加西市埋蔵文化財調査報告20 保木山古墳群、同27 小谷遺跡(第6次)
橿原市教育委員会	橿原市埋蔵文化財調査概要13 橿原市埋蔵文化財発掘調査概報平成7年度、同14 橿原市埋蔵文化財発掘調査概報平成8年度
斑鳩町教育委員会	斑鳩町の古墳、斑鳩 藤ノ木古墳、斑鳩 藤ノ木古墳 第2・3次発掘調査概報
榛原町教育委員会	榛原町内遺跡発掘調査概要報告書1995年度 榛原町文化財調査概要18
御所市教育委員会	御所市社寺建築調査報告書 御所市文化財調査報告書第21集、鴨神遺跡第5次発掘調査報告書 同第22集、南郷西畑遺跡 同第23集
北条町教育委員会	北条町埋蔵文化財報告書24 町内遺跡発掘調査報告書第7集、同25 島遺跡発掘調査報告書第2集、同26 土下古墳群発掘調査報告書第5集、同27 島苺遺跡発掘調査報告書1
山口市教育委員会	山口市埋蔵文化財調査報告第64集 山口市内遺跡詳細分布調査、同第67集 赤妻古墳
徳島市教育委員会	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要7、三谷遺跡
宗像市教育委員会	王丸長谷遺跡 宗像市文化財調査報告書第44集、野坂新田 同第45集
遠賀町教育委員会	島津・丸山古墳群 遠賀町文化財調査報告書第9集
大刀洗町教育委員会	甲条北松木遺跡 大刀洗町文化財調査報告書第11集、高樋塚添遺跡Ⅰ 同第12集、下高橋馬屋元遺跡 同第14集
津屋崎町教育委員会	須多田古墳群 津屋崎町文化財調査報告書第12集
古賀町教育委員会	三田浦古墳 古賀町文化財調査報告書第16集、花見遺跡第4地点 同第17集、峠古墳群Ⅰ 同第20集、古賀町遺跡等分布等地図
福岡町教育委員会	古内殿古墳群 福岡町文化財調査報告書第7集、八並中原古墳群 同第9集、手光酒屋遺跡 同第10集、手光於緑遺跡
夜須町教育委員会	池田・黒水遺跡 夜須町文化財調査報告書第26集、松崎遺跡Ⅰ 同第28集、百万遺跡 同

	第30集、大坪遺跡 同第31集、松崎遺跡Ⅱ 同第33集、法福寺遺跡 同第34集、切杭遺跡 同第36集
新吉富村教育委員会	大ノ瀬下大坪遺跡 新吉富村文化財調査報告書第11集
佐賀県教育委員会	佐賀県文化財調査報告書第121集 東福寺遺跡、同第121集『東福寺遺跡』別冊
伊万里市教育委員会	伊万里市文化財調査報告書第42集 祐造坊たたら跡、同第43集 宮ノ前遺跡、同第44集 楠久御牧場跡
天水町教育委員会	天水町文化財調査報告書第1集 小塚古墳
三加和町教育委員会	三加和町文化財調査報告書第11・12集 田中城跡XⅠ・XⅡ、同第13集 西光寺跡
大分県教育委員会	飯田二反田遺跡、宇佐別府・日出ジャンクション関係埋蔵文化財発掘調査報告書、植田市遺跡、横山遺跡・尾畑遺跡、在古墳・浜遺跡
大野町教育委員会	大野地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ 酒井寺西遺跡・表遺跡・長寿庵遺跡
えびの市教育委員会	えびの市埋蔵文化財調査報告書第22集 昌明寺遺跡
東北歴史資料館	研究紀要 第23巻
土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場	長峯遺跡、入ノ上遺跡、石橋南遺跡、仏のすまう空間
千葉市立加曾利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第25号
出光美術館	館報第101、102号
府中市郷土の森博物館	武蔵野の春
調布市郷土博物館	埋蔵文化財年報 平成3年度、同平成5年度、調布市埋蔵文化財調査報告30 上石原遺跡、同33 下布田遺跡、同35 寺山遺跡・上石原遺跡
東京国立博物館	須恵器集成Ⅱ(東日本編)
横浜市歴史博物館	年報 平成8年度版
長野県立歴史館	年報 第1号
水見市立博物館	来世への旅立ち
福井県立博物館	紀要 第6号
福井県立若狭歴史民俗資料館	鳥浜貝塚研究1、紀要 第4号、常設展示図録
沼津市歴史民俗資料館	愛鷹山麓の縄文時代遺跡と縄文土器、沼津市博物館紀要22
常滑市民俗資料館	研究紀要Ⅷ
名古屋市博物館	あゆち湯の古代
斎宮歴史博物館	斎宮編年史料集2、そして土器は運ばれた、史跡斎宮跡 平成8年度発掘調査概報
大津市歴史博物館	年報 平成8年度
大阪府立近つ飛鳥博物館	館報3、こふんなぜなにブック、近つ飛鳥工房 人とかたち
八尾市立歴史民俗資料館	開館10周年記念誌、館蔵民具 衣食住の用具
吹田市立博物館	高山右近とその時代
東大阪市立郷土博物館	冥界への旅立ち、東大阪の社寺名宝
兵庫県立歴史博物館	館報 1996、塵界 第9号
播磨町郷土資料館	館報 平成9年度
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	それからの飛鳥
橿原市千塚資料館	藤原京一最近の調査成果より一
出雲玉作資料館	有ノ木遺跡発掘調査報告書
広島県立歴史博物館	医師 窪田次郎の自由民権運動、戦国民衆と中国地方
新市町立歴史民俗資料館	備後緋
福岡市博物館	平成6年度収集 収蔵品目録12、研究紀要 第7号、年報 第4号
伊都歴史資料館	川原川右岸地区遺跡群Ⅰ 前原市文化財調査報告書第57集、荻浦 古墳編 同第58集、平原周辺遺跡(6) 同第59集、平原周辺遺跡(7) 同第61集、三雲・井原遺跡群調査概要(1) 同第62集、三雲・井原遺跡群Ⅰ 同第63集、福岡雷山ゴルフ倶楽部建設に伴う埋蔵文化財調査の速報1、同2、上籬子遺跡
佐賀県立博物館	日本の古墳 僕が調べた歴史の謎
鹿児島市立ふるさと考古歴史館	鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書22 滝ノ上火薬製造所跡、同23 祇園之洲砲台跡

- 東北学院大学学術研究会
山形史学会
立教大学学芸員課程研究室
東海大学
東海大学史学会
愛知学院大学文学会
愛知大学文学部史学科
名古屋大学年代測定資料研究センター
名古屋大学文学部考古学研究室
滋賀県立大学人間文化学部
滋賀大学教育学部考古学研究室
大阪大学文学部
大谷女子大学資料館
大手前女子大学
関西学院大学文学部史学科
奈良大学図書館
帝塚山大学考古学研究所
- 朝霞市泉水山・下ノ原遺跡調査会
山武考古学研究所
府中病院内遺跡調査会
目黒区大橋遺跡調査会
(財)角川文化振興財団
(財)韓国文化研究振興財団
宮内庁書陵部
国立国会図書館
雄山閣出版(株)
遺跡調査団
滋賀県安土城郭調査研究所
- (財)泉屋博古館
(財)古代学協会
名神高速道路内遺跡調査会
- (財)大阪府市町村振興協会
姫路市立城郭研究室
奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
朝鮮学会
宮内庁正倉院事務所
(財)鳥根県並河萬里写真財団
津山弥生の里文化財センター
博物館等建設推進九州会議・編集委員会
- 東北学院大学論集—歴史学・地理学—第30号
山形大学史学論集 第18号
Mouseion43
東海大学校地内遺跡調査団報告 8、注口土器の美
東海史學 第32号
文学部紀要 第27号
愛大史学—日本史・アジア史・地理学—第7号
名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(IX)
名古屋大学文学部研究論集131 史学44、考古資料ソフテックス写真集 第13集
人間文化4号
滋賀史学会誌 第10号
待兼山論叢 第31号
田東山 大谷女子大学資料館報告書第39冊
大手前女子大学論集 第31号
関西学院史学 第25号
奈良大学紀要 第26集
シンポジウム 吉備池廃寺をめぐる
泉水山・下ノ原遺跡Ⅶ
年報 No. 15
府中病院道路拡張に伴う試掘調査報告書Ⅰ
大橋遺跡
古代国家はこうして生まれた
青丘学術論 第12集
書陵部紀要 第49号
日本全国書誌 第5号(通号2164号)、同第14号(通号2173号)
考古学による日本歴史12 芸術・学芸とあそび
咳止橋遺跡
特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅰ、同Ⅱ、特別史跡安土城跡発掘調査報告4、安土城・織田信長関連文書調査報告4、特別史跡安土城跡 発掘調査の5年、年報 1994年度、研究紀要 第3号
紀要 第十四卷
古代文化 第50巻第2～4号
名神高速道路内遺跡調査報告書第3輯 梶原瓦窯跡発掘調査報告書、同第4輯 梶原古墳群発掘調査報告書
大阪の弥生遺跡の検討
城郭研究室年報 Vol. 7
芝ノ前遺跡 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第53冊、宮滝遺跡(遺構編) 同第71冊、一ノ谷遺跡 奈良県文化財調査報告書第74集、別所谷遺跡 同第75集、大和の前期古墳Ⅱ、史跡新沢千塚古墳群整備事業報告書、奈良県遺跡調査概報 1994年度(第1分冊)、同(第2分冊)、年報22 平成7年度、考古学論攷 第21冊
律令国家の地方末端支配機構をめぐる、古代都市の構造と展開
朝鮮学報 第164～166輯
正倉院紀要 第20号
季刊 文化遺産 第3号・春・夏号
津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集 有本遺跡・男戸鳴古墳・上遠戸鳴遺跡、同第63集 日上畝山古墳群、年報 津山弥生の里第5号
文明のクロスロード Museum Kyushu 季刊第15巻・第4号

京都府教育委員会	京都の文化財(第15集)
京都市文化市民局	京都市の文化財(第15集)
弥栄町教育委員会	京都府弥栄町文化財調査報告書第12集 やさか丹後王国の郷整備事業に伴う発掘調査報告書、同第13集 縁城寺旧境内隣接地遺跡発掘調査報告書、同第14集 京都府弥栄町遺跡地区妙喜庵 大山崎町埋蔵文化財調査報告書第15集、同第16集、長岡京跡右京第578次調査概報 同第17集
大山崎町教育委員会	
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書第32～35集
京都国立博物館	京都国立博物館蔵 和鏡
大山崎町歴史資料館	館報 第4号
宇治市歴史資料館	宇治文庫9 宇治の道
城陽市歴史民俗資料館	古代人との出会い
京都橘女子大学	研究紀要 第24号
佛教大学総合研究所	紀要 第5号、紀要 別冊「宗教と政治」
京都府立亀岡高等学校	久遠の和
京都府	土地分類基本調査 福知山・但馬竹田・篠山
足利健亮	地域と環境 No. 1
大野左千夫	和歌山市立博物館研究紀要12
河野一隆	地域相研究 第23、24号
土橋 誠	じんもんこん 第5号、シンポジウム「人文科学における数量的分析(3)」、1997年度「人文科学とコンピュータ」テキスト処理、人文科学とコンピューターデータベース
中尾芳治	おもしろアジア考古学
中川和哉	韓国のうちわ、高麗・朝鮮時代の陶器
濱田延充	大阪の弥生遺跡 I
福田正継	百間川の遺跡群、発掘された久田の埋蔵文化財 I
山田邦和	須恵器生産の研究
国立中央博物館	韓國古代の土器、光復以前博物館資料目録集、朝鮮時代古文書

編集後記

情報68号が完成しましたのでお届けします。

本号は、今年度の最初の情報でありますので、昨年度の調査概要を掲載しました。また、本号には、投稿原稿として宇治市庵寺山古墳出土の鉄製農工漁具についてのものと、中世菌部城に関する論考などを掲載することができました。さらに、職員の日頃の調査・研究成果なども載せることができ、本号も充実した内容になっています。よろしく御味読ください。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第68号

平成10年6月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)

【京都府埋蔵文化財情報】 第68冊 正誤表

頁	項目	位置	誤	正
17	本文	下から4行目	(第2図)	(第1図)
17	第1図	図のキャプション	1. 浅後谷南遺跡・浅後谷南墳墓	1. 浅後谷南遺跡
18	本文	上から4行目	国営農地郷1団地……	丹後国営農地郷1団地……
19	本文	上から6行目	決られている	決られている。
21	第1図	図のキャプション	(●印は古墳)	(第1図中の●印は古墳)
36	本文	下から14行目	種定分類のⅡ形	種定分類のⅡ式



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER